

俳諧無言抄 翻刻と解説

その一 翻刻

凡 例

一 本稿は梅翁著『俳諧無言抄』の翻刻である。

二 国書総目録によると、『俳諧無言抄』は次のようである。

七卷七冊

(別)無言抄 (類)俳諧 (著)梅翁

(成)寛文一二自序、延宝二刊

(写)京大額原(版本写五冊) (版本写一冊)・東北大(「宗因無言抄」、東大蔵本写七卷一冊)・天理綿屋(巻七、版本写一冊)

(版)東大・天理綿屋(巻二欠、六冊)

三 本稿の翻刻に用いた原本は、東京大学総合図書館蔵本(旧洒竹文庫蔵本)である。ただし、同書は序文に相当する箇所と第二冊

宮* 坂 敏 夫
東* 明 雅

二十一丁めが欠けているので、前者序文に関しては、天理図書館綿屋文庫蔵本(版本)、後者欠如部分(本文二十九頁「風」、同前也(詩に))には、その箇所を『俳諧新式評』(加納梅翁述、岐阜県立図書館蔵写本)で補った。『俳諧無言抄』と『俳諧新式評』との関係はその二、解説で触れる予定である。

四 翻刻にあたっては、原本の面目を尊重したが、次のような方針に従った。

1 漢字について

イ 行草体の漢字は楷書体に改めた。

ロ 異体字に関し、別表のようなものは、現行の通用の文字に改めた。

ハ 旧字に関し、現行の通用の文字がある場合には、現行の文字に従った。

2 仮名について

イ 仮名文字は現行の字体に改めた。ただし仮名遣、送り仮名は原文通りである。

ロ 濁音については、濁点のあるところないところかならずしも統一されていないが、原文通りである。また振り仮名についてもすべて原文通りで一切手を加えなかった。

3 句読点について

イ 原文には一切ないが、読み易くするため、適宜句読点を施した。

ロ 中黒点は用いず、句読点ですべて統一した。

4 通し番号について

原文にはないが、解説や検索の都合の上から用語に通し番号を施した。

5 本稿の翻刻に関し、原本の翻刻を許された東京大学総合図書館、並びに閲覧の便を与えられた京都大学図書館、天理大学図書館、岐阜県立図書館のご厚意に感謝申し上げます。また原稿

整理に助力された成城大学大学院生蜂須賀薫君にもお礼を申したい。

俳諧の連哥はいまの世のはやり物にて、京も夷もたつ子はふ子まで翫に折をへたです、口すさふにさきりひなし。うくひすの山類を出てたかい植物に吟し、蛙の水辺をはなれずして駄用の外にとひ作をたくむも、この道時至れるからにやと思ひなし侍ぬ。野生も

わか業にはあらされと、友に引れて或席に交しより、破衣のかた心にかゝりて、花の散にはつねならぬためしをおもひ、月の入には終に行身のはとを観して、六字となふるひまゝには五もし七もしをもつふやき付き。されは古来の制を尋に、中興貞徳、連哥無言抄に対して俳諧御傘をつくれり。これよりふたつの道、水と波とに立分ぬ。然に此翁は紹巴の門弟ながら、師にことなる筆力あり。こゝにをいてその師弟のかはれるこゝろをいふかしうおもひ侍に、去人、新式の抄を授しよりこの旨に引くらへてまされたる筋道を正し、又年比小耳にはさみ置し先輩の説々を考合て、ふたつの書のうち、是とおもふところを一とをり取たて、わたくしにしるせば、己に一巻と成ぬ。此ゆへに御傘のかみに置る字と、楚仙のあめりし書の名とをとりあはせて俳諧無言抄と号しき。略してはいむこんと云。なを世に君子在してわか僻るところを改給は、大に道の助なるへし。

寛文壬午南長閑

濃州信濃守住



い

1 岩船 天神地神駕し給舟也。日本紀に載之於天磐椽樟船而順風放棄と見え侍也。伊弉諾伊弉冊尊 蛭児尊を産給に三歳まで

御足たゞされは岩舟を造て流し給也。歌、

父母はいかに哀と思ふらん三年に成ぬ足立すして

それより蛭児は摂州西ノ宮に着て、つりたれてゐ給し也。岩舟と云は、くすの木にて舟をつくれは、年へて岩に成也。扱岩舟は神代の事なれば、連歌にては水辺になさず。然とも船の字には、常のことく七句去也。俳諧には五句去へし。岩には連俳ともに折きらふ也。

(一〇)

2 伊勢の神 新式に名神非二名所と云事侍也。是に付て両説有也。

先は伊勢の神といへは名所、天照神と云は名所にあらすと云り。

異説には伊勢の神、北野の神といひても名所にあらす。たとへは山賤といへは、山の字は有なから賤か名に成て、山類にあらさることしといへり。此両説いかん。答、惣して神道も一往にかきらす、むかしより所の名を神の御名に申事有。又所々へ勧請申て、その神の御名を所の名に云事も侍也。八幡住吉などのことし。かやうの神々は句によりて名所のかるべき也。句躰やもしにしろし侍也。又伊勢の神、北野の神といひては名所也。是は他所へ勧請して、いせの神、北野の神と、先々にて申さるるか、則神の御名にあらぬ証拠也。畢竟伊勢の天照大神、奈良の春日、北野の天神と云時は、名所と神の御名とは分明に聞ふる事也。名神と云を名の神とは心得ずして、名所の神と思ふはひか事也。山賤の山類にあらぬは各別の事也。山の神は山類也。水神は水辺也。然は右両説の内、始を是とすへき事勿論也。

(一一)

3 放生 神祇也。水辺也。夜分也。生類に打越きらふ也。放生とは神功皇后、新羅、百濟、高麗の三韓をせめ給時、海龍へ魚を取ましきと誓約有し也。是より無事に三韓退治したまひて、たひ／＼魚をはなち給事有し也。扱放生会の事は、養老四年に始也。神功皇后よりは四百年の後也。又今の放生川と定りしは、男山のふもと也。是は養老よりは百余年の後、貞觀元年に南都大安寺の僧行教、宇佐八幡に一夏こもり給に、行法神慮にかなひ、夢に告給は、師王城に帰らは、神も友ひ給て、都の守神と成給はんと有。それより行教のほりて山崎に着給へは、鵠峯に移り給はんと再び告有しゆへ、帝へ奏し奉れば、

宇佐の社のことく新宮御建立有し也。扱行教八幡の本身を拝奉らんと祈給へは、弥陀、観音、大勢至、けさの上に影をうつし給より、内殿に三尊を安置し奉りし也。それよりふもとの川にて、毎年八月十五夜に此会有也。この川を放生川と云也。扱名所ばかりの句体ならは、夜分にも秋にも生類にも嫌すとしるへし。他准之。(一二)

4 斎宮 伊勢にては竹ノ宮、賀茂にてはありす川の御所を申也。扱いせの事に斎宮と出たらは、折かへて、賀茂の事に斎院なと有へし。又賀茂の事にいつきの宮と出たらは、いせの事に斎宮と成とも、竹宮と成共有へし。賀茂の事はかもしにしろし、竹宮の事はたもしに注侍也。(一三)

5 家 一座四句也。俳にはよみこゑの内に今一加へし。四句の物までは折嫌也。(一四)

五句の物からかはりたる物うらに有也。他准之。

6 家風 居処に打越きらひ、風体に二句去也。風躰はあらし、木枯等也。打越嫌と云も、二句去と云も、同じ嫌やうなから、並て付句にする物を打越嫌と云。付句にならざる物を二句嫌と大かたすゑくも云分侍也。又家風、連俳ともに家に面きらひ、風には字去也。字去とは連に五句、俳に三句去也。かろき同字をかやうに去ゆへに云也。(24オ)

7 出家 出家の事なれば尺教也。居所にあらす。惣して庭軒等の常の居所も尺教、神祇、皇居等にむすひては居所をのかるゝと知へし。(24オ)

8 稲葉 只一。遅稲一也。俳には稲と又有へし。いなつまも右の内也。いなひかりは稲に二句去也。稲荷などは折かへて又有へし。(24ウ)

9 稲妻 月日にきらはず、妻には連俳共に折嫌也。初秋也。天象植物等にあらす、いなひかりには連俳共に折嫌也。又稲妻は霧の内はかりの物也。(24ウ)

10 稲簾 秋也。植物也。袖中抄に田舎を云とも、川底の短草のむしろきたるやうの物を云とも、稲こくとて敷簾を云とも、旅に成とも有也。句躰によるへし。おほくは稲の面のむしろ敷たるやうなるを云との説を用來也。(24ウ)

11 稻負鳥 秋也。稻三の内也。惣していなをふせ鳥、よふこ鳥やうの物、伝受なき内は、書物にてたとひそれと見及とも、心にまかせぬか法也。

山田守秋のかりほに置露は稻負鳥の涙也けり
袖中抄に秋の田に夜来て鳴鳥と云り。

逢事を稻負鳥の教すは人を恋路に迷はさらまし
是は庭たゞきと云り。(25オ)

12 電 雑也。夜分に非ず。雷に折嫌也。天象にあらす。光の字連に面、俳に七句去也。(25オ)

13 市 只一。名所に一也。俳にはよみこゑの内に今一有へし。名所に二はなし。(25ウ)

14 岩 只一。いはほ一、石一也。岩つゝし等此外也。俳に今一有へし。石と二も有也。礎は此外也。石に折きらひ、岩に面去也。岩石などに砂、真砂、俳にて七句去也。岩つゝし、岩に折きらひ、石に面去也。(25ウ)

15 石清水 岩のはさまより出水也。石に連に面嫌ひ、俳に七句去也。又八幡の事を申也。句によりて名所也。此外清水又有也。(25ウ)

16 泉 泉殿等夏也。黄泉は冥途の事なれば、いつみの心なし。付句も嫌す。但泉水、黄泉などゝ同じこゑにいへは、心はかはれとも面去也。又よみの時も同前也。是を同字別訓と云也。他准之。(25ウ)

17 命 只一。生類に一。玉緒又有也。いづれもか様の物述懷也。俳にいひかへて今一有也。又命に存命、付へからす。又命に勅命は右の段にしろし侍、同字別訓也。付句も嫌へからすと知へし。(26オ)

18 庵 只二。いはりくゝと二はなし。俳にはよみこゑの内に今一加也。(26オ)

19 晚鐘^{イシツツ} 入の字、相の字に二句去也。夕も暮も付さる也。晚鐘と過て、かね霞は連俳ともに有へからず。(二6ウ)

20 漁^{イサリ} 水辺也。夜分也。連に火に面きらひ、俳に七句去也。(二6ウ)

21 妹背^{イモセ} 人倫也。恋也。妹かりに連俳共に折きらふ也。いもかりとは、妹かあたりと云事也。夫婦なとも折嫌也。又妹背山、恋の外に又有へし。(二6ウ)

22 色^{イロ} 野山の色にても、赤き心有は、紅葉付へからず。水、波、雪などの色には付てくるしからず。(二6ウ)

23 色鳥^{イロトリ} 秋也。色々の鳥也。春山中にかへりて、秋又来也。(二6ウ)

24 犬^{イヌ} 只一也。俳には物の名に又有へし。折かへて日よみに又有也。(二7オ)

25 池^{イデ} 只一。名所に一也。はいには只の内に今一有へし。(二7オ)

26 いつく^{イツク} 二。いつこ、いつちに一つ、四也。俳にはいつれなりとも今一有也。但同じことは一つ折に有へからず。右の詞に何、なそなど二句去也。何と何、なそとなその間字去也。又いか、なんそ等は三字かな也。嫌ひやうはみもしにるし侍也。(二7オ)

27 いっしか^{イツシカ} 只一。俳には句の所かへて今一有へし。何、なそ等二句去也。(二7オ)

28 いかにせん^{イカニセン} 上の五文字に置也。いか、せんは下五文字に置也。いつれも一つ、也。中には又有へし。連俳同前也。(二7ウ)

29 古^{イメシ} 只一也。俳には今一有也。上古中古等も二の内也。古人古跡はふるぎと云心なれば、いにしへに字去也。むかしは二句去也。

(二7ウ)

30 生田^{イナタ}に 森と付て又森の名所かくしても有へからず。又たとへはあらしと云句に山と付て、又次に山の名所付へからざる也。取なしの三句わたり也。(二7ウ)

31 幾^{イツ}に 何、なそ、いつら等付句嫌也。(二7ウ)

32 いふに^{イフニ} かたるてふ等二句去也。(二7ウ)

33 衣裳^{イシヤウ}の色の花木 新式の心は山吹色は春也。朽葉^{クハ}は冬也。あらゆる花木ともにそれ／＼の季を持也。然とも植物にはきはらず。委絵の字の下にしるし侍也。(二8ウ)

ろ

34 楼^{ロウ} 一座一句也。連に高樓^{タカロウ}とつかふ也。家のたかきを楼と云、ひろきを閣^{カク}といふなり。(二8オ)

は

35 花^{ハナ} 連俳ともに四句也。句の有所はいつくにもくるしからず。うらの十三句めを定座とする也。十四句めにはなき也。委はおくにしるし侍也。(二8ウ)

36 花^{ハナ}に 桜、連に面きらひ、俳に七句去也。又連俳に花と云は桜の事なるゆへに、付句きらふ也。然とも付やうに習有と云は、花の袖、花の姿などの植物に打越嫌ふ花には付也。まことの花にあらぬゆへ也。なを口伝有也。(二8ウ)

37 花に 吉野付る事きらひ、吉野に花は付也。問、名物に名所付すと云事也や。答、付と付さる差別有也。先花に吉野の事、むかしは付し也。此故に咲花には春雨、春風、長閑、霞等を吉野にむすひて付、ちる花にはあらし春風、春雨など吉野にむすひて付侍は、たひく同じ句聞古し、花といへは吉野と云句、人々の心にあるゆへ、中古よりきらひ来也。付合は他人と中よきやうにあらまほしと先輩の金言也。萩に宮城野、紅葉に龍田、月にをはすて、かやうの物きらひ来也。その外の名物に名所は連にきらはす。ことに俳諧には諸国の名物、珍物、新しき事のみ聞侍は、もとより付へき事勿論也。その内にも、たとへは夏の雪など云に富士を付むは、花に吉野の類ひ也と知へし。問、しからは吉野に花をも付ましき事なるに、是は付る事如何。答、花に吉野付る句は、花よりよひ出すゆへめつらしき句出す、又吉野に花付よと云は、山川、名物、古事おほく侍ゆへ、花におもひかけもあらさる句には付ても苦しからずと知へし。たとへは花に桜は付共、桜に花は付さることし。尚口伝。(二九オ)

38 花紅葉 雑也。惣して両季の物はつよきかたへ引るゝ也。句、

手折なよ紅葉にも見む花の枝 是は春也。

吹や風花ももみちもなつの庭 夏也。

紅葉にも花の姿を残し置 秋なり。

雪にけさ花も紅葉もおもひ出 冬也。

詠哥は花やもみちのえにふれて 雑也。

かやうの句躰万事に准て知へし。(二一〇オ)

39 花の滝 正花也。水辺也。植物也。新式可分別物の処に見え侍。滝のこたく落る花をも、花のこたくおつる滝をも、花中におつる滝をも、又滝をほめても云也。句躰によるへし。(二一〇オ)

40 花の雲 正花也。そひき物也。是も新式可分別物の処に見え侍なり。花を雲と見立も、雲を花と見立も句躰によるへし。(二一〇ウ)

41 花の波 正花也。水辺也。植物也。波の花は正花にも植物にもあらす。(二一〇ウ)

42 花の雪 正花也。植物也。降物にあらす。雪の花は降物也。正花にも植物にも春にもあらさる也。(二一〇ウ)

43 花の散に 葉のおつるは付へからす。外に物かはらはくるしからす。(二一〇ウ)

44 花にむすふ 旅の字、野山を分してもたひにあらす。たもしに句法有也。(二一一オ)

45 花園 春也。正花也。園はかりは居所に打越きらへと、花園は本居所也。又名所は春にも植物にも正花にもあらす。(二一一オ)

46 花の香に 袖の香、人香など、連に折きらひ、俳に面去也。一方句といへは、俳に七句去也。香も同前。(二一一オ)

47 作花 糸にかく花、ほり物等の花、正花也。春也。植物にあらす。(二一一オ)

48 花の姿 花の縁等、恋にあらす。花にむすふ恋の句、伝受なくは有へからす。(二一一オ)

49 花野 秋の草花也。正花にあらす。句法はくもしに注侍也。又花

野といふに萩、薄付へからず。(二11ウ)

50 花田色 正花にあらず。縹緲とかく也。花に字去也。雑也。文選木玄虚海賦に神仙縹緲、三玉清涯、海上をはるかに見たせは、その色と同色に青くみゆるを縹緲と云也。絹布の類を青くそら色にそむるを花田と云也。花田の帽子も俗に花のほうしと云、同事也。

(二11ウ)

51 花筏 花籠などするすにいとまあらず。惣して俳諧と云文字の出処を考て侍は、唐に熟語もなき事を私につりておかしくつくる詩を俳諧と云也。然は和にもたとへは、はたと云詞さへあらは、たとひ天狗のはなにて、立入ひかけて花になさは、なと花にならざらんや。是此道の本意なるへし。万世に尽さるはことのはなれば、此道に入てこゝろの奥の花ノ洛にあそはん人は、彼仙境に入て四序鎮に自由にはなみるごとく、月花の句も無尽の作意有へき物ならし。書にあらはすは、大海をはかるに一滴をあくることし。殊に此書のこときは、をのれと思ふも多是誤り侍らん。なればしめて証にしたし。此道に入たまふ人は博にわたりて危をかき給へし。惣して書にこゝろをうはゝれて道理を自得せずは、たとひ年月をへて学とも、あやなきわさ成へし。又わつかなる端をもちても、道理を推してしらは、力を用事久しきに至て貫通の期有へき物ならんかし。(二11ウ)

52 春寒 さえかへる、此内一也。俳には余寒なとも侍は、いひかへて二有へし。(二12ウ)

53 春風 二。内一は春の風也。春風と二あれと、のもし入ては二な

き也。俳には春風二、春の風又有へし。東風は此外也。(二12ウ)

54 春月 只一。有明一、三月月一、春の第一季にいひかへて三有也。俳には臘月を加て四も有へし。夏冬も同前也。但四季共に三月月、有明ありと云にはあらず。連に有明二、三月月一也。俳には秋の三月月過て、他の季に又有へし。秋の有明過て、他の季に有明二有へし。又秋の内に明二、過たらは他の季に一有也。(二13ウ)

55 春の日と云に 長き心有は、その折に永日、遅日、連俳共になし。(二13ウ)

56 春近き 春をとなりは冬也。又春ならぬ春にあはゝや、春そへたゝる、又春過るなど春也。他の季も同前。(二13ウ)

57 春宮 春也。東宮と申時は雑也。此類おほく侍也。(二13ウ)

58 葉 四也。俳には今一有也。青葉、若葉、又松杉の葉也。竹葉、萩のは、草葉とかはりては字去也。木のはとく、草葉とくは連に折きらひ、俳に五有は一はうらに有也。(二13ウ)

59 葉守の神 雑也。色の字入は秋也。葉は五の内也。惣して木には葉守の神おはすると大和物語に見え侍也。(二13ウ)

60 柞 秋也。紅葉付合也。ちるも秋なり。柞森は雑也。母にも仕立し也。

ちりちらぬ哀は何れはゝそ原 宗養

宗牧十七年忌千句の内の発句也。母存命の故也。(二13ウ)

61 浜 二。内一は名所也。俳には只の内に今一加なり。又浜底説々有也。

浪まよりみゆる小島の浜底久しく成ぬ君に逢みて

万葉には浜楸と有。伊勢物語にはかきかへて入也。はまの砂のくつれたる也。此句牀は居所に嫌へからず。又、

霜置ぬ南の海のはま底久しく残る秋のしら菊

後鳥羽院熊野へみゆきの時、定家卿供奉にまいりて新宮へ三首の哥有し内也。庭上ノ冬菊と云題也。このはまひさしと云は、はまに小家也。家に見されは落題也。かやうにいはい居所也。(二14オ)

62鳩吹 秋也。鳩には連俳共に折嫌也。吹は字去也。生類には打越嫌也。説々有。

先は獵師の鹿をねらふ処へしらすして、人のとをるをとめんとめに手を合て口にあてゝ鳩のまねをする也。相図也。

ますらおか鳩吹秋の音立て留れと人をいはぬばかりそ

又袖中抄に、ぬす人の山たちするに木を折かけてかくるゝをまぶしと云也。友にしらせんと思ふ時、右のこたくして鳩ふく也。

まぶしさし鳩吹秋の山人はをのか栖をしらせやはする(二14ウ)

63初塩 秋也。呉王の臣伍子胥の死霊、杭州浙江の潮と成て、毎年八月十五夜、風波を起す事有也。古詩に、

一千里色仲秋月 十万軍声半夜潮

この潮冷しうして、十万はかりの軍のこゑか聞ふる也。堀川次の百首に、常陸と云女のうたに、

秋夜の月は浦より出ればや塩と共に満増らん
月も新月と云、塩も初塩と云なれば也。(二15オ)

64初鳥 元日の鶏也。春也。初草、春也。初鳥かり、初鷹等は秋也。

初あらし、秋也。初風とはかりは秋にならず。初霜、冬也。露をむすへは秋也。初にはしめ、連に折きらひ、俳に面去也。(二15オ)

65初瀬寺 山類也。鐘も同前也。初瀬路は山類にあらず。(二15ウ)

66橋 只一。御階一、棧一、名所に一、浮橋一也。水辺也。御階は禁中の玉階也。水辺にあらず。

まふのほる袂ははしにつらなりて

棧は山類也。水辺にあらず。古詩に、

梯危斜踏ニ峽猿声

山路のつゝかぬ所にかくる橋也。かつらぎの橋の事はかもしにしるし侍也。山類にて水辺にあらず。無名に岩橋、石橋といはゝ水辺にて、山類に非也。名所の橋は宇治橋、

長良の橋等也。浮橋は夢のうきはしと、連哥にする也。ゆめには、爰かしこの事を見るを、かよひ路とも浮橋とも云也。又天浮橋と云は、

女神、男神会合の所也。日本紀に見え侍也。連に右五の内、御階はかりうらに有て、外はいづれも折きらふ也。俳には舟橋、橋かゝり、鵲

のはし、のほりはし等の内に、今一加て有は、その内かはりたるをうらにする也。又橋姫の事は、うもしに注侍也。(二15ウ)

67原 松原、さゝはら等字去也。原に野の嫌ひやう、野の字の下に注侍也。(二16オ)

68蓮 夏也。花菓同時也。然とも実の飛は秋也。俳に蓮一、物の名に又有也。(二16ウ)

69芭蕉 只一。はいには心はせをはなといひて、又有へし。布、扇等

も此内也。葉の字付へからず。もとより秋也。(二16ウ)

70 端居 居処に打越きらふ也。軒端、山の端かはりて、連に折きらひ、俳に面去也。(二16ウ)

71 はなし とまりに上の句に一、下の句に一也。俳には今一有也。(二16ウ)

72 遙 連に二也。俳には今一あるへし。(二16ウ)

に

73 鶏 只一。夜鳥一、引合て二也。俳には今一加へし。夜分也。別の鳥としても夜分なから恋也。句、

鳥の音やうききぬくをさそふらん かやうにして鶏也。閑路の鳥とは、孟嘗君と云人、秦昭王につかへけるに、狐の裘をもてるに、昭王の望まれければ、おしみて齊国へ逃去、夜ふかうして函谷の関ひらかされは、三千の客の中に鶏のまねをすれば、まことの鶏も鳴つゝくゆへに、関の戸開て通す也。

夜ふかき山にしのふいにしへ

越かたき関にそらねの鳥も哉 宗祇

八こゑの鳥、くたかけ、夕付鳥なと三の内也。物の名に鳥甲、鳥毛の鎧なと云て又有也。(二17オ)

74 庭 只一。寺、皇居の間に一、庭訓は各別也。庭は居処也。砌に折きらふ也。物見の場、居所にあらず。庭に折嫌也。場といへは、場に二句去也。又場と云時、庭には付句もきらはす。已上連哥の式也。

俳には只の庭と一加て三也。庭に場面去也。又砌は面去也。(二17ウ)

75 庭の築山 山類に打越嫌也。又にはたつみ、庭の汙也。居所にも水辺にも非也。(二17ウ)

76 燎 神楽の時たく火也。神祇也。夜分也。冬也。別字有と、庭かすの内也。(二18オ)

77 焚 生類に打越嫌也。諏訪へは鹿をそなへ、春日へは若宮に狐、狸備る事也。(二18オ)

78 鳴 雑也。うきすも同前也。うきすの事、袖中抄、無名抄に見え侍。柳、芦等に水にしたかひて、上下するやうにかくる也。流てありく物にあらず。連に一句也。俳にかいつふりと又有へきか。(二18オ)

79 錦に 紅葉付へからず。赤き色つかされは、花、紅葉付すと云り。一説に白に雪、黒に鴉も付は付へき物と云り。両説如何。答、たとへは野山の錦と云は、打任て紅葉の事也。此故に紅葉といはすして、紅葉に折嫌也。付へき物にあらず。然とも花に桜も付は、句躰によるへし。(二18オ)

80 似せ物の花有面に 桜嫌也。俳に七句去也。惣して似せ物の類は折きらふ物、面去也。たとへは雪折をきらへと、卯花の雪はうらに有と云事也。(二18ウ)

81 にとまりに まにく、たにと云やうの詞、折合も嫌す。又にとまりは二句去也。下の句のにとまり、俳に一座一句也。

なみたは袖に露はもすそに 兼裁
前へかゝらぬやうにする也。(二18ウ)

82にて とまりには二句去也。中にも同前也。又にてとまりの上に置詞は、を、は、も、からぬ、には等也。(二19オ)

ほ

83郭公^{ホトトギス} 只一。程時過すとかくして、今一也。俳には時鳥^{トキトリ}、子規^{シキ}、しでの田長^{ツネナガ}などの内に今一加て、三有へし。又郭公には花、鶯、かすみ、藤、長閑なとむすひても夏也。春の郭公は習有事也。此鳥、詩にはこゑを聞て愁るやうに見え侍也。蜀の亡帝の魂、化して郭公になれると有。

昔帝^{セキダイ}一時恨^{シラミ} 後人^{コウジン}千載^{センサイ} 悲和にも涙なそへそなとよめるも侍と、おほくは賞翫^{ショクワン}の躰也。生類の内に此鳥ほと賞翫はならへてなき也。鶯は郭公には増しこゑに侍と、さほとに云来らす。身にかへても一こゑ聞まほしと云やうに、連哥師の作し来は、子細有事也。かやうの境をも若自得^{ニジツク}せすして、人まねはかりに句にもつくれるは、鸚鵡^{フウモウ}、猩々^{シヤヤ}の人々に似て物はいへれと、そのことは義理をはしらざる類なるへし。(二19オ)

84螢^{ホタル} 夜分也。水辺にあらず。一句也。俳には二も有へし。残としても夏也。火にはきはらはす。ほかけには二句去也。(二20オ)

85ほや作^{ツクル} 秋也。神祇也。穂には連俳共に折嫌也。屋には連に折きらひ、俳に面去也。信濃の御座山祭、諏訪の事也。七月廿日より廿七日まで、薄のほにてかり屋をつくりて、あらこも敷て精進する也。年中七十余度の祭なれば、諏訪祭、見佐山祭など云ては雑也。

信濃なるほやの薄も風吹はそよくさこそいはまほしけれ
又上醍醐^{トウタイゴ}、又山城の笠取山にも勧請有し也。いつくにも見佐山と云也。(二20オ)

86星月夜^{ホシツキ} 秋也。月には字去也。日には打越きらふ也。名所は各別也。秋にも夜分にもあらず。(二20ウ)

87星を唱る^{ホシヲナゲル} 春也。天象也。夜分なり。元正寅の刻に、清涼殿にて行給し事とそ。

皇の星を唱る雲上に光長閑き春はきにけり(二20ウ)

88仏名^{ホトケノミナ} 十二月十九日より廿一日まで、内裏に出家あつまりて、仏名経をよみたまひて、三世諸仏の御名をとなへて、年中つくりしつみを滅し給也。

荒玉の年も暮れは造置つみも残らす成やしぬらん(二20ウ)

へ

89経て 年へてなとに、糸へて少もきはさる也。(二21オ)

と

90虎 千句に一句也。俳には一座一句也。ひよみなとに今一有へし。はけしき心虎は物かは

聞もうしさも苛世のまつりこと 宗祇

礼記に孔子曰苛政猛於虎。泰山に婦人の子をかゝへて哭けるを孔子見給て、その故をとひ給へは、わか夫此処にて虎にはまれける

と申。家へはなと帰らさるとのたまへは、家には苛政有と答侍し時の事也。(21オ)

91戸 四也。柵、関の戸、谷の戸、室の戸、此間折嫌也。俳には五也。

又扉、柵、鎖、此三のもの同しく戸の教にして、居処にも同じ様に嫌と云説有と、此内鎖はかり戸五の外にして、又居処に打越嫌也。子細は鎖は漢に、金鎖、鉄鎖など云て鎖の事也。たとへは紐は衣類に付て有故、衣類也。帯ははなれて有故、衣類にあらさることしと知へし。

又天戸も五の内と云説有と是は外也。たとへは神の字はいひかへても折きらへと、鳴神は神に二句去也。なれは天戸も世の外の事なれは、戸に連にて面嫌ひ、俳には七句去へき也。又戸に窓の嫌やう窓の字の下に注侍也。(21ウ)

92豊明の節会 夜分にあらす。明は字去也。冬と云説有と句による也。

むつき立けふの円居や百敷の豊明のはしめ也けり
宜命にもろくの節会を豊明と云と有也。(22オ)

93床 只一。居処也。夜分也。鳥獸に一也。俳には鳥に一、獸に一、已上三也。床は此外也。座敷の床は夜分にあらす。水鳥、土鳥に床有。獸に有と、鹿には聞なれす。草ふし立とは有也。(22ウ)

94鳥 只一。春に一。小鳥、むら鳥などに一。鳥獸といひて一。新式に四也。狩場の鳥、うきねの鳥、各別と有。右四の鳥は無名の鳥也。俳には此外よみこゑの内に今一、五も有也。去ながら面の鳥、春ならは花鳥なとむらうらにあらす。かりはの鳥は雉也。うきねの鳥

は水鳥也。冬也。夜鳥は鷄也。是等鳥數の外也。鳥に五句去也。俳に三句去也。又鳥に鷺、鴉等の鳥の字付さる鳥は、付ても苦しからす。鷺、鴉などに鳥とは付さる也。他准之。(22ウ)

95鳥のこゑ 同鳴の字、連に面嫌ひ、俳に七句去也。たとへは鶴の鳴に雁のこゑなどの事也。又鳥の鳴は雑也。囀は春也。(23オ)

96鳥のぬる 夜分也。くはしくはうもしにしろし侍也。鳥の巢、春也。委はすもしに注侍也。鳥屋鷹の事はたもしにしろし侍也。(23オ)

97年 只一。とせ一。今年も此内也。俳には年、歳の内に今一有へし。去年今年是春也。なかるゝ年は冬也。年内の立春、連俳ともに冬に用來也。(23オ)

98友 只一。鳥獸に一。月花などの友に一有也。はいには今一いひかへて有へし。(23ウ)

99照射 夏夜火ともして鹿子ある事也。ねらひかりとも云也。(23ウ)

100訪に とふ、句によりて二句去也。周書に王訪于箕子。註に訪は問也。(23ウ)

101灯 只一。法に一。釣に一也。俳にはよみこゑの内に今一有へし。(23ウ)

102宿直守 夜分也。居処に打越嫌也。(23ウ)

ち

103塵 只一。あくた一。此外塵世又有へし。新式かくのことし。俳諧には、よみこゑの内に今一加て四も有へし。塵世はうき世の事也。

又世とこととはられされと、たとへは句に、

いとへとも身はまた塵の中にして 是則

塵世也。又和光同塵と云本文より、塵にまじはる神とも仏ともいふ也。又六塵は眼耳鼻舌身意也。この六より悪のおこるを塵の身と云也。句に塵を出てなとする也。

風の上にありか定めぬ塵身は向後も知す成ぬへら也

又紅塵と云事も有。塵つもりて山となると云ことは有ゆへに

紅のちりひちたかし秋の山 宗祇

一花やふもとの塵の山さくら 兼裁

ふもとに一花咲そめたるは、此さくらも一山みなちりつもりて、山と成ことくなるへきとそ。(二一オ)

104 千里 居所にあらず。千の字は連に折嫌也。俳に面去へし。里は字去也。

花に匂ひみとりに霞む千里哉 宗祇

千里 鶯啼緑映紅と有よりの作也。(二一ウ)

105 千劍破 早振の二字に少もきはらず。日本紀に素戔嗚尊たけくいふりにおはしまして、天照太神に怨をなし給は、一千の神々を引率して、和州宇多郡に一千の剣をふり立、城郷としてたてこもり給。天照太神、岩戸を出させ給て宇多郡に八百万の神をつかはして、ふり立たる一千のつるきをのこらすけやふりてすて給より、千劍破神と申也。(二一ウ)

106 鶴 千の字に嫌はす。冬也。水辺也。雁、露などにむすひては秋

也。(二二オ)

107 路 連に七句去也。俳に五句去へし。又路と道の間字去也。又山路などのありく路に、哥道などは二句去也。(二二オ)

108 散 花のちるに木葉のちるは連に折嫌ひ、俳に面去也。(二二ウ)

109 契に たのめる句によりて付てもくるしからず。たとへは句に、ちぎり置つる事のはかなき など云に、

たのめつゝまたるゝやうの事はあしく、又

たのめすはかく物はおもはし かやうなるには付てもくるしからず。(二二ウ)

110 岐に 道二句去也。行歩ならぬ道は付てもくるしからず。(二二ウ)

り

111 律のしらへ 秋也。呂のこゑは春になるへき事ながら、その沙汰なし。(二三オ)

112 龍膽 秋也。りんたうの事也。古今のうたに、

我宿の花ふみしたく鳥うたん野はなればや爰にしもくる

又おもひ草とも云也。

道のへの穂か本のおもひ草今更になそ物をおもはん(二三オ)

ぬ

113 布さらす 雪にてもさらす物なるゆへ、水辺にあらず。(二三ウ)

114 ぬかつく 礼拝也。句によりて神祇にも尺教にもなるへき也。万

葉、

相思はぬ人を思ふは大寺のかきのしりへにぬかつくかこと

仏にむかひてぬかつきてこそ、せんの有へきに、垣のうしろを拜か
ことく也。おもはぬ人をおもふはせんなき也。一説に餓鬼の後とも
云り。(二3ウ)

115 ぬれきぬきする なき名のたつを云也。堀川有府の和泉式部か
たへつかはしける哥、

人しれすねたさもねたし紫のねすりの衣うはきにはせん
返し

ぬれ衣と人にはいし紫のねすりの衣うはき成とも
紫のねすりの衣の事はむもしの下に注侍也。(二3ウ)

116 ぬ 新式にふのぬ付句きらふ也。しらぬ、思はぬなど也。おはん
ぬは二句去也。しりぬ、おもひぬなど也。ふのぬとおはんぬは付句
も嫌はず。折合にはきらふ也。(二4ウ)

117 ぬらんとまり 一座二句也。俳には三も有へし。中こみには三字
かなの内也。きらひやうはみもしに注侍也。(二4オ)

118 ぬると ぬるぬれと、ぬれぬると、ぬれの間いつれも二句去也。
(二4ウ)

119 寝に 臥かたしき両方夜分ならは、連に五句きらひ、俳に三句去
也。又一方夜分のかれは二句去也。(二4ウ)

120 ぬるゝに 袖のそはつたと連に面きらひ、俳に七句去也。又ぬる
ゝ連に二有。はいに三句も有へし。又ぬるゝ袖の事そもしの所にく

はしくしるし侍也。(二4ウ)

る

121 冰れる にこれるなどのるもし二句去也。又とはるゝ、はなるゝ
などの間も二句去也。(二5オ)

122 氷るらん 流るめりなどの間は、上の字へ付たる字なれば少も嫌
す。(二5オ)

を

123 女郎花 初秋也。只一也。俳にはこゑに又有へし。女の塚よりは
へ出たるゆへの名也。古今集にこのうた十九首あり。いつれも女に
よせてよめる也。

名にめてゝ折れるはかりそ女郎花我落にきと人に語な

僧正遍昭、嵯峨野にて落馬の時よみ給し也。このうた俳諧の手本
也。詞いやしからずして、心のざれたるを上句とする也。詞いやし
うして心のされざるを下句とする也。伝教大師我たつ柚のうた、弘
法大師の室戸のなかめを俳諧といはざる古人のこゝろを、はかりて
しるへき物ならし。(二5オ)

124 女 恋也。連には千句に一句也。俳には一座に一句有へし。女に
乙女など俳に面去也。又物の名、女松などかはりて折に一つゝ也。

又下女、市女、賤の女など恋にあらず。(二5ウ)

125 鬼 生類にあらず。千句に一句也。俳には一座に一句也。物の名

に又有へし。鬼神鬼女キシンキョメなど云ても右一句の内也。鬼神の事、諸道にまち／＼の説侍也。儒道には中庸に子曰鬼神キシンノ之為タルコトヲシテ、德其盛矣乎シユ。朱子の註に鬼者陰之靈也、神者陽之靈也と。天地の間に万物を生ずる靈なる物を神と云ひ、その万物の滅する靈なる物を鬼と云也。たとへは一枝に陽氣をくはりて、一花さかしむるは何物のわざそとふ時、神の徳と云物也。落花して根にかへり、陰氣に属するを鬼といふ也。万事かくのこくとく陰陽の二氣を司りて、万物を成敗するを鬼神と云也。又尺教には、護神呪經に有三百億恒沙鬼神ゴホシヤノ護持三帰者ゴチスミキョウシャと見え侍。仏法僧に帰依する人は、天地にみてる善鬼神の守り給と有。是はほとけの法界身を鬼神と云也。又群疑論に内有邪三毒ゴノハツノ外惑ゴノハツノ鬼神魔シヤクノ、是はこゝろに貪、瞋、痴の悪あれば外より悪鬼神来て、常にしたかふと也。又韓詩外伝に鬼者飯也人死而肉飯ニ於土ニ血飯ニ於水ニ骨飯ニ於石ニ魂氣升ニ天ニ其陰氣獨存ニ先所依也ニ故純陰底滯之氣著ニ人為害矣ニ。是は人死して四大分散するに、陰分の魄氣のみのこりて、人につきてなやましむる也。死靈など云物を鬼と云也。世に邪祟の病などはやるも、かやうの物のわざと医書には見え侍也。又和哥には、

陸奥の阿達ミチノか原の黒塚クロツカに鬼籠れりと云は真か

葎ムラサキ生て荒たる宿のうれたきはかりにも鬼の集スミ也けり

大かたは女の事也。又ぬす人をも云也。おそろしき事を云也。伊勢物語に、鬼はや一口にくひてけりと有も、おそろしき事也。その外いろ／＼の説侍とも、しけきを恐れ侍也。惣して俳の句のならはし

にいつれの説をもちひて、いつれの説をは用ひさるとの分ち有。道にあらねは儒道、仏道、哥道は申に及はず、あらゆる世俗のはやりことはまて用ひ侍は、鬼と云には大江山、鈴鹿山、鬼力島までの事をもいつるを幸に付句興あるやうにあらまほし。(二六オ)

126 鬼のしこ草シツソウ紫苑也。秋也。物忘れせぬ能有。くはしく袖中抄に見え侍也。(二七ウ)

127 遅日ワシキ 此外、永日あらす。新式の旨也。はいには二なから有へし。春はをそく日の暮ゆへの名なれと、句に、

山陰はいつるも遅きひかりにて 又、

説法の永かれとのみしたふ目に かやうのしたてにても春也。

(二七ウ)

128 音に 音羽山、音無川等二句去也。又音といふには付句はかり嫌也。但吹風の音羽山などといは、音に字去、ねに二句去也。音に、こゑ、ひゞき、鳴など二句去也。され共音羽山などには付句もきらはす。(二八オ)

129 遠近トウキン 二字つゝきては連俳ともに一也。をちかた、又をちなといひて、はいに三は有へし。遠にも近は二句去、こちに遠も二句去也。

(二八オ)

130 岡オカ 只一。名所に一也。山類也。俳には只の内に今一有へし。(二九オ)

131 小野 只一。名所に一也。俳には只の内に今一加也。奥としても山類にあらず。(二九ウ)

132 小船 すぎてあま小舟もなし。俳には小舟、小船の内に今一有へ

し。(二八ウ)

133 小手捲 賤のをたまき也。苧をまきたる也。又狭衣に、たつをた

まきと有は枯木の事也。(二八ウ)

134 小に小 字去也。をと小、連俳ともに二句去なり。小と小付句き
らふ也。(二八ウ)

135 をしね ひき、植物也。くはしくおもしろしに注侍也。(二八ウ)

わ

136 萱 雑也。花をむすへは夏也。毛詩に焉得諼草一言樹之
背一と。余雅云ク萱諼音同遂命萱以忘憂草この草
うれひをわするゝ能有ゆへ、婦人のする北のねやの前にうふると
も又服するとも有也。

道あらは尋も行む住吉の岸に生てふ恋忘草

元来忘憂草と云本文より云和名なれば、忘の字に二句去也。又
萱草など云て忘といふ事に用す。立花の下草などにいはゝ、忘の字
に付句も嫌へからず。花は六月也。

暑雨初晴后庭萱正吐花(二九オ)

137 鷺峯鶴林 新式に可レ為ニ山類之躰一但鷺峯鶴林等山類植物元

不嫌レ之 用ニ此旨ニ可レ然云々 鷺峯鶴林等山類植物にあらざる子

細は、たとへは神代の事なれば岩舟として水辺にあらず。又仙境な
れば冰室として山類にせず。冰室守として人倫にあらざることし。

凡俗相ましはる地さへ、堂塔皇居なとは居所になさず。いはんや仏

界にして、殊に天竺の事なれば右の説尤なるへし。鷺峯は尺迦の經
を説給山也。西域記に元来鷺のすみし山と云り。又大論には山の頂

鷺の頭に似たるゆへに名と云り。天竺王舎城と云都より、東北三四
里さりて此山有也。日本にては東山靈山をかたとる也。鶴林の事は
つもしに注侍也。(二九ウ)

138 若葉 新式に花むすひても夏也。青葉に花むすひては春也。青葉
は雑の故也。又草の若葉にむすへは、たとひ夏草にても春に成也。
右若葉と云は木葉也。(二一〇オ)

139 若菜 一句也。春也。俳には二有へし。若菜は惣名也。七草は、
芹なつな五形田平子仏ノ座青菜酒代是そ七種

惣して若菜、七草は、発句には初春七日跡先三日の内也。平句には
初春のうちにほくるしからすと云来也。又くゝたちは初春也。菜と

はかりは雑也。かふらは冬也。(二一〇オ)

140 若和布 春也。刈は夏也。(二一〇ウ)

141 若紫 春也。只は雑也。(二一〇ウ)

142 若草 若鮎等 春也(二一〇ウ)

143 若楓 若竹等 夏也。(二一〇ウ)

144 別に 帰る恋の句ならは同意也。新式の文也。恋の句に、別にか
へるは、連にて面をきらひ、俳に七句去也。一方他にかはりたらは二
句去也。句躰ちかひて、生類と人事なとは付句もきらふへからず。
(二一〇ウ)

145 別に きぬく 両方恋ならは、連におもてきらひ、俳に七句去也。

一方ちかひては二句去也。又別に分も二句去也。又別に饒別、一方旅の句にあらずは二句去也。但句によるへし。(二二オ)

146 別の恋 連に二あれば、俳に離別など又有へし。(二二オ)

147 和田の原 名所にあらず。海の事也。海に連俳ともに折嫌也。又和田の原は連俳ともに一句也。

あしたの空に夜は明にけり

出る日の遥にほふ和田の原 肖柏

三昧詩に龍泉寺絶頂と云題に、

未明先見海底日 良久遠鶏方報晨

泰山の日観と云ところへのほりて見れば、鶏の一たび啼て東を見れば海上に月出て、たかさ数丈也。良久して夜明なり。此心にて夜明に海上の月を付たり。(二二オ)

148 綿 冬也。木綿も冬也。木綿は木綿の中略なれば、木綿に折嫌也。又綿に木綿は二句去也。(二二ウ)

か

149 哉 駒には発句の外、ねかひ哉又有也。句の中には二句去也。連俳同前也。ねかひかなは花も哉、月もかな也。かやうのかなにねかふ、望む、とはゝや、とへかし、とはなんなどの物をねかふことは二句去也。(二二オ)

150 かほよ鳥 かほ鳥とも云也。連俳ともに一句也。伝受なきうちは心にまかすへからず。

春去は野へに先啼かほよ鳥貞にみえつゝ忘れなくに
是は雉子をよめると也。春也。

霜氷る岩ねにつるゝ良鳥の浪の枕や佗てぬる覽
是は鶺鴒也。冬也。

山川のあくゐの上の良鳥の影見時そねは鳴れける

これは翡翠也。雑也。又句

霞のうちのやとり床しも

見し人に似たる良鳥又もなけ 宗養

露にぬれたる花の夕かほ

雨そゝく霞かくれに鳥はねて 宗牧

始て上洛の時、此句より上手の名えられし也。(二二オ)

151 神 只一。神代一。名神一。已上三有也。俳にはよみこゑのうちに今一あるへし。又神に神楽、面きらへは俳に七句去へし。又神に上久て付句もきはらず。若神によせていはゝ、連に面きらへは、俳に七句去也。上久とはさひしき事也。(二二ウ)

152 神祭 只祭としても賀茂の事になれば、夏也。賀茂は付さる也。

卯月酉日也。惣して賀茂祭は年中七十余度也。規式は伊勢同前也。

王城の鎮守なれば、関白参詣有也。欽明天皇の御宇より始也。

けふ祭神の恵の兼てより卯月の忌の指て知にき

いかなればその神山の葵草年はふれとも二は成らん

葵のもろかつらと云は、葉円にして二葉つゝむかひて付也。此祭今は絶し也。又余の祭はそれゝの神に引れて季を持也。(二二オ)

153 神樂 冬也。夜分也。只一也。俳には川社、きりくすうたふ、星

うたふなどの内に又有へし。神樂の事、日本紀に右にも注侍ことく、

素盞烏尊、天照太神にあたをなし給へは、八百万の神達を引くして、

葛城の天の岩戸にとちこもらせ給へは、六合みなとこやみになりて、

日月ひかり見えす。島根見尊なけきて、一千の神々をかたらひ、和州

天香久山に燎をたきて、一面のかゝみをゐさせ、柳のえたに付て、神

哥うたひ、神樂を奏し給へは、天照太神、是を見給はんとて岩戸をす

こし開給へは、世界たちまちに明になりて、光かゝみにうつりけり。

これ神樂のはしめ也。年毎に内侍処に行ひ給也。惣して説々侍れと

も、根本の神樂は内侍処を本とする也。その外は伊勢をはしめて里

神樂と云也。夏神樂は水辺也。夜分にあらす。(二13ウ)

154 川社 水上に社いはるて神樂行事也。又白浪の音のするを云と

も有。

川社秋をあすそと思はや波のしめゆふ風の涼しさ

五月雨岩浪さそふきふね川かは社とは是にそ有ける(二14オ)

155 神樂の名の蜚 うたひ物のきりくす、生類にならず。常の蜚は

秋なれと、神樂に引れて冬也。夜分也。その外、星うたふなとも冬

也。夜分也。(二14ウ)

156 春日祭 二月上申日也。霜月も有と、一年兩度の物は始を季に用

と新式に見え侍也。仁明天皇の御宇嘉祥三年に始也。内侍、上卿、弁

官、諸司参向有也。兩度ながら勅使立也。

春日山代々の神事けふ毎に絶すつかふる雲上人

大原祭も春日同前也。又山城西岡に春日の社有也。是は染殿の后本

社へ参給事遠きゆへ、父閑院冬嗣公、勸請有し也。

二月やけふ神祭小塩山はや懸初よ花のしらゆふ

又春日に春日、少も嫌す。幾日のかもしは字去也。(二14ウ)

157 社若 只一也。俳にはかほよ花なといひかへて、二有へし。水辺

也。むかしは春の季になせと、夏の景物すくなきゆへ、今は夏の期に

入也。(二15オ)

158 鴈 春一。秋一。春秋の内に残鴈と今一有也。かくしても三也。

残鴈とは、春此地に残をも、秋越に残をも云也。又名残の鴈とはかへ

るを惜て云也。鴈かねと二はなし。又鴈かね氷とは冬也。水辺にあ

らず。雪にむすひたるも冬也。又さむき鴈としては秋也。鴈には足

に水かき有と、水辺にあらす。(二15ウ)

159 垣 二也。かきほも此内也。かきほ二はなし。垣に垣間見、面き

らへは俳に七句去也。又神垣、瑞籬、玉垣なとも右二の外にはなし。

俳には三有へし。籬は此外也。折をかふるなり。(二15ウ)

160 狩 鷹に一。小鷹に一。獸に一。已上三也。俳には獵師、川狩な

といひかへて今一有也。鷹狩の事はたもしに注侍也。獸かり、ねら

ひかりは夏也。紅葉駈、茸かりは秋也。狩に折きらへは、連に面去

也。又かりに生類は二句嫌と、桜、紅葉等のかりに嫌す。又狩に鷹を

付と云は、前句鷹めかさる狩に付也。鷹に狩とは付さる也。然とも

各別の狩は、句躰によるへし。(二15ウ)

161 鐘 只一。入相一。尺教に一。以上三也。俳には異名に今一有へ

し。鐘に銀、金など二句去也。こゑに一方いはし付句も嫌はず。めかね、はりかね等も二句去也。(二16オ)

162 鐘かすむ 新式、夜分にあらざる処に出たり。霞は夜と昼は似合ぬ物也。連に入逢過て、かねかすむなければ、大かたは入逢なるへし。只かねは夜分也。(二16オ)

163 霞の衣 衣類にあらず。衣の字には字去なり。霞の網水辺にあらず。霞の海そひき物也。句によりて水辺也。霞に霧むすひては春也。霞の洞は仙家也。院御所をも申也。又掠るといふ詞春に用來也。おもふころをいひそかすむる 宗長(二16ウ)

164 影陰景 此間二句去也。月日灯等に影をかき、木陰山陰夕景等かき來也。俳に主の陰なとも二句去也。(二16ウ)

165 楓 秋也。青としても同前也。若楓は夏也。紅葉に連俳共に折嫌也。(二16ウ)

166 枯野 冬也。植物に打越嫌也。虫露霧色なとむすへは秋也。又枯草は植物也。句によりて冬也。枯木植物也。冬にあらず。野に一、木に一、草に一有也。俳には今一有也。(二17オ)

167 寛 水辺也。軒のうち樋、下樋など云ては水辺にあらず。又寛に水は付とも若、句に、

しつかなる苔の下樋の音はして かやうのしたてには付さる也。

(二17オ)

168 茨 秋也。かやふぎ、かやか軒端としても同前也。植物にはあらず。季をもつから植物にもきらふへき事なから、子細絵の字の下に

しるし侍也。連に茨原、たかかや、色なき草なとも有也。(二17オ)

169 かけろう 雑也。したてによるへし。哥に、

今更に雪ふらめやはかけろうのもゆる春日と成にし物を

是は陽焰とて、春の季のけふりのやうにたつを云也。八雲御抄にも此説也。春也。

霞たち碧天も長閑くて有か無かに遊びいとゆふ

是も同前也。詩に、

天外遊糸落碧空一と有も此事也。又八雲御抄に、かけろうは夕

の木のもとなどに飛みたるゝ物也。又夕くれに命かけたるかけろうとも有也。是は蛭蟬の事といふ也。又源氏物語かけろうの巻には、

有とみて手には取れず見は又向後も知す消し蟬

又ことはにはかけろうははかなけに飛かふと見え侍也。又蜻と云

説有。此虫、羽うすく身かろく、そらに飛事陽煙のことくなるを云

也。又とんはうを秋津と云也。又日本の名を秋津と云は、ひかしは

北南へひろく、西は北南へせはくて、蜻のかしらを長へ、尾を坤へ

なしたるやうの国のかたち也。このゆへに東方と云とも云り。又か

けるうの石とも岩とも云事有。石には水気こもるゆへ、春陽氣をう

けて、けふりのやうに立事有。是を云也。扱句に虫の名にて、秋津と

か蜻と云時は秋也。国の名、名所などは、それゝに去嫌へし。俳に

物かはりて二有也。(二17ウ)

170 鷗 雑也。連に只一也。俳には江鳥、白鷗などの内に又有へし。(二18ウ)

171 鵲の橋 生類にあらず。水辺にあらず。此鳥の羽をならへて橋

として、七夕に二星の銀河をわたると云説有也。

夜や寒き衣や薄き鵲の行逢の間より霜や置らん

又さらに霜置と云は、詩に、

月落烏啼霜滿天 曉になるより東に日の出る故に、半天しら

くくと霜置きたるやうに見ゆるを云也 又右のうた、

夜や寒き衣や薄きかたそぎの行逢の間より霜や置らん

かたそぎは社の千木也。住吉の社やふれにければ、帝へ託有し明

神の哥とも云也。(二一八ウ)

172 檜木 柏の字かく事、和字の誤なるへし。漢に柏と云は松檜の類

にて、冬ちらさる也。莊子曰受命於天惟松柏独正四時能保其常

青一 その外いつれの字書にも冬木也。和のかしはには文字あたら

す。疑冬を山吹といひ、廬橘をはなたちはたと云類なるへし。三知

抄に、

玉柏茂りにけりな五月雨に葉守の神のしめ侘る迄

小雨さへたつ音やひろかしは 昌琢

この句、右の哥の体は夏也。又統古今秋の部、

見まゝにならのは柏紅葉して佐保の渡の山そしくるゝ

かしはの紅葉は、時雨にむすひても秋也と知へし。又同集冬の部

に、

押なへて時雨し迄は難面て霰に落る柏木の森

又新古今冬の部に、

時しもあれ冬は葉守の神無月まはらに成ぬ杜の柏木

然はちる、おつるは冬也。連俳ともに季をそれくくに用ふへき也。

又袖中抄に、

奈良山の児手柏の二面ともかくにも儼人かな

児手 なる柏なるへし。一説に児手柏、側柏也。 二面

也。二心ある儼人をそしりたる哥也。又、

神風や三角柏に事間て立をま袖に包てそくる

三角柏、三綱柏、のとなは通音なれはいつれも同物とそ。又三葉柏

とも云也。太神宮へ此柏をとりて占に、なくなる時立はかなひ、立され

はかなはぬ也。このゆへに立を袖にしてよるこひてかへる也。又玉

柏にしなく有也。先はほうひ也。又水底の石をも云也。

さのみやは身を宇治川の玉柏君か御代にもなを沈へき

難波江のみに埋るゝ玉柏願てたに人を恋はや

むかし唐船着岸の馳走に、水底に石を敷し也。又、仁徳天皇御遊覧

の時、水底に敷しとも有也。かやうの玉柏は石に、連にて五句去、俳

に三句去へし。(二一九オ)

173 風 字去也。あらし、野分、山をろし、こからし、比良の根わたし、

あなし吹など、連に五句去、俳に三句去也。又、松のひゞき、萩のそよ

き同こゑ、かやうの風躰は風に二句去也。風体と風躰の間も二句去

也。惣して年中風の次第は、春立より漢に月令に、東風開凍と有

て、東風を春に用也。和にも同前也。漢には、夏は南風、秋は西風、

冬は北風とつかへとも、和には沙汰なし。然とも季をは持すといへ

とも、心には覚悟有事也。夏の句に西風、北風とは似合ぬ也。扱六月

には風かほると云也。唐文集の句に、

人皆苦炎熱^{ヘミナクタルシムンネサニ} 我愛夏日長^{ワレハアイスカノナカキ} 又柳公権か、

薰風自南来^{クンフウジナンライ} 殿閣生微涼^{テンカクセイワイリヤウ} と次し也。

又東坡ノ付句侍とも略ス。扱風かほるとは、そらたき杯の有之よくく涼しき風の身にふるゝを云也。惣して夏の中はあらしのなきやうにする也。春はすこしのも、花にあたるをいとひてあしゝといふ也。

花一本松には吹ぬあらし哉 花の木はかりに吹て、松には覚えぬ也。扱秋立てより風色かはると云は、詩に、

朝来入庭樹^{ルライイニツキ} 孤客最先聞^{コカクモトモヒキキ}

秋きぬとめにはさやかにみえねとも風の音にぞ驚れぬる

秋の初風、はつあらしとする也。中秋には、あらし風を野分と云也。のもしにしろし侍る。サテ初冬の風を木からしと云。詩に、

雲岳千岩瘦^{ウンガクサンガンソウ} 霜林万葉飛^{スガリンマンエフ}

木枯の音に時雨を聞分て紅葉にぬるゝ袂とそみる

扱、すゑの冬にいたりては、あらしはかへりて似合さる物也。(二20ウ)

174 葛城久米路橋^{カサキキクメヂ} 水辺にあらず。山類也。橋敷の内也。つねの石橋

岩橋は水辺也。山類にあらず。かつらぎの橋の事は、文武天皇の御宇に役の行者かつらぎの嶺に三十余年こもりて、通を得て、孔雀明王の呪行ひ、鬼神をも自由にしたかへけり。ある時、かつらぎのみねより吉野の山へ橋かけよと、葛城の明神一言主にいひければ、明神大

石をはこふに、ひるはかたちの見くるしとて、夜々はこへは、行者いかりて呪をもちて神をしはりて谷底に置ぬ。天皇藤原の宮におはしけるに、神宮人に付て、役の行者むほん有とそうしければ、帝より行者をからめんとつかひたちぬれば、空を飛て手にあはす、母を召取はちからなく出来ぬ。則からめて、伊豆の島に流しぬ。流人ながら自由に海をはわたりて、富士の峯へもかよひけると也。一言主はしはられてとけすと也。久米橋は中たゆるによみ来也。(二21オ)

175 首途^{カドヂ} 只一。居所にあらず。俳には門出と又有也。門出と云時、居所に打越きらふ也。(二22オ)

176 門 居所也。俳によみこゑにかはりて四はかり有へし。首途は連に面嫌ひ、俳に七句去也。出は二句去也。門出は門敷の内也。出は字去也。(二22オ)

177 頭の雪^{カシワ} 眉の霜ふり物にあらず。冬にもあらず。述懐也。(二22オ)

178 刈^カ 只一也。俳には二也。刈田は植物に打越嫌也。薙は右二の外也。(二22オ)

179 借^{カリ} かりね、かりふしなと、連に折きらひ、俳に面去へし。(二22オ)

180 片敷^{カタシキ} 袖、岩かねなとむすひてする也。夜分也。又かたえは片枝也。かたへ涼しきは一方也。かたへの人らなとは傍也。(二22ウ)

181 隠題^{カクシタイ} たとへはさひしきのこえ鳴也。それとはかりに渡ること鷹也。しかすかのこゑ鹿也。かやうにしては同じ生類、連に五句去、俳に打越きらふ也。(二22ウ)

182 かさね字^{カサネジ} むらゝ、かすゝ等也。折合も付句もきらはす。同

し詞句のたけかへて二有也。又山より山、里より里は二句去也。かやうに二は連俳ともになし。(二二ウ)

よ

183代 神代一、君か代一、連哥に一座二句也。俳諧にはよみこゑの内に今一加へし。神代とは天神七代、地神五代の事也。

古のあまくだりぬる代も床し 神代といはされと神代也。又君か代は、

つかふるに長かれと思ふ代の恵、又、

代々をかさぬる家の久しさ 此句も君か代の内也。又代と世とは連に面嫌は、俳に七句去へし。又俳に君か代に御宇折きらふ也。又名代など云は、かはりといふ心にて代の心なし、付句もきらはす。又近代など云時かはるとか代とるよみこゑにちかひ心もかはれは、付句も嫌す。又こゝろはかはれとも、近代名代、代物など云時は面嫌也。右いつみの字にしるし侍、同字別訓也(三二オ)

184世 述懷に二、平世一、恋に一也。述懷の世、二の内折きらふ也。

俳にはいつれの世なりとも今一加て六有へし。同し折に同し世はなき也。平世と云は、

なへて世は花のさかりに成けらし

述懷の世と云は世をいとふ、又すつるなとなり。仏世は尺教にむすふ也。恋の世は恋にむすふ也。(三二ウ)

185桑門 文選にてよませたる也。述懷の世に折嫌也。俳に面去

也。(三二オ)

186齡 新式に、齡の三十、四十に、年の字二句去と見え侍。此心は人の齡の三十、四十など云は、年を数として云ゆへに、年に二句去と云事也。外のかすの事に、三十、四十といは、年に嫌へきやうなしと也。(三二オ)

187呼子鳥 春也。古今集相伝なき内は、それと見聞するとも、こゝろにまかせぬか法也。(三二オ)

188蓬 雜也。させもとも、さしも草とも云也。連に蓬生過て、蓬か柚ともなし。蓬島さしも草は有也。又蓬生、

はらひ入道は蓬生八重むくら かやうの句作にても、古跡の心有によりて、居所に打越きらひ来也。又蓬か柚とはたかき事也。俳には蓬生過て、さしも草させも又蓬萊とかはりて、三も有へし。又麻中の蓬と云は、すくなる友にまははれは曲るこゝろもなをると云事也。

世中の麻は跡なく成もうし心のうちの蓬のみして

ましはりもなかりし程はつらからて

こゝろの麻のすゑのよもきふ 宗祇

右の哥のこゝろ也。(三二オ)

189夜さむ 秋也。夜のさむき、夜をさむみ、又さむき夜是等は冬也。(三三オ)

190夜を待月 時分にも夜分にもあらず。又夜の明に月の残やうの句躰、多分同意也。(三三オ)

191 夜とゝも 終夜也。世とともに常住也。いづれも連俳ともに一つゝ也。(三三才)

192 宵 夜分也。今宵と一、只一ありて連俳ともに二也。(三三才)

193 横川 叡山の内の名所也。山類也。水辺にあらず。(三三才)

た

194 龍 生類にあらず。大小不窮にして神変なる物也。史記曰、孔子問_レ礼於老子_ニ去_ニ謂_ニ弟子_一曰、鳥吾知_ニ其能飛_ニ乃_ニ至_ニ於龍_一吾不知其乘_ニ風雲_一而上_ニ天_一吾今見_ニ老子_一其猶_ニ龍耶_一孔子も龍の事をは

しらすとのたまひしより、古来連哥に生類に用ひざるなり。又水辺にもあらず。龍宮、龍都も同前也。扱連には千句に一句也。俳には一座に一有也。その外、物の名所なとに今一折かへて有へし。(三三才)

195 龍田 むかし、この所へ龍落たりし故の名也。上段のことく龍に折かへて有也。立にはきはらず。(三三才)

196 龍田姫 秋也。神祇にあらず。名所にもきはらず。春色をあらはすをは佐保姫といひ、秋色をそめ出すを龍田姫と云也。漢に造化工と云物也。(三三才)

197 橘 只一也。立の字、花の字に少もきはらず。廬橘は花をほめていへる故に、花に二句去也。九種の柑類を、哥にはなへて橘と云也。

俳には、蜜柑、金柑などいひかへて、今一有也。柑類にいひては、それ／＼の季をもつ也。又薬種の陳皮、枳実などは雑也。是も二の内也。又廬橘は和訓のあやまり也。枇杷の事也。又橘中の仙と云は、む

かし橘をわりて見は、中に仙人碁うちてありし也。

はなたち花のうちかほるかけ

仙人や碁に生死をわするらん (三四才)

198 旅 連に二也。俳によみこゑの内に今一加也。旅籠屋は面去也。

神のおたひ処は、三の内なからたひにあらず。又旅駄の句、連に五句去俳に三句去也。又花にむすふ句、旅の字入ても旅にあらずと云は、たとへは、

分て入花の山路も旅の空 旅に非ず。

故郷を花にはしたふ旅の空 是は旅也。

世中に有ふる程も旅の宿 旅に非ず。

都にて旅なる人をおもひやり 是は旅也。

かやうのさかひ分別有へし。惣して付にくき物を、新式、一句二句の物にさためたる也。かやうの字は、同じくは句中に出さぬやうにするか、作者のたしなみ也。句に、

旅をへつゝも立かへる宿 此句をは日かすをへつゝとあらまほしきよし、先輩の判也。旅枕などいはんより、かり枕と云て、かすの字をたはひたき物とそ。俳の句にも付にくき物と知なから、たひ／＼遠慮もなく出せば、苦吟に及び一座の無興となる事也。然とも一句に百句は付物といひ来は、うかひ出たる句を付にくき物とて出さざらんもいらざる用捨なるへき也。かやうの事は時により処による事也。会にて善悪の弁もなく、句数をおほくするを手柄とのみおもふ人は、なき指合も有やうにいひて返したき物也。又たしなみふかき

人は句つくり今すこし何とそと思ふ内に、たひく人にとられて句前をのかせは、終には句遠になるゆへに、よからぬ句なりともあれかしとおもふやうのところか。又は初心の人か少人か、いかさま句遠なる人の句は、有さし合も見のかして付たきか宗匠執筆の心也。かゝる折ふし一句有と付にくき物とて用捨あらんは、かへりて用捨なきよりをとりたる作分なるへし。(三六ウ)

199 玉の字 四也。この内たからの玉は一也。その外はほうひの玉、似せ物の玉也。俳にはよみこゑの内に、いつれの玉なりとも今一加て五も有へし。しなのかはりたるうら面に有也。たからの玉は、

たまにこえたるたからやは有 又夜光の玉下和か玉の事は、たれもしれる事也。跡先車十二両てらす玉也。宝也。句に、

夕のみにまよふ小車

夜光玉をいつくにもとめまし 行助

ほうひの玉と云は、玉つはぎ、玉手箱など也。似せ物の玉といふは、露の玉、玉あられ等也。又玉極は結構をつくしたる也。又魂極はいのちのつきさま也。玉かつらはかみにたまをかさりたる也。又女をも云也。源氏物語のは人名なり。又うつくしき草のかつらをもいふなり。又璵瑠、琥珀、珊瑚などはたまとよむ文字なれば、玉に七句去へし。(三六オ)

200 玉の緒 只一。命に一也。玉の緒しなく有は物かはりて、俳に三も有へき義ながら、かやうの物は連俳同前也。哥、

玉の緒よ絶なは絶ねながらへは忍る事のよほりもそする

是はいのちの事也。玉は宝也。人身第一の宝は命也。古今集のうらかきに、命は魂をもてる物なれば、世中の玉を緒にてつらぬきちらぬによせていふ也と見え侍也。又、

逢事は玉緒はかり名の立は吉野の川の滝津せのこと
これはすこしの事也。又、

かた糸のかなたこなたによせ懸て逢すは何を玉緒にせん

是は只の緒也。句躰によるへし。(三六ウ)

201 玉章に ことは二句きらふといふは句による也。常の詞は嫌はず。うらみむことを残すことのは 此体也。(三七オ)

202 滝 只一。名所に一。滝津瀬一。花の滝、涙の滝に一。四也。俳には五も有へし。滝は山類水辺也。瀬の字入は山類にあらず、たぎる瀬也。山類付てあしく、涙の滝は、

我世をはけふかあすかと待かひの涙の滝といつれたかけん

花の滝の事は花の下に注侍也。(三七ウ)

203 田の字 七句去は俳に五句去へし。生田、田上等の名所は字去也。但名所にも色つくとかつくとか有は、常の嫌やう也。又つくる田は雑也。秋になる句体は秋の字の下に注侍也。又田鶴に田は付句も嫌はず。又田庵は居所に打越きらふ也。門田は常の居所也。又田簗の島は山類にあらず。水辺也。(三七ウ)

204 種蒔 植物に打越きらふ也。いねの事也。春也。他の種子はそれくくの季有へし。(三八オ)

205 竹 連に七句去也。俳に五句去へし。草木には打越きらふ也。又

竹にし、連に五句去、俳に三句去也。又さゝとしのは同やうの物なれば、此間連に面きらひ、俳に七句去也。又千尋の陰も竹也。竹と同きらひやうなり。又植物にあらざる竹杖なとも同嫌やう也。(三〇オ)
 206 竹林 竹林精舎の事にいは、天竺の事なれば、右鷲峯に注侍ことく名所にも植物にもあらず。然とも竹の字にはつねのことく嫌也。
 又七賢かすみし竹林の事にいは、唐の事なれば名所也。竹あるゆへの名なれば、竹につねのことく嫌也。(三一ウ)
 207 竹宮 伊勢の斎宮の事也。神祇也。名所也。名所の宮過て、連にはあらされと俳には有也。又此宮は仏事を忌也。

此宮は仏の御名をいむなれば西に向てねをのみそなく(三二ウ)

208 垂氷 雫の氷也。水辺にあらず。降物句に結てすると云説侍と、古句に只もみえ侍也。(三三ウ)

209 誰 人倫也。誰松虫なと恋にあらず。なれも松てふ虫は恋也。松の字かやうにしては字去也。誰渠に夕の字二句去也。朝には嫌す。是新式の詞也。誰には字去也。(三四ウ)

210 薪 木に二句去也。木とよむ時も同前也。焼は連に面きらひ、俳に七句去也。焼といへは連に五句きらひ、俳に三句去也。(三五ウ)

211 鷹 冬也。鷹狩も同前也。朝鷹は春なり。継尾の鷹の事はつものしの下に注也。春也。鳥屋鷹は夏也。羽のぬくるを鳥屋にこめて、尾羽のそろひたる時、人の物くひたる箸を灯て夜取出し初と、袖中抄に見侍也。初秋也。又盆の聖霊の箸をとすとも云也。かやうの説々より簗鷹といへは、秋にも成へき事ながら、その沙汰なく、野山の鷹を

も簗鷹と云来也。又鳥屋出の鷹は秋也。又小鷹狩、鷲鷹なと秋也。小鷹は、はい鷹、つみ、悦哉等也。かりはの事、かもしに注侍也。(三六ウ)
 212 焼火 夜分にあらず。もしは芦火同前也。衛士の焼火は夜分也。(三七ウ)

213 七夕 夜分也。秋也。銀河、連俳ともに三句去也。紅葉の橋、かさゝきの橋、ねかひの糸の類、連俳ともに折きらふ也。いづれもその所々に注侍也。又七夕、織姫、牽牛等は、月日に俳にて打越きらふ也。又七夕は連に一句なり。俳に右異名の内に今一有へし。又七夕つめは、めとまと通音なれば、妻と云事也。又、七夕衣は衣類にあらず。衣の字には常ことくきらふ也。(三八ウ)

214 高砂の松 古今集の序に、高砂住吉の松、相生のやうに覚えと有は山類にあらず。播州の名所也。又うた、

誰をかも知人にせん高砂の松も昔の友ならなくに
 是は山類也。名所にあらず。分別有へし。(三九ウ)

215 立木 岨のたつきにゐる鳩なとよみたるは、きもしすむ也。立をたまきに折きらふ也。をたまきは枯木の事也。これらにたよりのたつきは少も嫌はさる也。是はきもしをにこる也。うたに、

遠近のたつきも知ぬ山中におほつかなくも呼子鳥哉(四〇ウ)

216 便 連に只一也。俳によみこゑの内に又あるへし。たとへは句に 松をたよりにすむ莓の庵 かやうの句にひんきなどは三句也。(四一ウ)

217 高野山 大師より以前からの名なれば、尺教にあらず。他准之。

(三10ウ)

218 高ね 岩かねなと字去也。連に一、俳に二也。(三10ウ)

219 谷 連に二、内一は名所也。俳に今一只有也。(三10ウ)

220 絶に 堪、付句もきらはす。(三10ウ)

221 穢 連に二、俳に三也。(三10ウ)

れ

222 例に違ふ 例などに、この内連俳ともに一句有也。連哥にあれば俳言にたつましき事ながら、こゑの字はなへて俳になると云にならひてはい也。(三11オ)

223 れ文字 しれ、とれ等の間二句去也。又とられ、はなされ等の間も二句去なり。しれにとられとかはりては嫌はす。(三11オ)

そ

224 そひき物 連に三句去、俳に打越きらふ也。松竹等のけふりは、連にそひき物に打越きらひて、軽重のきらひやう侍とも、俳にはなへて打越嫌也。又そひき物にそひき付る事は、連哥の大事也。(三11ウ)

225 其曉 夜分にあらず。五十六億七千万歳の後、弥勒出世の時を云也。経論に説々侍と、しけきを恐て注侍す。和哥にて云は、吉野山を出世の地と指也。金峯山是也。かねのみたけと連哥にする也。吉野詣に百日精進するをみたけさうしと云也。そのあかつきには吉野付来也。又句、

あはれねかふも遠き後世

仏にとわかあかつきを待かねて その曉とあらされとその曉也。

尺教也。又句、

別つるそのあかつきを忘るなよ 是はそのといへと尺教にあらす。恋也。夜分也。(三11ウ)

226 空 折に一つゝ也。半天はうらに有也。そらこと、そらめなどの内に又有也。連に六也。俳に今一も有へし。久堅、雲井など、空半はなとに二句去也。又空の字こゑに云時、空と云心ならば、同字別訓也。(三12オ)

227 園 園生ともに植物に打越きらふ也。居所にも同前也。連俳とも二有へし。(三12ウ)

228 外面 只一也。俳も同前也。居処也。面連に面去、はいに七句嫌也。外は字去也。外といひかへては二句去也。(三12ウ)

229 僧都 秋也。田をむすひてする也。植物に打越きらふ也。是は玄賓僧都の備中吉備の中山にすみ給時、たくみ出し給物也。

山田守そうつの身社悲しけれ秋はてぬれはとふ人もなし
里遠き山田のそうつ人形に知はかりにやおとろかすらん

人しれぬ山田の僧都さのみやは立すくみても世をは過さん

山田へ水引具と云説侍と、鹿驚也。又句、

まねくかともえしは草の袂にて

のこる僧都のたてる荒小田 紹巴(三12ウ)

230 杣木 山類也。植物也。杣人は山賤也。山類にあらず。杣木も切

て後の句躰は植物にはあるへからず。(三十三オ)

231袖の香 袖のうつりか、薰^{カク}香^{カク}などは恋也。(三十三オ)

232袖のぬるゝに 涙、句によりて二句去也。打まかせて袖のぬるゝは涙のこと也。両方恋の句ならば字去也。二句去と云は、一方は哀傷^{シヤウ}か他の事にいひての事也。又ふり物にてぬるゝ句躰ならば、涙は嫌す。(三十三オ)

233袖の雨 涙也。恋也。是も右の段の如也。句によりて涙に二句去也。若又袖かさ雨、ひちかさ雨などは降物也。涙に非ず。涙の事にしては降物に少も嫌す。(三十三ウ)

234袖の露 是も右の段のことく也。句によりて涙に嫌と嫌はさると有也。

はるゝと分こし野への袖の露 降物也。

立田山秋行人の袖を見よ木々の梢は時雨さりけり

是は涙也。降物にあらず。又袖のぬるゝ、袖の雨など、涙の事にし

たてゝは、降物にすこしもきはされと、袖の時雨、袖の露は、涙にしたりても、降物に打越きらふ也。季をもつ故也。(三十三ウ)

235袖行水 水辺にあらず。是も右の段のことく涙に二句去也。(三十四オ)

236そもし にこりたるは二句去也。又ふきそ、ちらしその間も二句去也。(三十四オ)

つ

237月 面に一つゝ也。余波のうらにはなくて能也。新式に、春月一、

有明一、三日月一と有也。此心は、春夏秋の三季には、その季の月一つゝ也。有明は一座二句の物なれば、秋に一、他の季に一也。然は春の一、季の内に成とも、月と有明と三日月と三は有へしと也。夏冬も同前也。又月は秋はかりに七なからも有也。有明は俳にて三も有は季をかゆる也。又有明にてその面の月をもつ也。(三十四オ)

238月 連に七句去、俳に五句去也。月次の月には字去也。又月に衣更^{キササ}着^キ、弥生^{ヤヨキ}は少もきはらず。月次の月とは、卯月、霜月など也。夜分にあらす。天象^{テンゾウ}には打越きらふ也。天象と云は、日、月、星也。又月次の月に、有明は二句去也。又月次の月に、きざらき、弥生は二句去也。又月に五月雨、少も嫌す。又月に日次の日は、打越きらふ也。(三十四ウ)

239月 日次^{ヒジ}にしたかひて、その名かはる也。袖中抄に云、始^{ハジ}は三日月、七八日は上の弓はり也。十五日は望月^{マツキ}、十六日はいさよひ、十七日は立まち、十八日はあまち、十九日はねまち。扱^ハ廿日の月、廿二日は下の弓張、それより下旬はなへて有明也。大かた十四日より、月の入る先に夜明を有明と云へけれど、委は廿日の後を云也。弓張とは上弦、下弦とて半月の名也。(三十五オ)

240月いさよふ 袖中抄に、しはし月やすらふ也。又山の端より月の出たるか、しはし雲より出やらぬを云也。一方に付て心得へからず。

山の端にいさよふ月を出んかと待つゝをるに夜を更にける

出んかと待は夜の更と有は、出やらぬと聞えたり。綺語抄^{キゴゼウ}に、いさよふ月とは山の端より出たる月也。又十六夜の月をいさよひと云は、十五夜には暮るよりはや月の出る也。十六夜にはまつほと有て出る

故也。又月に限す、ひかりいさよふたと云は、そひき物に日のかけへたちたる也。そひき物なくてはいはれざる也。又人をいさよふは、倡也。雲や浪をも云也。(三15オ)

21月の雪 夏、秋の詞入ては降物にあらずと新式に見え侍也。夏、秋の月の、野山などに影うつろひて白を云也。

月影を雪かとみれば袖涼し 夏の句也。(三15ウ)

22月の霜 是も降物にあらず。夏、秋の詞入ての事也。詩にも、

月照平砂夏夜霜

又雪、霜の月影に似たと云て、夏、秋の詞も入すは降物也。又秋の夕霜と連哥につかひ来り。わかれの霜は初夏

にも侍は、句法によるへし。(三16オ)

23月の宿 露、冰などむすはすは、見宿になりて、居所たるへし。

(三16オ)

24月草 露草の事也。影、光等をむすへは月に成也。(三16オ)

25月影と つゝきたる句、二也。影をむすひて又有也。又月の影と

下の句、上句ともにとまらず。俳には沙汰なし。(三16ウ)

26けふの月 夜をまつ月、日にむすひたる月、入相にむすふ月、出る

三日月、又夕月、暮の月、いづれも夜分にあらず。扱又けふとさへ云

は、あらゆる夜分の物も通也。(三16ウ)

27月の出塩 塩に面きらふ也。俳には七句去也。月の満欠と同時に

は、月の出ときさす塩を云也。(三16ウ)

28月の桂の花 秋也。只桂の花も秋也。古哥に春と有。

春霞たな引にけり久堅の月の桂の花やちるらん

この哥にて春と云説有と、連哥には秋也。

秋来ても月の桂のみやはなる光を花と結ふはかりに(三16ウ)

24月日と つゝきたる詞、影、光をむすはすは、句によりて月次なるへし。(三17オ)

25月に折 恋也。神祇にあらず。月待、日待も神祇にあらず。(三17オ)

25月見に なかむる、むすひて同折に有也。又さゆる月は冬也。さ

やけき月は秋也。(三17ウ)

25躑躅 連俳ともに一句也。本草に、此花辛くらふ時は死也。見時つ

まつきてあゆまざる也。又杜鵑花は同し類にて、五月花咲物也。鵲

血に啼しなみたにてそめ出すかと云より、是も付たる也。

鳥もなけ名におふ花の岩つゝし 宗祇(三17オ)

253鶴 只一。田鶴一也。俳には今一有へし。田鶴は水辺か里ちかく

鳴やうにする也。(三17ウ)

254鶴林 双林とも云也。此内一句也。鶴寮の下に注侍ことく、天

竺の事なれば、植物にも生類にもあらず尺教也。如来入滅の地也。

八本ありし沙羅双樹の四本はさかへ、四本は枯て、生滅の相をあらは

すを鶴の毛色に似たるゆへ、鶴林と云也。又東山双林寺の事にいは

ゝ山類也。(三17ウ)

255継尾の鷹 白尾の鷹とも云也。いづれも春也。一条院御狩の時、

鷹旧山をおもふてしたかはす。その時つき始し也。山々の雪きゆれ

は、鷹の心山にかへらんと思ふゆへ、鶴の君しらすと云。白き羽をつ

けは、雪と見て帰らざる也。一説に、春は野山霞て、鷹の落草見えか

ぬるゆへ、白尾つくとも云り。又野山雪きゆれは、鷹の精よはる故、つくとも云也。

二月の白尾の鷹はしらねとも心任に尋てそ行(三18オ)

256 爪木 ひろふ薪也。植物山類等にあらず。木は字去也。薪には連俳共に折嫌也。(三18オ)

257 椿 只一。俳には又有へし。雑也。花あるやうの句躰ならは春也。(三18ウ)

258 雛名 鬼やらひと、なやらふとも云也。和漢ともに有也。大晦日の夜也。大舎人、四目有厄鬼をつくりて、桃の弓に芦の矢をはけて追也。慶雲年中に始也。(三18ウ)

259 露 露更て、夜分也。深に二句去也。夜の字入すして、夜の更たるさま也。露氷は霜の事也。此故に冬也。露涼しは夏也。露時雨は秋也。露霜は冬也。(三18ウ)

260 萬 秋也。只一也。俳に今一有也。紅葉を賞して用來は、葉も紅葉も付す。(三18ウ)

261 司召 秋也。京官の除目也。八月十一日也。公家の官にのほり給事也。(三19オ)

262 難面 無の字きはらず、つれもなきといは、無に二句去也。俳にて恋の外に今一有へし。(三19オ)

263 使 只一。恋に一也。俳には今一有也。句によりて人倫也。犬、鷹などのしたる使も有也。(三19オ)

264 つかはずに 送る、やるなど二句去也。俳に二はかり有へし。

(三19オ)

265 仕君、父、師、仏などにかはりて二なり。宮つかへはこの外也。但君につかふるは宮仕に折きらふへし。(三19オ)

266 釣舟に あま付す。釣に船、あまは付也。(三19ウ)

267 伝 連に二也。俳に今一有也。(三19ウ)

268 つらき 俳に三はかり也。うきに二句去也。(三19ウ)

269 妻 妹に面きらふ也。連俳共に一也。(三19ウ)

270 翹 句体かへて俳に二也。鳥羽、はかひ山など二句去也。鳥の羽面去へし。(三19ウ)

271 常灯 夜分にあらす。神祇、尺教のうちに一句有へし。(三19ウ)

272 つゝとまり 連に二也。俳に三も有也。つゝはなからと云詞也。

上の句には心得有也。下の句にも少、分別有へし。たとへは、

わかれになれば哥をよみつゝ かやうにはとまらざる也。

わかれをしたふ哥をよみつゝ 是は留也。

他准之。(三19ウ)

ね

273 子日 初春初子の日、野に出て小松引事有也。朗詠集に、

倚ヨリ松樹ニモテ以モテ摩ハ腰コソ習ニ風霜コト之ヲ難ヲ 犯 松は風霜にも色かはらず、

千年ふるものなれば、身にふれて初春に祝する也。又子日に松付合

の事は、松の下に注侍也。(三20オ)

274 願糸 秋也。七夕に竹竿に糸をかけて二星に手向也。荆楚記に

婦人採^{ツミ}三^ミ綵^{サイ}纈^{セツ}ニ穿^{スル}七^{シチ}穴^{ケツ}針^{ハリ}ニ或以^モ金銀^{キンギン}鑢^{リョ}石^{セキ}為^{シテ}針^{ハリ}陳^{チン}三^{サン}瓜^カ菓^カ於^オ庭^{テイ}中^{チュウ}以^テ乞^コ巧^{コウ}有^{アル}蟬^{セン}子^シ網^コニ於^オ瓜^カ上^{ジョウ}一^{イチ}則^{スル}以^テ為^シ得^{トク}巧^{コウ}と有^{アル}。この夜、二星逢^{アハ}て一年つもるおもひを解^{トク}也。禁中には、哥の御会、管絃^{クワンゼン}など有也。(三二〇ウ)

275 根^ネに 本、下、陰などの字、同意めかしき句ならは二句去也。たとへは松かね、又岩かねなどと、山もと、木陰等の事也。天下、月のもとなど嫌へからず。花一もとは、かすの事なれば嫌はす。(三二〇ウ)

な

276 流^ル 二也。俳にはよみこゑの内に今一有へし。流人^{ルジン}、流浪^{ルラウ}などは外也。流し物として左遷の事は、水辺にも旅にもあらざる也。又左遷を流木といへと、右同前也。芸の一流などは、なかれに七句きらふ也。(三二一ウ)

277 眺^{ナカメ} 只二也。哥詠は外也。俳には眺三^{ナカメ}、詠一^{テイ}、詠に一也。眺はめにも見にも二句去也。哥の詠はよむ事なれば、めにも見にも嫌す。(三二一ウ)

278 涙^{ナミダ} 七句去なれば、俳に五句去也。涙の露は秋也。涙の時雨は冬也。此等は季をもつ故に、降物に打越嫌也。涙の雨は季を持ぬゆへに、ふり物にきらはざる也。又涙の露、涙の時雨の内に、一座一句との定也。俳には二なからもあるへし。(三二一ウ)

279 涙川^{ナミダガハ} 恋にしたてたらは、句によりて水辺にあらず。淵^{フミ}も同前也。枕のものは海なれやなと云も、水辺にあらず。

むかし誰思ひにしつむ涙川 これは恋也。名所也。山城にも伊勢にも有也。(三二一ウ)

280 鳴^{ナル}に 鳥獸^{チウダク}の啼^{ナリ}、付句嫌也。鳥、獸、虫なども、かはりてなくは字去也。又鳥の啼しに、虫、獸等のこゑは二句去也。(三二二ウ)

281 鳴子^{ナルコ} 田か畑か植物むすひてする也。植物に打越きらふ也。秋也。鹿、鳥付さる也。鳴は字去也。泣は付句嫌也。子は、連に折嫌ひ、俳に面去也。(三二二ウ)

282 鳴神^{ナルカミ} 只一也。俳にはいかつちと又有へし。神には二句去也。(三二二ウ)

283 泣^{ナリ} 只一。恋に一也。人のなく也。鳥、獸の啼には二句去也。泣に涙も二句去也。又鳥、獸の啼に人の涙、付句も嫌す。人の泣に生類の涙も同前也。(三二二ウ)

284 難波^{ナニハ} 水辺にあらず。寺は天王寺也。津、入江等むすへは水辺也。又難波に浪嫌す。(三二二ウ)

285 名 只一。恋に一。植物に一也。俳にはよみこゑの内に今一也。名所は七句去也。(三二二ウ)

286 余波^{ヨハ} 恋に一。花、旅等の内に一也。俳には今一有へし。名の字残は二句去也。(三二二ウ)

287 歎^{ナゲキ} 木にいひかけは、植物に打越きらふ也。新式の旨也。(三二二ウ)

288 夏ノ月 春、冬の月と同前也。夏は月と過ては、明やすき月、郭公に有明なとむすひ、三日月に涼しなといひて、連に三有は、俳には四もあるへし。(三二二ウ)

289 無^ムに 有二句去也。□難面付句も嫌す。あやなし、おほつかなしは字去也。(三二二ウ)

290 波の花、水辺也。植物にあらず。正花にもあらず。花の浪は正花也。春也。植物也。波枕旅也。水辺也。舟なくてもする也。(三三オ)

291 習慣たかひに通すれば折嫌也。狎は右二字に二句去也。(二三オ)

292 苗代 春也。水辺にあらず。植物に打越嫌也。(二三オ)

293 中に 内二句去也。世間、大内等同前也。(二三オ)

294 媒人倫也。中立の二字に二句去也。(二三オ)

295 也と也 なるとなる、なれとなれ、かやうの間二句去也。又なり、なれ、ならし、なる、かやうの間付句きらふ也。又也に、成は、少も付句もきらふへからず。(二三オ)

296 なりに 二色有。一は也けり、一は成にけり也。也は右のことく二句去、成は字去也。又長き詞なれば、也けりも、連に句の置所かへて、二はかり有へし。俳に三也。成にけりは俳にも二有へし。又とまりに也は、連に四有は、俳に五有へし。(二三ウ)

297 ならんに 兩種有。たとへは雨とならんは成也。此ならんは三字かな也。又雨ならんはてにをは也。是もてにをはの三字かな也。きらひやうみもしに注侍也。(二三ウ)

ら

298 蘭 和哥には惣して、はぬる文字をとよむ也。縁をえにと云、難波をなにはといふ類也。俳諧にては、はねてことはをもたするに幸の事も有へし。蘭とすきて蘭と又有へし。(四一オ)

299 らんと らんの間、らしとらしの間、二句去也。らしとらんの間も

二句去也。(四一オ)

300 らんに をらん、ちらんなとの一字はねは付句もきらはす。句のとまりに付てはくるしからず。打越に嫌也。惣して、らんはうたかひのはね字也。一句の中におさへ字有也。一字はねにはおさへ字なき也。(四一ウ)

301 らんとまり など常にいふ事よろしからず。らんとめ、いよくあしくはね字といふ也。惣して、古法に席にての詞つかひ一とをりたしなみ有事也。扱右にも注侍ことく、はね字の上には、や、か、いつ、何、など等の詞置事也。委注侍らす。又句のしたてによりておさへ字なくてもはぬる也。たとへは、

六月も氷ふれる空はさむからん 又、

冰室守山は夏しもさむからん 此句躰にては、おさへ字に及はざる也。又めくらはねと云事有。

見渡は山や霞にへたつらん 見ると云から、うたかふへきやうなき也。又つんほはねと云事有句に、

聞はいつちに鐘ひくくらん 聞と云から、うたかふへきやうなし。惣して、親に見聞する事をうたかひの句につくるは、不堪のゆへ也。又しらざる事、見ざる事を、目のやうにつくりなす事、いよく聞にくし。又はね字には、付はたへもころえの有事とそ。(四一ウ)

む

302 梅 只一。紅梅一、冬木に一、青梅一、紅葉に一也。青梅、紅葉は自

然^{ゼン}の事也。是新式の詞也。一説に、五まで有へき事、如何。所詮^{ソゼン}引合て四也。五の物は、一はうらに有といへと、此義如何と云り。異説^{イセツ}には、新式、一座五句の処に右のことく有を、自然と云義理を取りかへて、梅は四也と云り。四の物ならば、俳とて五句の処に出へきや。已上右両説如何。答、新式の心は、梅五の内、青梅、紅葉は連哥にさのみこのまぬと云事也。ことに兼裁の句に、

紅^{ベニ}をわすれぬ梅の紅葉哉 此名句より、紅梅すきて、梅の紅葉は如何と云り。いはんや紅梅、紅葉の梅、うら面に有へからすと也。然とも新式に出し上は、制^{セイ}すへきやうなし。右のこゝろえにてせは、五なから出しても然へき也。是は連哥の式也。俳には、むめつけ、梅そめの類に今一加て六も有也。梅雨のことは、委五月雨の下に注侍也。

(四二)

303 虫^{ムシ} 只一。松虫一、鈴虫^{スズメ}一、已上三也。蚕^{サナ} 機織^{ハオリ}等は三の外也。虫のうらに有也。又玉虫、くつわむしなどの虫と云字付、ことに秋の季をもつ虫は右三の内也。出かちに有也。虫の字付さる名の虫は、うらに有と云事也。已上連の式也。俳には虫と云字付たる秋の虫、今一加て四也。かうろき、はたをりなどの名の虫は、けやけき物なれば、連と同前に面去へし。又みのむし、もにすむ虫等の雑の虫は、虫と云字付と、松虫、鈴虫等のうらに有也。又虱^{シラミ}、けらなどは、はいに三句去也。(四三オ)

304 室^{ムロ}戸^ド 居所にあらす。尺教也。一説に寺に折きらへと有。異説^{イセツ}には右の説用ゆへからす。出家の庵室^{アンシツ}也と云り。此説々如何。答、連

哥に室の戸は寺の異名につかひ来也。経論^{センロン}に禪室^{ゼンシツ}、入室^{ニラシツ}など見え侍也。仏境^{フツキョウ}也。居所にあらすと定たるにて、庵とは各別の物也。庵は居所也。然は寺と室の戸の間、連に折きらひ、俳に面去へき事勿論也。(四三ウ)

305 室^{ムロ}の八島^{ヤシマ} 人家の竈^{カマド}を云也。又名所に二所有。下野の三壬^{ミツフ}と云所の野中に有。常に煙たつと云来也。古事も有と、たしかならぬ説なれば記侍らす。異説に近所に清水ありて、けふり立とも云り。

いかにせむ室八島に宿も哉恋の煙を空にまかへむ
富士、浅間のけふりの類に火の類も付也。

室八島のけふりくらへん

田上や薪^{カキ}つみ置山ちかみ 宗長

近江の室八島に取なして付られし也。(四四オ)

306 むや^{ムヤ}くの関^{セキ} 山類也。八雲御抄に奥州と出羽の境也。深山の路也。

武士の出さ入さにしをりするをやく^{ムヤク}とちのむやく^{ムヤク}の関^{セキ}(四四ウ)
307 昔^{ムカシ} 只一。俳には二也。いにしへに連に折きらひ、はいに面去也。昔に古事^{フルコト}二句去也。述懐ならば、はいに三句去也。又昔に老は付也。恋になくさむ老の哀さ

昔せし思ひを小夜のね覚にて 宗長(四四ウ)

308 急雨^{ムラサメ} 村に二句去也。連俳ともに一句也。又連に雨に面きらへは、はいに七句去也。又うたひの松風、急雨などあまか名等は降物にあらず。かやうにして又有へし。又むら雨は雑也。然とも時節は心得

の有事也。惣して、年中雨の事、春雨はをやみなくいつまでもふりつゝくやうにする也。五月雨ははれまなきやうにいひ来也。六月は夕立。九月のすえより露時雨。十月は時雨。そのうち、みそれ又雪なといひ来也。この内、急雨は三四月、又七八月の間に有やうに見え侍也。(四四ウ)

309群に 群鳥群鴉、連に折きらひ、俳に面去也。又生類の群に、人の群集は面去也。又群に村、二句去也。(四五オ)

310村 居所に打越きらふ也。是は人家の事也。村竹などは居所に嫌す。又杉村、松村のたかき植物の村とし、又ひきゝ植物の村とし、連に面きらひ、俳に七句去也。又たかき木の村と、ひきゝ草の村と、そひきの村と、かはりては字去也。又叢はそひきの村、たかき植物の村に、二句去也。又人家の村は里には二句去也。(四五オ)

311藪 居所にあらず。夜分也。連に只一。法席、草むしろ、簾の間に一也。はいには今一も加て三は有へし。蓐むしろ草、むしろは植物也。藪とすれば夜分也。詩哥の席、法席は座の事也。夜分にあらず。簾は枕簾とて唐にねむしろにする物也。夏也。蓐むしろはいもしに注侍也。(四五ウ)

312埋木 植物に打越きらふ也。花、紅葉むすへは常のうへ物也。連に一過て埋木ともあらされと、はいには又有也。

名取川瀬々の埋木 顕ていかにせんとか相見初けん(四六オ)

313馬 只一。駒一。この外、意駒は心のさはかしをいふ也。ひま行駒は光陰の去やすきを云也。此等生類に打越嫌也。この内に一也。

俳には今一加て四も有へし。又駅路、駅長は連に馬のうらに有は、はいに七句去也。馬の餞別は連に馬に折きらへは、俳に面去也。生類に打越嫌也。又馬に物の名に有馬は七句去也。駒と駒も同前也。馬と駒とはりたらは三句去也。(四六オ)

314駅路 生類にも居所にも打越嫌也。旅也。和漢ともに馬つきの事也。駅長とは馬のとひ屋也。人倫也。神功皇后、帰朝し給て唐の法を和国にうつし給也。又昔、菅相丞 左遷の時、須磨にて駅長かかやうにならせ給ふ事、いかにやとおとろきしかは、菅家ノ御製、

駅長 莫驚 時更改 一栄一楽是春秋 又句、

つたふこそまやのあたりの雫なれ

武庫山おろし須磨の白雨 宗碩 又、

水と草とのさかひわかれす

板たゝく駅長のめはさめて 兼裁

又朗詠に、駅路鈴声夜過山 是は官軍胡地に征し時の事也。車馬に鈴付事は、勅使のしるし也。夜もとかめすとをす也。又鈴舟とて船にも付也。源氏、須磨へ下り給時有り也。

鈴舟のよりくる浪に驚て須磨の上野に雉子鳴也(四六ウ)

315葎 雑也。葎の宿も植物也。居所に打越嫌也。いひかへて俳に二は有也。源氏、桐壺の巻に、月影はかり八重むくらにもさはらすなど見え侍也。葎の宿は旧地の心有也。(四七オ)

316胸の霧 秋也。恋也。そひき物に打越嫌也。降物にはきはらず。胸の煙、恋也。そひき物に打越嫌也。又胸に心、句によりて二句去な

り。心をむねとよむ也。(四7オ)

317 紫の花 秋也。若紫は春也。花とあらされと、色ふかきなと云句
躰ならは秋也。只紫の草は雑也。又紫のねすりの衣とは、紫のきぬ
をきて人とねたりければ、汗に色かへてけるを、寝すりの衣と云也。

又根すりとは紫の根にてすりたる事也。両説也。(四7ウ)

318 むさゝひ 生類也。夜分也。(四7ウ)

319 むつこと 夜分也。恋也。(四7ウ)

320 迎に 向二句去也。餞別二句きらふ也。(四7ウ)

う

321 鶉 秋也。鶉の床、夜分にあらす。惣して、雲雀、雉子等に床有也。
水鳥にも床有也。又うつらかり、鶉鷹も秋也。(四8オ)

322 鶉衣 暮秋也。生類にきらはす。鶉には連俳ともに折嫌也。衣類
なり。荀子曰、子夏貧衣。若レ垂鶉。又鶉衣百結とて、つゝれ
さしたりし衣の糸の、うつらの毛の色に似たるを云也。(四8ウ)

323 鶉舟 鶉川、鶉飼、みな夏也。簪付へからす。鶉川に船も付へか
らす。はなれ鶉は雑也。各別也。(四8オ)

324 鶉 只一。かくして一也。俳にはこの外、金衣鳥、経よみ鳥などの
内に今一有へし。又かくすと云は、たとへは、

つはさの露やうくひすと啼 (四8ウ)

325 憂 には連俳ともに字去也。干は連に折きらひ、俳に面去也。惣
して、かくし題の事かもしに注侍也。(四8ウ)

326 占 大かた恋也。神祇にあらす。連に一、俳には恋に一、他に一有
へし。占かた又辻うらなとにかはるへし。(四8ウ)

327 歌に 敷島の道、連に折きらひ、俳に面去へし。敷島とはかりは日
本の名になれば、哥に付句もきらはす。又敷島と云事は、大海の中の
島を敷てある国なるゆへと、宇治山の喜撰か筆に見え侍也。又山の
跡なるゆへあの字を略してやまと云也。此ゆへに和哥と云時、ま
の字ととの字の間にあの字ひき有やうにとなる一かたの習也。

又難波津の道、浅香山の道なといひても俳に哥に面去也。又哥に詩
も連にて折嫌へは、はいに面去へし。発句、聯句等も同前也。又連哥
は哥に、俳にても折嫌也。哥と二は有へからす。又哥にことのは二
句去也。

ことのはもまたいひしらぬ程にして 是は哥の事にあらぬゆへ
也。又句に、

まなひもあへぬことのはのすぢ 是は道となけれと哥の事なれば
連に折きらひ、俳に面去也。又常のことは哥に少も嫌はす。(四8ウ)

328 うきねの鳥 冬也。水鳥は昼も波上にぬるゆへ夜分にあらす。一
説に、惣して鳥のぬる夜分にあらすといへれと、うきねの鳥はかり、
新式に、夜分にあらざる処に出て有は、諸鳥のぬる、ねくら、いづれも
夜分也と知へし。(四9ウ)

329 浮島原 水辺に打越きらふ也。山類にあらす、海につゝきたる原
也。かやうの原に野を付す。

舟よする富士の川原に日は暮て今夜を爰に浮島原 (四9ウ)

330 浦島か子 などいひて人名なれば水辺にあらず。昔水ノ江に浦島と云しものゝ子釣して宿にかへらす。海神のむすめにあひて衆を極しに、父母を恋しく思ふゆへ故郷にかへれば、此女玉手箱を授て、再びわかもとへ帰らんとおもはるゝ、ふたを明給なといひしを取てかへれば、もとの家もなく知人もなし。あやしうおもひて箱のふたを明れば、白雲うちよりたちて、とこよのかたへなひきぬと見し程に、みとりなる髪もしろく成て、たちまち老ぬ。三年の間とおもひしも数百年の後也。このはこを明すは仙境に帰へき物をと云より、あけてくやしきと云来也。

夏夜は浦島か子の箱なれやはかなく明て悔しかるらん (四10オ)

331 卯花 うつ木と云ても夏也。俳に、卯花過て、卯花下し、よろひ、雪などの内にいひかへて又有へし。(四10ツ)

332 兎 只一。俳に月筆などにかはりて今一有也。又支干の卯は折きらふ也。二の外に有也。卯杖も折きらふ也。初春卯日、君へ奉とも、下へ給とも有也。又卯花は植物なるゆへに、兎のうらに有なり。(四10ウ)

333 海 只一。名所に一也。俳には只の内に今一有也。伊勢の海、近江の海などいひて国の名にならず、名所也。又五月雨の海、霧海の内連俳ともに一有へし。

五月雨の庭はさなから海に似て 水辺にあらず。霧海の事はきもしに注侍也。硯海、各別の物なれば又有へし。わたつみは、海三の内也。むかしはつもしにこれと今はたもしにこる也。大海、海若その

外いろくにかく也。

海神のかさしに指と祝も君かためには惜ざりけん
海底の波かき分てかつく蟹の息も次あへす物を社思へ
又和田の原、ありそうみ等、海の事也。又にはてるは湖水の事也。をしてるは塩海也。(四11オ)

334 恨 恋に一、外に一也。俳にはいつれにても今一有也。かこつは同じ心ならは、うらみに連にて面きらへは、俳に七句去也。(四11ツ)

335 宇治の川島 まきの島の事也。類に非ず。山池の中島等も同前也。(四11ウ)

336 宇治の橋姫 姫大明神とて橋下にすみ給神也。又橋の北におはする離宮と申神の、夜なくかよひ給とて、浪たつ音すると云ならはす也。

小庭に衣かたしき今夜もや我を待らん宇治の橋姫
りきうの哥と云り。又住吉の神とも云り。(四11ウ)

337 移 月、日、花、色等にかはりても三字かな也。又うつろふとくの間はなかり詞なるゆへ、俳に物かはりても折きらふ也。又移香は袖か身か肌かをむすひてする也。(四12オ)

338 うら枯 秋也。草、苑、原、野などむすひてする也。植物に打越嫌也。草には字去也。俳にうら枯過て、折かへて草のかるゝ有へし。

枯野は冬也。秋の句にうら枯過て、その折に冬の枯野とも有へからす。冬野、冬草とは有也。又木の枯に草の枯は、連に折きらひ、俳に面去也。又人め離は、枯に二句去也。若植物によせていはゝ面去

也。(四12ウ)

339 打 うち霞などのかるき詞二句去也。面八句の内二も有也。右の打に碁擔付句も嫌す。又碁擔に砧うつなと字去也。又打わたすは句躰によりて見に二句去也。(四12ウ)

340 盃蘭盆に 蘭、梵語なれば付るも嫌す。他准之。(四12ウ)

341 植 草木ともに一句也。はいに草木の外の植物に、又一は有へし。(四12ウ)

342 うらやまし 浦の字、山の字に付句もきはらず。又うらかなしに浦哀等の字にあらず。只かなしき也。(四12ウ)

ゐ

343 守宮 井に二句去也。守には、連に折嫌、俳に面去也。守宮のしるし、恋也。虫のしるしとする也。古井なとにすむ、とかけに似たる虫也。此虫の血を女の脇にぬるに、私の情あれば、あらへとおちすと云り。異説に、此虫に朱をかひてあかく成とき、その血を女のひちにぬるに若不義の事有は、消うするよし也。古詩、

臂上守宮何日尽 鹿葱花落涙如雨 又句、

出入かすのしけきみやもり

うき中や虫のしるしもかはるらん 宗伊

宮女を守と云によりて、守宮とかく也。(四13オ)

344 井 板井、山井等の内に、俳に二はかり、又大井、亀井などに五も有へきか。(四13ウ)

345 雲井 都の事にしても端居に字去也。(四13ウ)

346 猪 ぶすめともかるもかくめとする也。いつれにても只一也。雑也。俳には物の名に今一あるへし。(四13ウ)

347 射場始 初冬十五日也。天子弓場殿へ出御まし／＼て、觀覽有事也。この義あらされは、来春賭弓なし。賭弓あらされは、その秋、相撲もなしと也。(四13ウ)

348 韵の字 新式に、むかしは時雨に夕くれなとのとまりをきらへと、近代その沙汰なし。当時きらふは哉、発句の外、ねかひかな又有也。して、とまりけり、比など、連に折きらひ、俳には一座に五句も有は、一はうらに有也。空の字は韵に、連にて二有は、俳に三も有へし。上の句つゝとまり、下の句にとまりいさゝかこゝろえ侍也。その所々にてしるし侍也。わきの句、第三等の留りの事は、別におくに品をたてゝしるし侍也。(四14オ)

の

349 野宮 神祇也。名所也。嵯峨、賀茂に有也。伊勢の齋宮にたち給時の精進屋也。野宮の別は秋也。九月十六日にて、桂川の秋と同日也。西川のほらへともする也。齋宮に下給時、禁中にて御いとま乞有て、桂川にて秋有也。(四14ウ)

350 野山の色 秋也。植物に打越嫌也。但雪、霞などの色は別也。かれ野は冬なれと、色をむすへは秋也。委山の字に注侍也。(四14ウ)

351 野に 原二句去と云は、ふもとのほら、あたりの原の事也。松原、

檜原は付句も嫌す。又野らは野原の中略なれば野に字去也。原に二句去也。又野へとつゝきて、連に二は有は、俳に三も有へし。名所も此内也。(四14ウ)

352 野もせ 道もせはせはき心也。一句つゝ也。かやうのせもし連に折きらへは、はいに面去也。狭衣、小筵などは二句去也。(四15オ)

353 野守の鏡 むかし雄略天皇の御狩に出給に、鷹そりてみえされは、野守を召てとひ給に、鷹のありし処をさし侍はいかにしてしるそととひ給は、この野に待水に鷹の影うつり侍よし申奉也。野守の鏡として水に打越嫌也。水辺也。

簗鷹の野守の鏡えてし哉思ひ思はずよそなから見ん(四15オ)

354 野中の清水 幡州いなみ野にある也。むかしはめてたき水にいひなせと、すゑの世にぬるく成也。又能因法師哥枕には、野中の清水とはもとの妻を云也。

古の野中の清水ぬるけれどもとの心を知人そしる(四15ウ)

355 野分 順か和名集に慕風とかける也。秋の大風也。野にも分にも二句去也。(四15ウ)

356 野を焼 春也。植物に打越嫌也。又野に田は付さる也。沢田と付来也。又野沢と云に田を付也。古来連哥の法也。(四15ウ)

357 法 只一。法令に一。この外法師もなし。俳にはよみこゑの内に今一加て已上三は有へし。法令とは尺教にあらず。世法也。句に、おさむる法に世こそやすけれ(四16オ)

358 軒 二。軒端も此内也。はいには今一加へし。又軒のしたゝり同

玉水等水辺にあらず。ふり物にもあらず。かやうの物かならず降物むすひてすると云説侍と、古句に多くさもなくて見え侍は、苦しかるましきか。(四16オ)

359 残 暑 秋也。螢は残としても夏也。又菊なども残として秋也。(四16オ)

360 長閑 二也。うらゝ一。俳にはのとむなといひかへて今一有へし。寒、あたゝか、しつかなと二句去也。(四16ウ)

お

361 萩 秋に一、夏冬の間に一、焼原一、はま萩に一、是は雑也。水辺也。已上四也。俳には五も有へし。又萩のそよぎ、同こゑは、風体に二句去なり。下蒨、やけはら、枯葉など少も風躰にきはす。句、

いつかは秋の風を聞まし

萩はまたかつ下蒨の野へにして

いつしか秋の風はたゆらん

おきの葉は降つむ雪に折ふして 又はま萩に芦は、連俳ともに面去也。

草の名も処によりて替けり難波の芦はいせのはま萩(四16ウ)

362 落葉 只一。松に一、柳に一也。俳には今一加て四也。木葉ちるもこの内也。木葉もちらぬ躰は雑也。ちるも色の字むすへは秋也。松竹の落葉は雑也。惣して植物の落葉、右四の外はなき也。常盤木の落葉は夏なり。

茂ほと落葉かさなる端山かな

常のおちはは冬也。桐、柳は初秋也。(四17オ)

363 落葉宮 女三のあね宮也。皇女なれば人倫にあらず。冬にも植物にもあらず。落葉は四の内也。(四17ウ)

364 親子 つゝきては述懐也。おやとはかり、子とはかりは述懐にあらず。又親と子は二句去也。親と云に子はこもる故也。

子をおもふ親の心の浅からて 中の七文字、心のほとのとあらまほしと古人の判也。(四17ウ)

365 俳 只一。恋也。月花の内に一、俳には他に今一加て三也。影、陰、景には二句去。面も同前也。(四17ウ)

366 老 只一。生類、植物の間に一也。俳には今一有へし。老に白髪、かしらの雪等連に面きらひ、俳に七句去也。又かゝ見の影なくやうの句、老に連にて五句きらひ、俳に三句去也。但恋の句ならば嫌へからず。

又老に翁も二句去也。よはゐも句によりて二句去也。かたふくなといはゝ連に五句、はいに三句去也。(四17ウ)

367 思ひに 火二句去と云は、くゆるおもひ、きえぬおもひなど也。さなくは嫌はす。(四18オ)

368 思ひに 想像二句去也。おほゆるなどは、すこしもきらはす。

(四18オ)

369 帯 新式に沙汰なし。衣類にあらず。俳に下帯と二はかり有へきか。雨を帯なと面去へし。(四18オ)

370 男 只一。柱男なといひて連に二也。俳に今一加也。男山も右の内也。又ますらお、賤のお、薩男などは、折かへて三なからも有也。

又男鹿、男松、鳥の雄などは、右三の内也。(四18オ)

371 尾上 只一。名所に一也。はいも同前也。峯は付す。但名所の尾上には付也。(四18ウ)

372 晩稲田 植物に打越きらふ也。をしね、連にひきゝ植物に五句きらひ、俳に三句去也。一説に、おくて田としねと、植物にきらひやう、軽重なしとあれと、おくて田は晩田ともかきて、田のかたへつよく、植物によはし。又をしねは遅稲の中略なれば、植物はかりにかゝりて、田のかたへかゝらす。然は右の説用へき也。(四18ウ)

373 奥 折に一つゝ也。俳にはよみこゑの内に今一有へし。陸奥はうらに有也。(四19オ)

374 起 夜分也。ぬる、ふすに二句去也。同じ夜分ならば連に五句嫌ひ、俳に三句去へし。又人の上に云と、草木、生類にかはりては、句によりて少も嫌へからず。(四19オ)

375 朧 月をむすふ也。星をむすひても同前。紹巴の句に、灯にむすひても見え侍也。

おほろ夜の月などはあしゝ。夜のおほろと云事なきゆへ也。月の朧夜なと云也。又朧に霞二句去也。又おほろけならぬと云詞、すこしならずと云事也。句、

おほろけのえにはあらざる新枕 かやうにしては春にあらず。霞にもきらはす。又、

おほろけのえにあらざるを月もしれ 此句春也。霞に二句去也。
又麗の清水は、山城の名所也。

大原や麗の清水雪ふれは夏は遠なる物にそ有ける (四十九才)
376 穂 尾の字、花の字二句去也。 (四十九才)

377 大神祭 四月卯日也。三輪の事也。 (四十九才)

378 大原祭 二月上旬の卯日也。 (四十九才)

く

379 草花 只一。秋也。花の草枕、花の草庵の類に一。連に二也。俳にいひかへて三有也。こゑも三の内也。又野の花も草花也。秋也。句、夕露に花咲草の戸をとちて 秋也。又、

行袖のあつまる野への花の陰 是は春也。哥の題にも春、秋の部に差別有也。 (四十九才)

380 草庵 植物にきはす。草ふき、草の戸、連俳ともに折きらふ也。草枕、植物にあらず。草を枕は植物也。草むしろ夜分也。植物也。旅に非ず。草の原、野に嫌ず。又草に野への千種字去也。紅葉の千

種みゆるなどは、連俳ともに二句去也。又草に叢も二句去也。村も同前也。 (四十九才)

381 薺 人倫也。只一。草を刈、人倫にあらず。一也。俳にいひかへて今一加て三も有へし。草かりと人倫にしては草に二句也。植物に打越きらふ也。刈は連俳ともに折嫌也。 (四十九才)

382 草に 本草、つれく草など、又文字の真、草いづれも字去也。是

等植物にきはす。又草に、雑すこしもきはす。 (四十九才)

383 草枯に 花の残るは秋也。惣して名草のかるゝは冬になれと、花、色、露等むすへは秋也。萩もかるゝは冬なれと、穂の字入は秋也。

(四十九才)

384 熊 一也。俳には熊手か皮なとに又有也。又名所に有へし。 (四十九才)
385 くらもる 只一。月、かゝ見などの内に一也。俳には物かはりて又有へし。 (四十九才)

386 車 只一。法に一。水車一。輦 此内也。俳には何とそかはりて今一有也。法の車とは、法華經に有、羊鹿牛の三のたとへの事也。もとより尺教也。

世中をうしの車のなかりせは思ひの家をいかて出まし

又ふるき句に、右の哥の心にて、

誰か扱思ひの家を出つらん

あかつき月に車引をと 又、

牛のちからをわればたのまむ

道あさき法こそ鹿の車なれ 宗祇

小乗は、あさき教なれば、大乘法花のちからをたのまんと云心也。又火車は、火車 自然去 華台 即来 迎有より云也。竜骨車は、田へ水をしかくる物也。輦は、字書に人歩挽車と見え侍也。桐壺の巻には、宮中をのる車と見えたり。又懸車は、知者の及第して、勅許有てのりなから参内するを云也。是を懸車の老翁なと云也。又隠居してより六十已後いらざる時、懸て置をも云也。飭車、花見車は、物見車の事

388 雲峯 クモミネ 六月也。山類にあらす。峯には、連俳ともに折きらふ也。
 カウンオホシキホウ
 夏雲多二奇峯一 エニイ 溯明か句也。(四22ウ)

390 くらす こゝろのかきくらす、涙にくらすは句によりて、夕時分に

あらず。思ひくらすは夕時分也。惣して日のくれんとする時を黄昏クハクワンと云。入日の後、世上黄キに成也。そのうち雀色時スヘイロトキと云。この時すゝめねくらあらそふ也。生類に打越きらふ也。そのうちを薄墨ウスミのそらと云。句に、

薄墨に絵かける雪の夕かな
ウスミエ

黒染の夕や余波袖の露
玄旨

柳塘漠々暗啼鴉リウタウマクタンテイヤと呂中孚が作也。さてそのうちを夜に入て、
鴉羽玉ウハタマのそらとも夜共いふ也。(四二三オ)

分入かたやくらきみちのへ(四23ウ)

392 水鷄クキナ 夜分也。夏也。只一句也。(四23ウ)

393 国の名 連に三句去也。俳に打越嫌也。(四23ウ)

394 暮 字去也。夕の字、一方時分にあらすは二句去也。年の暮などの事也。是を大暮と云也。(四23ウ)

也

395 八幡 ヤハタ 名神非_レ名所_ヲと云事、右いもしの下にしるし侍也。たとへは

八幡の告そあらたなりける是は名神也。名所にあらす。又句に、弓張の月は入なりやはた山。是は名所也。又国々に所の名に云事有。これももとは八幡ましますゆへの名なるへけれど、所の名になれは、神祇にあらすと知へし。又海賊を八幡と云也。是は日本船の帆に祈禱のために八幡とかくを見て、海賊の舟に八幡とかきて、日本

船に似せて黒舟にちかつく也。是も元は八幡よりおこれと、悪賊の名に成也。已上俳には、神と名所と八幡と三ながらも折かへて有へし。(五一オ)

396 歎冬 連俳ともに一座一句也。暮春也。山の字、吹の字に少しも嫌はず。但句に、

植てわかすむ陰の山吹 など云は、山類にはあらされと、山には二句去也。又山吹色とは、哥、

山吹の花染衣ぬしや誰よへとこたへす口なしにして

梔にてそめたる也。又歎冬は元来ふきのたうの事也。山吹とよむは和訓のあやまり也。(五一ウ)

397 宿 只一。旅に一。やとり此外也。居所也。この内、やとりは居所に打越嫌也。此外鳥獸、月、露等の間に一。これは居所にあらず。

以上連に四也。俳にはよみこゑの内に、しなかりたる今一加て五も有へし。宿に鳥獸、月、露等のやとりは俳にて七句去也。又廿八宿は星といふころなれば、宿に付句も嫌す。同字別訓也。又宿世はむかしと云心なれば、是も宿に嫌すと知へし。(五一ウ)

398 屋 塩屋、関屋などいひて四句也。俳には今一加へし。厩、輦等別字有は、連に面を嫌ひ、俳に七句去也。又屋に宿も、俳にて五句去也。(五二オ)

399 柳 只一。青柳一。他の季に一。已上三也。茂は夏也。散は秋也。枯は冬也。只柳。青柳は春也。俳に人名か器財に又有へし。(五二オ)

400 藪 植物に打越嫌也。一座四句也。俳には植物の外に今一加へ

し。惣して草、木、竹等の生そひたるを藪といへと、此内竹には二句去也。(五二ウ)

401 箭 只一。年の矢一也。俳には物かへて今一有也。矢に弓張月むかしは付侍と、近代はきらふ也。矢に年の矢、弓に弓張月、連俳共に折嫌也。(五二ウ)

402 山姫 雑也。山類にあらずと云説あれと、山類也。龍門の瀧にて

伊勢

裁縫ぬ衣着し人もなき物を何山姫の布さらすらん (五二ウ)

403 山賤 人倫也。山類にあらず。山には字去也。賤と云詞、連に七句去。俳に五句去也。(五二ウ)

404 山城のとはぬ など云詞、名所に打越嫌也。此詞過て、鳥羽又有也。俳には人名か、伊勢の鳥羽などに又有へし。鳥の羽、連俳ともに折きらふ也。(五三オ)

405 山に有関 山類也。白川の関は山類也。この関は下野と奥州の境也。

都をは霞とともに出しかと秋風そ吹しら川の関
是は奥州也。又、

なれくみてみしは昔の春そともなと白川の花の下陰
これは京の辺土也。又、

年経は我黒髪も白川のみつわくむ迄老にける哉
是は筑前也。遊女の老後によみし也。(五三オ)

406 山鳥 山類にあらず。山にも鳥にも字去也。水鳥は水にすむ鳥の

惣名なるゆへに、水辺也。山鳥は鳥一の名なる故に、山類通也。又山鳥の尾のかゝみの事、哥、

山鳥の初尾の鏡影ふれて影をたに見ぬ人を恋しき

かゝみにをのか影を照して鳴也。初尾は啼尾也。先輩の発句に、

山鳥もこゑせむ月の高根哉 又異苑に、

魏時南方猷ニ山雞ニ帝欲聞其声ニ公子令大鏡著ニ其前ニ雞鑑形而舞不知止 遂至死矣。山雞は山鳥也。又水かゝみにをのか影を愛する也。詩に、

山雞照ニ緑水ニ自愛 一何愚。古人は鳥類の自愛をさへに

くめる、人事如何。又山鳥は雌雄一所にやとらす。山の尾をへたてゝぬる也。

昼はきて夜は別るゝ山鳥の影見る時そねはなけれける (五三ウ)

407山下 山もとなどに木の根、木陰等二句去也。花の一本はかすの事なれば嫌す。月のもと、清水かもと等は句によりて嫌也。(五四オ)

408山陰と 有て又山ふかき陰なと、折かへてあれば、俳には山陰二、山の陰又有へし。(五四オ)

409山かつら あかつきの雲也。夜分也。そひき物なり。哥、まきもくのあなしの山の山人と人もみるかに山かつらせり

古今集、神あそひの哥也。是は雲の事にあらす。草のかつらのまといたるやうに、神乙女のうつくしきかさしをほめたる也。(五四オ)

410仙人 山類にあらす。山には二句去也。人には字去なり。釈名に老而不死曰仙。仙遷也。迂而入山也。文字も山人とかく也。

仙術列仙伝に見え侍也。おほくは朝霞を服して、世外を所居とする也。句に、

けふりもたゝぬ里そ長閑き と云に、

仙人は春のかすみをいのちにて 宗祇

是は古詩に、

松間寂々 无烟火 応服ニ朝来一片霞

此心にて付なせる也。(五四ウ)

411山の色 野の色、草の色等、植物に打越嫌也。秋也。紅葉には、連に面きらひ、俳には七句去也。又雪、霜などにて色をもたせたる句

明はなれたる山の端の色 此句は植物にも秋にも嫌はすと知へし。又松の色はみとりの事なれば、秋にあらす。是も句に、

色にもれたる山松の陰 等の体秋也。

竹の葉はうつらふ中の色色さひし 是も紅葉の中に、竹はかりかはらぬと云嫌なれば、秋也。(五五オ)

412山柴 植物也。刈はこふ、になふなといはゝ植物にあらす。そよく山柴又柴のたちえなとおほくつかひ来也。(五五オ)

413山の錦 紅葉の事也。連にて紅葉に折嫌ひ、俳には面去也。(五五ウ)

414山里に 柴の戸、草庵の躰大かたは同意也。句躰によるへし。(五五ウ)

415山科 又山科の宮、山類にあらす。山の字には字去也。(五五ウ)

416山に 羨し、付句もきはらず。浦の字も同前也。(五五ウ)

417八重 一座一句也。俳には二も有也。かさなると云て、連に面嫌ひ、俳に七句去也。(五五ウ)

418 闇に くらき、連に面きらひ、俳に七句去也。是は同じ夜分の事也。木陰、家内等の夜分にあらすしてのくらきは、句によりて二句去也。(五五ウ)

419 弥生に 月次の月、二句去也。又弥生に夏近き等、同意也。又弥生山は春山の事也。(五六オ)

420 簾 やな瀬、やなくる等、夏也。のほりやなは春也。下り簾は秋也。くつれやな同前。あゆをとる具也。此故に、やなにあゆはたかひに付さる也。(五六オ)

421 焼野 山をやく、はたをやく、草をやく、荻のやけはら、いづれも春也。(五六オ)

422 社に 宮は付さる也。折きらふ也。俳に面去也。皇居の宮に社は、連にて面去は、俳にて七句去也。又宮社に神とは付さる也。板を立置ても宮社と云は、神のましますゆへに付過と云事也。皇居の宮に取なして神をつくる也。又社に宮奴も付す。神祇ならざる御奴は、たかひに付也。(五六オ)

423 八橋の蛛手 参川の名所也。くもてとは橋の柱にすちかへて打わたしたる木の八有は、蛛の手によそへて云也。又伊勢物語には水行す多の蛛手なれば橋を八わたせる故と云り。心かはり侍也。又蛛手、八橋にかきらす哥に見え侍。

浪立る松のしつえを蛛手にて霞わたれる天の橋立 (五六ウ)

424 や文字 うたかへは、二句去也。又五月雨や、春日野やなどのすてやは付句もきらはす。又、

月や花や雨や風やの、はさみたるやもしも付句も嫌す。又うたかひのやもしに、よのやはいよくきはす。折合にはきらふ也。又うたかひのやもしの外は、発句の切字とならずと知へし。(五六ウ)

ま

425 松 連に七句去。俳に五句去也。又松に子日付てくるしからすと云は句に、

春ともみえぬ松の葉の色 と云に、

子日せし野へも人なき古里に 宗祇

かやうの作例有は、付てくるしからすと云説あれと、新式二句去の処に出侍は、付へき物にあらず。むかしの法をあらたむると云は、かやうの事也。是は古人あしきと云にはあらず。時節相応と云物也。(五アオ)

426 松門 植物にあらず。松にてつくりたる門也。松の戸、松垣同前也。又門松は初春也。

松原は物かみやこの春の門 (五アウ)

427 松風 二。松の風も此内也。松風と二は有。松の風と二はなし。俳にはのもし入ても二有。外にあまの名、うたひなどの内に又有へし。又松に風むすひたる句はいくつも有へし。(五アウ)

428 松風の雨 俳に雨三の外に有也。降物にあらず。似せ物也。句に松風は袂もぬれぬ雨にして 又、

ふる雨は松吹風の音に似て 是は降物也。似せ物にあらず。雨三

の内也。(五八オ)

429 松風の時雨 是は雨とかはりて、冬の季をもつゆへに、降物に打越嫌也。(五八オ)

430 松緑 雑也。色の字むすひて季をもつ事、右山の字の下に注侍也。又みとりたつ、若みとりは春也。(五八オ)

431 松虫 初秋也。連にて松に五句去は、俳に三句去へし。又句に、哀や人を松虫の声 是は待に二句去也。植物に嫌はず。又句に、分かへる陰の松虫ねに鳴て 是は植物也。(五八オ)

432 松花 春也。哥には百年に咲やうに云也。十代とも云り。然とも毎年緑のもとに白く咲也。格物論に、松木春二三月抽蕤生花 結子と見え侍也。又詩に、

飢 拾松花一渴 飲水 偶從山後到山前 (五八ウ)

433 松のこゑ 松のひゞき風寐に、二句去也。風寐の事かもしに記也。(五八ウ)

434 松の字の有名所 惣して連にて五句去也。俳に三句去へし。すゑの松山は、松有ゆへの名なれば、常のことく連に七句きらひ、俳に五句去也。他准也。(五八ウ)

435 待 連に二也。俳に三有へし。待と云字の入たる句の事也。只まつ寐の句は、何程も有へき也。たとへは句に、

かならずといひしを頼む夕暮に 又、

とはむかと思ひ飽ぬるねやの中 (五九オ)

436 枕 連に七句去は、俳に五句去也。夜分也。又枕に夢、ぬるなと付

来也。(五九オ)

437 正木に 木、二句去也。又正木のかつらと云物は、山家のかきほなとにはふ物也。常の正木に似てかつら也。

太山には霰ふるらし外山なる柁の葛色付にけり

奥山に柁のかつら散時はその事となく物そ悲き (五九オ)

438 株 植物にも生類にも打越嫌也。草には二句去也。馬、駒には連に面きらひ、俳に七句去也。又野をかふ牛馬なと云ても、うへ物に打越きらふ也。たとへは句、

はなちかふ牛の子は野にはみ入て か様の句也。又、

はなちかひぬる野への牛の子 此句法は植物にもきらはす。水もかふ故也。又哥、

牧野より株負せて行駒の口の見もあちきなのよや

口のことは、馬の口にかこをあてゝ草をはませぬ也。まくさをはむまに、はませんためにをふせ行と、おもふやうにはませぬと云事也。世事かくのことし。わか物なから自由にならぬ也。(五九オ)

439 鞠の庭 新式に庭の心あらは、一の外は如何と見え侍。是は庭と場とまきれやすき故也。鞠場と云時は、庭の字かくましき事ながら、古来庭の字へちかきと云なす也。俳にはたとひ庭の字にても、庭の外に又有へし。(五九オ)

440 祭 只一。神祇也。打まかせては賀茂の事になるゆへ、夏也。賀茂は付さる也。俳には、神祇ならぬ内に今一有へし。神祭の事は、くはしくかもしに記侍也。(五九オ)

441 眞に 偽二句去也。一座二句つゝ也。俳には二つゝも有へし。

(五10ウ)

442 窓 只一也。俳にはしななへて今一も有へし。居所なり。又窓に戸のきらひやう、新式二句去のところに侍。元来居処は三句つゝきて、連に五句去の物なれば、二句去て同じ居所有へきやうなし。二句去と云は、居所の窓に川戸、水戸など付、又居所の戸に山窓などの居所ならぬを付よと云事也。両方同じ居処ならば、連に面去、俳に七句きらふ也。(五10ウ)

443 籬 只一。霧のまかき、かすみのまかき、此間に又一也。俳にはまかきか鳥又有へし。(五10ウ)

444 まこも 水鳥也。植物也。雑也。刈なといひても同前也。(五11オ)

445 夕ま暮 まの字にこゝろなし。真、間などの字にすこしも嫌す。

(五11オ)

446 まし 韻に二也。俳には三も有へし。句の中には二句去也。(五11オ)

オ)

447 檣 木に付句もきらはす。真木の戸などは木に字去也。真木と云は良材の事。柿、柃なども木にきらはすと知へし。(五11ウ)

け

448 煙 連に七句去は、俳に五句去へし。火の類、たく、ふす、ふるなど同意也。松、竹等のけふりは似せ物なれば、句によりて火のうはさ付てもくるしからず。又煙は、居処か垣、植物、水辺、富士、浅間、竈など

のやうの物、句に結てする也。さなきは無名のけふりとて深く忌也。

一すちのけふりは空に立のほり かやうの句也。又、

けふりとなれるそらの哀さ 是は哀傷に落着するゆへ難なき也。

又むかし梵灯庵主のころの句に、

人を送りてかへる鳥辺野 と云に、

身はいつのけふりのために残るらん その時代の名句也。是より

煙ノ宮と号て北野の末社にいはひ置し也。又古句に、

一村の松の梢のうちけふり と云に、

里はあるかの山のかたはら 又、

たえ／＼けふる水の行末

さし下す鵜舟のかゝり夜は明て 此句かゝりをのそきてあらまほ

しと先輩の難有し也。(五11ウ)

449 けふ 連に二也。俳にはよみこゑの内に今一加へし。けふにきのふ、あすは二句去也。又けふに今の字嫌はす。但こゑに云時は二句去也。今はけさにも嫌はす。是もこゑの時は二句去也。又今日の今夜、

夜分にあらず。惣してけふと云詞入は、夜分の物、いつれものかるゝ

法也と知へし。(五12オ)

450 けりに けらし、けさ二句去也。けり留りは連に四有は、俳に今一

加へし。(五12オ)

451 けらし 留りに二。はいには今一加へし。句の中には三字かなな

れは、連に面嫌ひ、はいに七句去也。又けらしはけるらしの中略なれ

は、らし、らんにも二句去也。(五12ウ)

452 けし 長閑けし、遙けしなどの詞は連に折きらひ、はいに面去也。

又けさも同前。けしにけさ連に面去、俳に七句去也。(五12ウ)

453 毛をかふる鷹 夏也。諸鳥も同前也。委鳥屋の下に注侍也。(五13オ)

454 獸と獸の間 五句去也。はいに三句去也。獸狩は夏也。(五13ゼ)

455 下知の詞 惣して二句去也。又下知の句、二句つゝかざる也。(五13オ)

ふ

456 牡丹 一座一句也。漢には春の季になせとも、連俳には夏の景物すくなき故に、初夏になす也。句、

春さかぬ心や花のふかみ草 宗碩

此名句より、宗碩の異名を牡丹花と云し也。百花の色をあらそふ春さかすして、初夏にはしめて咲出るは、さすかに花王の徳をそなへたるとの鉢也。漢に花王と此花を云也。漢には四時ともに花有也。詩には初春におほくみえ侍也。又秋の詩に、

濃艶豈^{アノハナ}無^{ナシ}ニ 三月盛^ノ 残紅更^シ向^ム 九秋芳^{ハシ}

此花三月はかりにあらず、九月に有と云心也。又冬日の詩に、

水陸^{スイリク}群芳^{グンポウ}已^ハ帰^ル久^ニ 花王^{ハナオウ}独^ニ 自^ミ 綻^{ハナ} 盈^ミ 枝^エ

水草も野山の花もちりはてし冬枯に、此花はかり有との仕立也。此詩、右の発句と聊^{いさ}かよひ侍。和漢は万里の境をへたつといへと、詩哥の作にいたりては、しらすして通用する事、殊勝^{シュツボウ}に覚え侍也。又近

代和にも春夏の外に見え侍は、他の季にも作意有へき物也。又名取草、廿日草等の異名の内に今一有て、はいには一座二句たるへし。(五13オ)

457 古の字 連に折嫌也。はいによみこゑに替て五有へし。古にいにしへは二句去也。昔は句によりて嫌はす。年を経るは句によりて二句去也。(五14オ)

458 故郷 只一。名所か旅の間に一。連に二也。はいにかはりて三も有へし。惣して故郷にしなく有。居故郷と云は、わか旧里也。おほくは京の事也。哥人は京を出所とする故に、打任て故郷と云は京の事也。名所の故郷と云は、奈良、志賀、難波等也。旅の故郷と云は、旅にて京の事を云句也。此ゆへに故郷に都、京、九重などは、連に折きらひ、はいに面去也。但右のうち居故郷には、句によりて都を付也。

故郷は聞にあつまのはてにして かやうの句若あらは、都を付てもくるしからすと知へし。又はいに名所の故郷過て、古き都又有へし。又月の宮古、龍都^{リウド}いづれの故郷にも嫌はす。又右の内、名所の故郷は居処に打越嫌也。又故郷は連にて初の面に出されと、旅の故郷は有也。はいには句によりて、いづれにても有へき也。(五14オ)

459 藤 只一。藤原一。藤氏ともする也。新式に季をかへて無用と云は、植物に一出たらは、外には季をかへても有へからすと也。はいには又有へし。畢竟連に藤一。氏に一。藤衣自然に出て三也。はいに今一加て四も有へし。藤原は氏の外、名所にも有也。藤衣は山賤

の衣也。又忌^{イミ}の中の衣をも云也。

限有はけふぬき捨つ藤衣はてなき物は涙也けり

又先輩懷^{イノチ}旧^{イノチ}の発句に、

郭公なれもやきなく藤衣^(五十五才)

460 富士の雪 説々侍と、冬の季に治定^{チヤウテイ}する也。万葉の哥、

富士かねに降^フつむ雪は六月の望^{ミヅノキ}の日消^{キユ}てその夜降^{キユ}也

このゆへに、きゆる、初雪等は夏也。只は雑也と云説も侍と、此後代々の哥人、富士の雪とはかりを冬の季に用來也。風雅集冬の部に、

高根にはけぬか上にやつもるらん富士のすそ野のけさの白雪

新千載集冬の部に、

けぬか上に珍しけなく積らし富士の高ねのけさの白雪

又新古今集にも冬の部に見え侍。又句に、

白雪にそめいろの山か富士の嶽^{タケ} 宗祇

又他の季の古句、

五月までかのこまたらの富士の雪 紹巴

富士の雪つもるか秋の風さむみ 同^(五十五才)

461 古^{フルキ}枕^{マクラ} 古ふすま哀傷^{アイシヤウ}の心有と、つよき方へ引れて恋也。打越哀

傷用捨^{ヨウシツ}すへきよしの説有と、信用すへからす。譬^{タトヘ}は月花の句は花に

引れて春に成と、打越に秋の用捨なきかことし。^(五十六才)

462 古寺の軒^{ノキ} 同庭なと云ても居所にあらず。右家の字の下に注也。

^(五十六才)

463 ふもと 只一。名所に一也。俳には只の内に今一加へし。又ふも

とに山もと、連に面きらひ、はいに七句去也。^(五十六才)

464 船^{フネ} 連に七句去也。はいに五句去へし。句によりて旅也。宇治^{ウヂ}、伏見^{フシ}等の川舟は旅にあらず。淀^{ヨド}の川舟は旅也。西国へ行人のため也。

惣して旅人を船まで送ると云は、淀の事也。関送り、関むかへは逢坂の事也。又かへる舟、泊舟^{トウフネ}、つなく舟等は旅にあらず。又渡舟^{ワタフネ}、海路の

舳^{ハツ}は旅也。若橋のなき川に里人のためにも有事なれば、句によりて

旅に有へからす。又声分^{フシバク}小舟、すて小舟、たななし小船、うつほ舟等は

旅にあらず。又舟岡山、船木山などは水辺にあらず、名所也。船の

字には連にて五句去、俳には三句去へし。^(五十六才)

465 文^{モン} 恋に一。旅に一。文学^{モンガク}に一章^{一章}は此内也。外に筆ノ跡とも

する也。はいにはいひかへて今一加て四も有也。^(五十七才)

466 筆 只一。はいにはよみこゑの内に今一加へし。筆跡に鳥跡、連

俳ともに折嫌也。^(五十七才)

467 雪^{ユキ}吹^{フキ} 連にて雪に面きらへは、俳に七句去也。風、吹、降等の字に、

連に五句去は、はいに三句去へし。^(五十七才)

468 冬^{フユ}枯^{カラ} 野か山かを句にむすひてする也。植物に打越きらふ也。又

冬枯の芦火、冬枯の芦屋などいひても同前也。冬枯の芦たつなとも、

植物、水辺両方にきらふ也。^(五十七才)

469 吹^{フキ} 字去也。笛吹なとは、風舳にはきらはす。風の字には二句去

也。^(五十七才)

470 ふしつけ 冬也。水辺也。生類に打越嫌也。柴には、連に折きらひ、はいに面去也。冬柴を川に入て置は、魚こそる也。

泉川水のみわたのふしつけも氷はかりに冬はきにけり(五十七)

471 更 折きらふ也。はいに面去也。夜分也。月更と有て又夜の更は有也。はいに露更る又有也。月とも夜ともいはす。露更とはかりも有也。又右の外に、秋更る、年ふくる有へし。又更にふかきは句によりて二句去へし。惣して初夜より明るまで、次第にふくると云也。

(五十七)

472 深に 浅二句去也。凡相對する詞は二句去と知へし。たとへは浅からすと云はふかき事也。此ゆへに浅と云にふかき心こもる也。遠に近き、重に軽き、かやうの問いつれも同前也。又同しなから、夜に昼は對せず。朝夕有故也。白に黒も對せず。外に色有故也。白からすと云て、黒き事に定まらざる故也。かやうなるは付ても不苦也。

(五十八)

473 降物 連に三句去は、俳に打越きらふ也。降物に咎ふく舟なと付へからす。又笠にふり物、句によりて付と簀には付へからすと知へし。(五十八)

二

474 恋の字 連に二。はいにはよみこゑの内に今一加へし。昔こふる、都こふるなど、こひにあらされと此うち也。鹿、猫、雉子などのつまこひ、連に折かへて有は、はいにも同前也。扱待恋、逢恋、別恋、などの哥の題にいつるは各連にて一座に二つゝ也。はいには三も有へし。是は待と云字、逢と云字の入たる句の事也。句法右待の字の下

に注侍也。又たのむる、恨、しのふ、とふなどは恋にむすひて連に一

也。はいに二有へし。又余波、つれなき、俳、偽、等は連俳ともに恋に一つゝ也。又中恋は連に一、すきて媒有は、はいには仲人又有へし。又連に恋の文過て筆跡は有。章はなし。俳も同前。(五十八)

475 恋山 こひのつもりたる也。又奥州と出羽の境に有名所也。句に、

たかきはいつれわかこひの山 名所也。恋也。

恋山茂き小篠の露分て入そむるよりぬるゝ袖哉

又源氏物語に、恋の山には孔子もたふれと有也。恋には孔子もたふれ給と也。頼黒大臣の実なるも、恋には本心を忘てたゝならずと也。(五十九)

476 恋草 植物にあらず。但茂る、枯なといはゝ、うへものに打越きらふへし。(五十九)

477 木枯 初冬也。連俳ともに一句也。森の名所に又有也。木枯は植物にあらず。木にも木にも二句去也。梢は付句きらふ也。枯、枯木など、連に折嫌ひ、はいに面去也。又句、

かつちりて行木からしの庭 若かやうにしたては植物也。又笛の曲に有。源氏物語に、

木枯に吹合する笛の音を引とゝむへき言のはそなき(五十九)

478 木ノ葉の雨 冬也。植物也。落葉の音雨に似たると云は、降物にあらず。又雨の音落葉ににたるは降物也。句法松の字の下に有。(五十九)

479 木葉衣 植物也。衣類也。上古は葉をつくりて衣とせし故也。(五十九)

480 木玉 木の字、玉の字、ともに字去也。山彦、天彦ともに木魂也。いづれも連俳ともに折きらふ也。魂には連に面去、俳に七句去也。

(五20オ)

481 梢 只一。花、松の類に一。梢秋此内也。九月の異名也。梢は植物に打越嫌也。俳には右二の外今一加へし。又木の字、末の字、梢に二句去也。枝は字去也。(五20オ)

482 九重 只一。俳も同前。都の異名也。都には連に折嫌、はいに面去也。九の字面に一つ去也。(五20オ)

483 詞 只一。ことのは一也。詞に葉嫌す。言の葉に葉は字去也。又いふ、てふなどは詞に二句去也。いふ、てふの間も二句去也。詞林は植物にあらず。詩哥の事也。又詞に諺等も二句去也。又道といはされと、言の葉とはかりもうたの事に成也。句、

なかむるに言のはも哉秋の月 (五20オ)

484 氷 只一。月、涙に一。霜あらしの間に一。つらゝ、垂氷の間に一。四也。冰室は此外也。已上新式のこととは也。右の内、こほり、薄氷等

は水辺也。冰様も同前也。外は水辺にあらず。氷に冰室、連に面去、俳に七句去也。又俳には右四の外いひかへて今一有へし。又氷は流るゝ、とくる、ひまなといへは春也。(五20ウ)

485 莓 莓むしろ植物也。敷は夜分也。居処にあらず。苔衣、苔のたもととは述懐につよく引れて、尺教にあらず。苔の庵、苔の戸等は植物也。居処也。(五21オ)

486 子 親子の沙汰は右おもしろに注也。俳に子は二也。鳥、獸、竹、子

なとにいひかへて已上五も有へし。小の字付句も嫌す。子、子なとよみかては同字別訓也。(五21オ)

487 心の月 近代、影、光等をむすはされと、面の月もたせ来也。(五21オ)

488 心の杉 植物に打越嫌也。心の直する也。此故に神木に由来也。句に、

ほのめかす心の杉の夕月夜 杉の木のものにもる月也。一景有し也。月花も物のかけよりほのめくを興とする也。

月清し扱は一筋雲もかな(五21オ)

489 心の松 植物に打越嫌也。不変の事を云也。又難面をも云也。

枯やらて心の松もあちきなや(五21ウ)

490 心の花 正花也。植物に打越嫌也。詞花は正花にあらざる也。

(五21ウ)

491 心の駒 こゝろの猿など生類にあらず。心のさはかしきを云也。

意馬荒走六塵境 心猿飛遊五濁枝(五21ウ)

492 心友 たとへは月花は心の友にしてなと云は、人倫にあらず。真ある心の友も哉といふやうの句は、人倫なるへし。又心に試、志別字有は二句去也。(五22オ)

493 比 韵には折に一つ去也。俳には五有也。中には字去也。折時、日来等二句去也。(五22オ)

494 去年 今年一つ去也。俳には二つ去も有へし。こゑも同前也。

(五22オ)

495 小鷹狩 鶉狩とも云也。外に名のある小鳥は付と、鶉は付さる也。

(五22オ)

496 小鳥渡 秋也。色鳥も同前也。小鳥とはかりは雑也。(五22オ)

497 衣 連に七句去、俳に五句去也。又衣に袖は付さる也。又衣川、衣手の森は衣に字去也。(五22ウ)

498 越路に 越の字二句去也。越路に東又名所等打越きらふ也。(五22ウ)

499 此面彼面 源氏物語に、このもかもの柴ふるひと云り。

筑波根の此面彼面に影は有と君が御影に増陰はなし (五22ウ)

500 こそ 留りには千句に二はかりと云り。俳には一座一句也。中には二句去也。又上にこそと云ては、けれ、ね、め、へと留る也。(五22ウ)

え

501 江 只一。名所に一也。俳には今一加へし。(五23オ)

502 えに 一句也。俳に縁辺又有也。(五23オ)

503 えそ 一也。えひすに折嫌也。いづれも人倫也。

こさふかは曇やせまし陸奥のえそにはみせし秋の夜の月

東夷南蛮西戎北狄と云也。いづれも田舎のはてをいふ也。(五23オ)

504 得て たよりえてなとに聞えて伝えてなと付句もきらはす。(五23オ)

さ

て

505 寺 只一。名所に一也。俳には、此外寺号か又よみこゑの内に今一加へし。(五23ウ)

506 手 折に一つゝ也。俳にはよみこゑのうちに今一有へし。上手、下手は七句去也。又手に袂は二句去也。袖はきらはす。手に手枕は、

連に面きらへは、はいに七句去へし。(五23ウ)

507 てにきは そ、かはなとにこりては二句去なり。大かたその文字のところゝにてし侍也。(五23ウ)

あ

508 芦 水辺也。雑也。下萌、角くむ、若葉等は春也。ほは秋也。枯葉、はわたは冬也。連哥にいひかへて声は三也。俳諧には今一加也。又ほわた、句に

まことに似たる中の偽と云に、

芦のはは重し衣の綿ならて 専順 (六1オ)

509 芦田鶴 水辺にも植物にもあらず。冬枯の芦たつたと云は、植物也。芦鴨は水辺也。冬也。植物にあらず。されとも句体によるへし。芦雁も植物、水辺にあらず。問。右三色の内、鴨はかり水辺にて

雁たづ水辺のかるゝ事いかん。答。鴨は水辺はかりにすむ物也。雁

は水かき有と、陸にもすむ故也。(六1オ)

510 東に 越路、つくしなと打越嫌也。名所も同前也。四阿は連俳とも

に折嫌也。破風なくて雨滴の四方へおつる屋也。又はいに東はいひ

かへて三はかりは有也。東琴は、むかし弓をならへて弾はしめし也。

又曲にも有也。又連に、東に東は折きらへは、はいに面去へし。関東

なといはゝ、あつまに連俳とも折嫌也。(六1ウ)

511 東遊 トウユウ 求子^{モトメゴ}など、神楽^{カグラ}の舞の名也。冬也。夜分也。神祇也。昔三保の松原へ天人下りし時、人間に残し置たる舞也。故に東遊とも、駿河舞とも云也。(六二〇)

512 青に アヲ みとり二句去也。黒き、白きなどの外の色は、付句もきらはす。(六二〇)

513 跡 アト 字去也。但鳥跡、手跡、筆跡など連俳ともに折きらふ也。又句に、

いつくにかかへてねくらの鳥跡 かやうにしては、文字の事にあらねば、手跡、筆跡に字去なり。又古跡の心は、連に二有は、俳に三も有へし。住はてし跡、古寺の跡などの事也。(六二〇)

514 網代 アミヤシ 冬也。うつは秋也。生類に打越嫌也。氷魚^{ヒコイ}とる物なれば付す。網に、連には折きらひ、俳に面去也。又網代に苗代など、連に折きらひ、はいに面去也。(六二〇)

515 県召 ケンサウ 正月十一日外官の除目也。県は田舎也。小除目とて前かと礼儀をならひて、又大除目とて当日に出也。(六二〇)

516 鮎 アヲ 夏也。若鮎は春也。さひあゆは秋也。又干鮎は雑也。俳に季をかへて二有へし。(六二〇)

517 浅茅生 アサチ 雑也。居所に打越きらふ也。又浅茅とはかりは、居処にきらはす。又浅茅生の小野、居所にあらざる也。(六二〇)

518 汗 アセ 無名に出る汗は夏也。古詩に、

沾^{シメ}衣汗^{アセ}似^ニ淋^{リン}と有は、夏日の題也。又句、
流るゝはかり汗を出ぬる 夏也。(六二〇)

519 白馬の節会 ハクマノセツエ 正月七日に禁中に白馬を率て観覧にそなへ奉也。説々侍とも、一説に、後漢の明帝の時、天竺より一切経を白馬にをふせて来り、初春に入浴せし也。それより仏法流布の国となり、安全に治まりし吉例にて、和にも初春に白馬を大内へ入給也。句、

のほる七日の月の長閑さ と云に、

白馬を御階^{ミカイ}に人のつらなりて 宗祇 (六三〇)

520 霞走 カサハジ 春也。踏哥^{タツカ}の節会と云也。降物に打越きらふ也。天武天皇の御宇より始也。正月十四日は男たふか、十六日は女踏哥也。女御、宮々をめぐりて催馬楽^{サイバガク}をうたひかなつる也。むかし初春十四日の夜年越の余波^{ヨリハ}を惜みて、浴中を遊子^{ユウシ}のめくりて、月に乗してうたひし事より始也。世にうたひ、小哥のはやりしも、此余風也。年中行事哥、

此殿はこゑさへすめる雲井哉かさしの綿の白き月夜に

このとのはうたひ物也。かさしに綿をまく也。源氏初音の巻に高巾子と有も此事也。六位の舞人着する也。右のうたは、

此殿はむへも富けりさき草の三葉四葉に殿作せり

この本哥也。このうた、催馬楽にふし付てうたひかなつる也。連

にさき草のこゑともする也。扱うたのこゝろは、さき草は良材也。

檜也。三葉四葉はむねの破風也。本内裏の殿作也。小野のことく也。又句、

そのほとくのしるき哥人 と云に、

玉敷のあらはしりは明はてゝ 庭上の砂を、霞にあらされと、沓

にてけたてゝ走歩也。(六三オ)

521 雨 二。さめ一。あま一。四也。雨にあまは折嫌也。さめは雨のうらに有也。さめにあまも面きらふ也。さめは春雨、むら雨等也。

此内に一。雨に夕立、五月雨、しまき五句去也。右四の外、そゝく、あまり、なかも、ふるなど有也。雨に五句去也。余の降物には打越きらふ也。已上連哥の式也。はいには雨三。雨にあまは面去也。さめもいひかへて二有也。雨に七句去也。あまも二有也。さめにあま七句去也。雨に夕立、五月雨、時雨、しまき三句去也。松風の雨、川音の雨、木葉の雨、これらは似せ物也。連に一有は、俳にはいひかへて二つ有へし。若句躰降物にならば雨かすの内也。松風の雨の下に、句の差別あらはし侍也。(六四オ)

522 あま雲 句躰によりて、降物になるとならざる差別侍也。

天雲のよそにも人の成行かさすかにめにはみゆる物から

これは降物にあらず。又、

雨雲のよそにのみして降事は我ある山の風はやみ也

是はふり物也と知へし。(六四ウ)

523 關伽むすふ 水辺也。尺教也。夜分也。あかたな、あか桶等同く夜分也。寅の一天にくむ法水也。むすふ、あかつきなといひても、水に二句去也。又舟のあかにも付なす也。船中には水入と云をいむゆへあかと云也。又あかは水の梵語也。水には嫌はすと云説有と、きらふへき事勿論也。問。尺迦は能仁と翻す。能の字、仁の字に嫌ふへきや。答。能仁とつゝけて尺迦の事にいはゝ尺迦に嫌へき事勿論

也。又能の字、仁の字他の事にいはゝ、嫌へきやうなし。関の字、伽の字余の事にいふ時、水にきらふへからず。たとへは有明と云時は、月にきらへと、有の字、明の字は月にきらはさるかことし。(六五オ)

524 嵐 二。嵐山は此外也。但吹音のあらし山なといはゝ、二の内也。俳にはいつれにても一座に三は有へし。(六五ウ)

525 朝の月 只一。朝の字入すして朝時分の月今一有也。俳にはけさと又有也。又月の明残る、東雲の月などに折かへて又有也。惣して朝の月は十七日より廿八日迄也。(六五ウ)

526 朝 只一。けさ一。俳にはあさと又有也。臘は此外也。又朝附日、月にきらはず。朝日也。(六六オ)

527 朝日山 天象時分ともに嫌はず。但句によるへし。朝には連に折去、俳に面去也。(六六オ)

528 秋風 只二。内一はのもし入也。俳には只二、のの字入て一有へし。(六六オ)

529 秋夜に 長き心むすひて過たらは、その折に長夜、連俳ともに有へからず。(六六オ)

530 秋寒 漸寒、夜寒、朝寒、はた寒などの内に、秋の季に一也。俳に二有へし。又秋月のさゆるは、さやかなる事なれと、秋のさゆる過て、連俳ともに月のさゆる有へからず。(六六オ)

531 秋田 植物にあらず。秋の字入されと、色、なひく、ひた、鳴子なと、又雁、鹿追やうの事句に結ては、植物に打越嫌也。又雁、鹿なとむすひても、追やうの句体にあられは、秋にはなれとも、うへ物には

きらはすと知へし。(六六ウ)

532 秋去衣 七夕の具也。衣類にあらず。衣の字、秋の字には常のこ
とく嫌也。(六六ウ)

533 秋涼し 秋のあつき、連俳ともに同じ面きらふ也。(六六ウ)

534 曉 只一。夜分也。とらより明るまてをいふ也。川たれ時、し
のゝめ、あかつきの事也。あさほらけは早天也。夜分にあらず。(六
六七)

535 晨明 連に二有は、俳に季をかへて今一加へし。蠟燭等此外也。

折かへて又有へし。有は二句去、明は字去也。又有明にあすとは付
す。けさ、あしたは嫌はす。又有明残は夜分也。入は夜分にあら
す。又有明に月次の月二句去也。夜分の月は連に七句、はいに五句
去也。又日と星には、連に三句、俳に打越嫌。(六六七)

536 明すくる 夜分にあらず。明はてゝ、明しはてけり等同前。朝夕
の時分はともに打越嫌也。明もはてすは夜分也。(六六七)

537 明に あけほの、夜分のかれは二句去也。同じ夜分は、連に五句
去、はいに三句去也。(六六七)

538 明暮と つゝきたる詞、時分にきらはす。朝夕の二字には二句去
也。(六六七)

539 明に あす二句去也。戸を開などにはきらはす。明に開、付句き
らふ也。(六六七)

540 あけぐれ 夜分、時分ともにきらふ也。夜の明かたに、少くらくな

る時也。明に字去也。暮にも夕時分にも嫌す。又明ほの俳に二也。

夜分、時分等に嫌也。(六六七)

541 明石 水辺也。岡は山類也。水辺にあらず。元来赤石なれば、明
に嫌す。石には折嫌也。(六六七)

542 天 天原、天人などかはりて、連に折嫌也。はいにはよみこ急の内
五も有へし。空に二句去也。但天の字の心にちかき空ならは字去
也。(六六七)

543 銀河 舟、橋などむすひても、水辺にあらず。天の字五の内也。逢
瀬といへは夜分也。又名所の天川は水辺也。(六八オ)

544 扇 夏也。連にかははりと二也。俳に団又有へし。又扇に風付て
くるしからすと云説有と、付さるに治定する也。常には風のためは
かりにはあらされと、連俳に至ては夏の季になせは、風の用なれば、
二句去へき事勿論也。又置は秋也。譬は舞人の扇置も秋也。(六八
オ)

545 淡雪 降とあはく消を云也。惣して淡雪、初雪、あられ、霜の消は
冬也。(六八オ)

546 槿 朝の字、顔の字に二句去也。又朝のかほに仕立たる句ならば、
常のことく嫌也。(六八ウ)

547 暖 春也。長閑、ぬるむなと二句去也。又火のほとり、重服等の
暖も春也。句、

牛は霞のかたはらにたつ と云に、
暖に移る夜しるし寅の時 紹巴

はいに暖氣も春也。(六八ウ)

548 粟津 水辺也。名所也。原、森は水辺に非ず。大津も海に付たる所なれば水辺也。又奥州の会津、濃州の石津等水辺にあらず。(六八ウ)

549 菖 水辺也。夏也。菖に限て、野にふくとしても、菖枕も水辺也。

人名は各別也。(六八ウ)

550 逢坂 山類也。関も同前也。逢には字去也。相には二句去也。(六九オ)

551 螢 人倫也。水辺也。一座一句也。俳に二も有へし。又あまのたぐなはは、たくる縄也。(六九オ)

552 景趣 消息ともかく也。有の字、様の字に二句去也。(六九オ)

553 あたりに ほとり、野へなといひかへて二句去也。(六九オ)

さ

554 五月雨 梅雨此内。連に一也。俳には二なから有へし。梅雨、植物にあらず。但、

今朝降や春は花咲梅雨 昌叱

かやうの句体は各別也。(六九ウ)

555 桜 只一。遅桜一。山桜も此内也。紅葉に一。已上三也。はいには四も有也。又桜かりは尋てありく事也。桜田は深山桜の事也。桜人はうたひ物也。春也。植物にあらず。人倫にあらず。(六九ウ)

556 桜鯛 春也。植物にあらず。桜には、連俳ともに折嫌也。つねに

木葉鯛と云小なる物也。桜の比此名有也。桜貝も此類也。常にはすたれ貝と云あかき貝也。(六九ウ)

557 桜麻 夏也。植物也。苧とつゝけては雑也。植物にあらず。(六九オ)

す

558 桜井 名所也。水辺也。植物に打越嫌也。(六九オ)

559 桜川 植物に非ず。雑也。(六九オ)

560 大桜 花咲すと云説有と、山桜に似て葉大に、老木に成て花まはらに咲也。

くゝりしていさみに行む大桜(六九オ)

561 篠の庵 植物にあらず。居所也。篠枕はうへ物也。さゝめはさゝに似たる物也。さゝに字去也。さゝとしの、連に面嫌、はいに七句去也。すゝも同前也。此三色異名同体也。三色なから竹には、連に五句去、俳に三句去也。又三色なから、たかひのきらひやうも字去也。(六九オ)

562 さむぎ 只一。他の季に一也。俳にこゑなといひて又一あるへし。(六九ウ)

563 さゆる 冬に一。他の季に一也。はいにはさやかと又有へし。又冬の寒過て、秋の句にさゆる、面かへて連俳ともに有也。月にむすひて、さゆる二はなき也。(六九ウ)

564 里 居所也。字去也。里々とつゝきては、居所に打越嫌也。千里は居所にあらず。里神楽は夜分也。委かもしに注待也。(六九ウ)

565 催馬楽の名の草木等 植物にあらず。季はそれ／＼に持也。子細

は絵の字の下に記侍也。(六11オ)

566 鷺 雑也。水辺にあらず。連に白馬と二也。はいには今一有へし。(六11オ)

567 佐保姫 神祇にあらず。立田姫の下にしるし侍也。(六11オ)

568 酒 一の外、霞、くむ、酔、竹葉、盃等にかはりて、連に二有は、俳に三有へし。(六11オ)

569 盃の影 同ひかり、面の月もつ也。秋なり。夜分也。酒三の内也。哥、

有明の心地こそすれ盃の光をそへて出ぬと思へは (六11オ)

570 坂 一。名所に一也。山類にあらず。俳には今一只の内に有也。(六11ウ)

571 咲 一座四句也。俳に五も有へし。正花にむすひては連俳ともに一句也。(六11ウ)

572 され 春去、夕去也。助語也。但春去は花の去心有。秋去は葉の去心有か。夏され、朝去等とはなき也。俳にいひかへて折嫌也。(六11ウ)

573 猿 一。ましら一也。はいにはひよみに今一有へし。山類にあらず。(六11ウ)

574 さひしき 二也。神さひて、句によりて折嫌也。つれくは面去。しつかは二句去也。已上連俳同前也。又さひしきと云に、恋の句付すと云は、恋路には一方ならぬものおもひ有は、さひしかるへきやうなき也。又述懐を付す。さはかしき世をきらひて、樹下石上をた

のしむ心にさひしかるへき様なし。又旅に付す。旅客は見聞につけ珍しき事のみに有は、さひしかるへき事にあらず。旅にてさひしき人は連俳の友にはたらず。山林をさひしきとする人は、堅固の道心にあらず。恋路にさひしきは本意の外也。上來三ヶ条、古来連哥の習也。然とも一往の理也。右の道理をわきまへて、その上にて付は、かへりて妙句有へき物也。作は無尽の物なれば也。(六11ウ)

575 早苗 夏也。水辺にあらず。(六21ウ)

576 沢 一。名所に一也。はいには今一加也。(六12ウ)

577 小に 小、小なと付句嫌也。(六12ウ)

578 小と小 小と小、小と小は字去也。(六12ウ)

579 任 他、さの字、有の字に二句去也。(六12ウ)

き

580 蛭 只一。神楽のうたひ物に一也。冬かけて有と秋也。神楽の時は生類に嫌はず。冬也。はいに、筆つむし、させてふ虫などの内に有へし。蛭、毛詩に、七月在野、八月在宇、九月在戸、十月蟋蟀入我床下。さむさをいとひて次第に人家にちかつく也。又古筆きりくすに成といへり。いまた古事見当らず。句、

壁のうちに文字は有けり

古筆きりくすとや成ぬらん させてふ虫、

秋風に裂ぬらし 蘭つゝりさせてふ蛭なく(六12ウ)

581 雉子 一也。はいに雉と又有へし。春也。狩場の雉子は冬也。こ

ゑとか鳴とか有は春也。ない鳥かりは、とまり山とて、山にねて曉雉の鳴を聞すへて、爰かしこの山に有を、夜明て狩也。聞すへ鳥とも云也。春也。(六13オ)

582 砧 只一。はいには衣うつと又有也。衣類に打越嫌也。きぬに字去也。夜分にあらす。きぬたしてうつとは、しけく打事也。(六13ウ)

583 北祭 賀茂の臨時也。冬也。寛平の帝、侍従と申し時、賀茂川に遣遙し給し給し、高樓よりこゑ有て、祭行ひ給は位につけんと、託宣有しより始也。告のことく也。(六13ウ)

584 霧 そひき物也。降物に打越嫌。霧海は水辺にあらす。但霧海南針なとは水辺也。句躰によるへし。霧のまかき、聳也。居所に打越嫌也。垣には、連に面去、俳に七句去也。(六13ウ)

585 衣々 只一。衣類に打越嫌也。衣には字去なり。夜分也。はいには恋の外に花のきぬく、又有へし。別の字、恋ならは、連に面きらひ、俳に七句去也。他の別は二句去也。(六14オ)

586 昨 只一。はいにはよみこゑの内に今一有へし。昨日のかね、けふの鐘ともに入相也。(六14オ)

587 岐岨 木に二句去也。信濃路七里の名なれば、川も里も有ゆへ、山類にあらす。(六14オ)

588 岸 只一。名所に一。彼岸一也。はいにはよみこゑの内に只のを今一加也。水辺也。彼岸と云は仏境也。水辺にあらす。尺教也。又彼岸ぞ春也。春秋兩度の物は春に成也。新式春日祭の下に見え侍也。(六14オ)

589 菊 只一。はいに他の季に又有へし。(六14ウ)

590 樵 木に二句去也。人倫也。こる木植物に非ず。(六14ウ)

591 木に 薪二句去也。木字去也。木とかはりて、二方植物遁は二句去也。又木と木の間字去也。(六14ウ)

592 桐 初秋也。葉となくとも秋也。鳳凰のすめる木也。花は夏也。(六14ウ)

593 狐 只一。夜分也。俳にはいひかへて又有也。(六14ウ)

594 君 大君人倫に非ず。恋の君は人倫也。(六14ウ)

595 きもし みさりき、おもひきの間二句去也。浅き、近きのきもし嫌す。(六14ウ)

ゆ

596 夕 只二。ゆふは折に一つゝ也。ゆふへにゆふ面去也。俳に夕三ゆ、ふは五也。夕にゆふ七句去也。又夕、ゆふ等に誰かれ、暮、曉等三句去也。春、秋の暮、年の暮なとは夕に二句去也。又夕附日は夕日也。五の内也。(六15オ)

597 夕暮 只一。俳には夕ま暮又有へし。又夕暮に明ほの打越きらふ也。(六15オ)

598 夕月 すきて、連に暮の月有は、俳には句躰かへて今一有也。又夕月夜有へし。(六15オ)

599 夕顔 夏也。暮の字に嫌す。夕に字去也。夕時分に仕立たらは、朝時分にも、暮の字にも常のことく嫌也。又夕かほの宿は植物也。

(六十五)

600 夕立 只一。六月也。夕時分にあらす。然とも昼より後に有やうにする也。杜詩に、

三吳六月忽懷慘 晩後点滴來蒼茫

又六月こほりふる事有。是をひふると云也。則字書に 電雨氷也。洩岷間 雨電曰白雨 然ハ氷ふるを白雨と云へき事なから、古詩に、

崩騰白雨襲人寒と驟雨の題に見え侍は、白雨ともよむへき也。

又白雨に夕は字去也。暮の字、立の字は二句去也。又俳には夕たつ雲、夕立風など一。白雨と二は有也。夕立雲などは夕の字数の内也。又夕時分也。(六十五)

601 夕立の雨は 雨かすの外也。雨に字去也。又夕立に雲を付て、打越に雷、電 など不可然。是新式の旨也。(六十六)

602 白雨に 蜩、稻妻むすひては夏也。新古今、後拾遺の旨也。然とも句躰によるへし。兩季の物むすふ句の仕立、花紅葉の下にしるし侍也。(六十六)

603 向後 行す多二つム也。俳には向後三、行末と替たる間、連俳共に面去也。向後に行の字二句去也。末も同前也。(六十六)

604 夢 七句去也。はいに五句去へし。無名の夢は恋也。夜分也。世は夢などは夜分にあらす。(六十六)

605 雪 四。春雪、氷室の雪、富士の雪等此内也。何もその所々に記侍也。扱四の内、一は他の季に有之。似せ物の雪はうらに有也。花の

雪、頭の雪等也。降物にあらす。句に、

夏の月さなから影は雪なれや

かやうの似物は、俳にて雪に七句去也。又本の雪五は有也。又雪にふゝき、みそれ、連に面去、はいに七句去也。(六十六)

606 雪に 霰付と云説有と、付へからす。字書雪初作未作花円如稷粒撒而下と有。粒雪、雜雪など漢に云なれば、雪にちかき物なるゆへ、みそれ、ふゝきなど雪にきらふに准て、連に面きらひ、はいに七句去也。(六十六)

607 雪ま 残雪、とくる、余波、消、雪霽等春也。初雪、淡雪、みそれ、霜等の消は冬也。(六十七)

め

608 目 只一。うきめ一。木のめ一也。はいには人のめ、折に一つム也。他の事にうらに一つム也。(六十七)

609 めく 色めく、時めく等連に折きらふ也。はいに五もあるへし。(六十七)

610 めり める等二句去也。(六十七)

み

611 湊 只一。名所に一。はいには只の内に又有也。春、秋のみなどもこの内也。哥三月尽に、

暮て行春の湊は知らね共霞に落る宇治の柴船

又九月尽のうたに、

年毎に紅葉と流る立田川みなとや秋のとまり成らん (六十七ウ)

612 嶺 只一。名所に一。はいには只の内に今一也。嶺に高ね、富士のね、連に折嫌ひ、俳に面去也。(六十七ウ)

613 都 只一。名所に一。旅に一也。はいには此外鄙都、又龍都、月都洛中、京等の内に今一有へし。九重雲上、大宮、位山、仙洞など都に面去也。俳に七句去へし。京洛、都の間は折嫌也。又都は名所にあらず。田舎には二句去也。(六十七ウ)

614 都鳥 水辺也。都に折嫌也。はいに面去也。又文字はかりのきらひやうなれば、九重、故郷などにはきはらず。又子細有て、此鳥は冬に非ず。

いさゝらは昔をとほむ都鳥難波入江に今を啼なる

こゝろを人になしてとはゝや

恋るとも知しな遠き都鳥 宗祇 (六十八オ)

615 三日月 一句也。はいには他の季に又有也。又三日月出るは夜分にあらず。入は夜分也。(六十八オ)

616 砌 新式に居所にあらず。連に庭に折きらへは、はいに面去へし。(六十八オ)

617 簀に 笠打越きらふ也。みのに降物は付す。笠には早にも忍にもきる故、句によりて降物付也。又簀虫雜也。(六十八ウ)

618 身に入 秋也。二也。はいには三也。人倫に嫌也。冷寒、風等二句去也。学の身に入などは冷、風等の身に入事にあらざれと、秋の季

をもつゆへ、冷、風、寒に二句去也。(六十八ウ)

619 御祓 過てはらへなし。右にも注侍ごとく、天照太神、惡神を退治し給へは、惡神小蠅と成て、人を煩を、六月はらへする也。(六十八ウ)

620 行幸 当今のを行幸と書、院のを御幸と書也。いつれにても連俳共に一句也。(六十八ウ)

621 宮 神祇に二。内一は名所也。皇居に二。内一は名所也。吉野の宮、高天の宮等也。右連俳同前也。(六十九オ)

622 三寸 空腹に用は、肌三寸寒氣をさくると云也。然とも御酒などもかくゆへ、御の字に二句去也。(六十九オ)

623 道に 岐、玉鉾、九折二句去也。くはしくは路の字の下に注也。

(六十九オ)

624 水に みくき、みこもりなと、連に三句去は、はいに二句去へし。

(六十九オ)

625 三字仮名 連に面きらひ、俳に七句去也。おもひ、おもふ、かへる、かへり等也。思ひとおもひの間也。おもふとかはりては字去也。他准之。又こゝろ、なみたなとの下の字、うこかされは三字かなにあらず。又もたゝ、はたゝ、けりな、ぬらしなど、てにをはの三字かなと書也。是もおなしきらひやう也。(六十九オ)

626 見に 試、鏡、記念など二句去也。(六十九ウ)

し

627 鹿 只一。かのこ一。すかる一也。はいには、紅葉鳥、いつしか鳴

なとかへて今一。四也。かの子かるは夏なり。鳴としても同前。惣して鹿もすかるも、かくしても秋也。かをさしてなとは雑也。又春日野に鹿の有事は、むかし鹿島の明神、飛給てより也。

鹿島よりかせぎに乗て春日なる三笠の山に浮雲の宮

根本は四所の明神にてましませと、是より五所也。

昔年は五の教あらぬ世に 云に、

いはるそへたる春日野の神 紹巴 (六十九ウ)

628 塩 只一。焼に一。汐一。三也。俳には俗語のうちに今一有へし。塩に一入は嫌はす。塩木こる山路なとは山類水辺也。塩屋は居所に打越嫌也。(六二十ウ)

629 時雨 秋に一。冬に一也。露時雨は秋也。時雨の露は冬也。初時雨、なみたの時雨、月にむすふ時雨、木葉の時雨、川音の時雨等はみな冬也。蟬のこゑの時雨に似たるは夏也。はいに季をかへて、時雨三也。又時の字、時雨に嫌す。(六二十ウ)

630 下蒚 春也。野、山、原なとむすひてす也。植物に打越嫌也。霜、雪等にむすひても春也。何の草とも見えざる内也。下草、下紅葉も、山か森かをむすひてる也。(六二十ウ)

631 下紐 衣類也。下帯に折嫌也。名所に又有へし。又帯も下帯も衣類にあらず。常に衣類はなれて有物也。下紐は下のはかまの紐の事なれば、多は恋也。夜分也。衣類也。(六二十ウ)

632 信夫郡に 忍草、忍恋嫌はす。但句躰によるへし。又しのふのやます恋しきなと云詞、山の字には字去也。名所にも山類にも打越嫌

也。しのふのうらみなとも准て知へし。かやうの詞すきて信夫、連俳共に又有也。(六二十ウ)

633 島 只一。名所に一也。俳には只の内に今一加也。山類水辺也。

但池の中島、川島等は水辺はかりにて山類にあらず。淡路島、蓬島なとは山類にも水辺にも非ず。松島、小島は山類水辺也。室八島、田蓑の島その所々にて注待也。その外国々の島、右の趣にて去嫌推て知へし。(六二十一ウ)

634 清水 雑也。くむも同前也。むすふ、せくは夏也。むすふ清水に水涼し、連俳ともに折きらふ也。きよきと云詞、清水に付句嫌也。

(六二十一ウ)

635 志賀の山越 北白川の滝のかたはらより登て、如意か嶽こえに出る也。今は此道なし。古今に、しかの山越にて女の多くあへりけるに、

梓弓春の山辺をこえくれは道も去あへす花そちりけり

女を花にしてよめる也。同集冬部、志賀山越に、

白雪の処も分すふり散は巖にも咲花とこそみれ (六二十一ウ)

636 柴戸 一。同庵植物にあらず。かやうの句過て、薪に又有也。はいに三も有へし。山柴、なり柴なとは植物也。(六二十一ウ)

637 しをり ふかき山路のしるへに、草木を折かけて置事也。植物にあらず。

吉野山こそしのしをりの道かへてまたみぬ方の花を尋む

又柚人の木を切て跡に梢をさして、山神に手向をしをりと云也。是

は植物也。又しをり戸は山家に有物也。是居所也。(六21ウ)

638 霽滴 新式に山の滴、軒の霽、降物にあらずと有。滴は松、岩かね、苔等に有物也。又霽に滴、連に折嫌、はいに面去なり。霽、滴、露たかひに付さる也。(六22オ)

639 時分 きらひやう朝夕にかはりては、打越嫌也。同時分は字去也。又同時分二句つゝかす。(六22オ)

640 白 しろきとくの間折嫌也。しらとかはりて面去也。はいにはしろきとく面去也。かはりてこゑにも有は七句去也。又白と云時白に嫌す。(六22オ)

641 敷 袖のかたしきなと一句也。はいにかはりて二は有也。恋しきなと敷にきはす。よみ付たる詞也。又恋しきにわひしなと付句もきはす。(六22ウ)

642 しまぎ 時雨と風と同時になる物也。雪そへは雪しまぎと云也。みそれは雪と雨也。ふゝきは風と雪也。扱、しまぎ時雨に折きらふ也。かはりたる降物には打越きらふ也。(六22ウ)

643 白髪 述懐也。恋故ならは各別也。老に、連にて面去は、俳に七句きらふ也。

人をおそれぬことほりそある

白髪はさらにすくなる物なれや 宗祇

公三道世間一惟白髪貴人頭上不曾饒

とつくりし詩の心也。(六22ウ)

644 しはらく 二也。はいに今一加也。しはしに、連に折嫌ひ、俳に面

去也。(六23オ)

645 し文字 むつまし、はつかし等のはたらかぬはしとまりにあらぬ也。又しとまりにきはす。(六23オ)

646 し文字 過去のし二句去也。聞し、見し也。むかふし二句去也。

遠し、清し也。やすめ字のし二句去也。花をし、月にしなと也。右たかひにちかひては、付句も嫌はさる也。(六23オ)

647 して とまりには折きらふ也。四也。紅葉して、時雨してなと也。はいには五も有へし。又句にたとへは、

世中は哀はかなき物にして

かならずといひしも問ぬ人にして

かやうなるはすると云心にあらされは、連俳ともにしてとまりのうらに有へし。(六23ウ)

648 茂み 山、野、原、葉、句にむすひてする也。一句の物也。はいにはかはりて又有へし。(六23ウ)

ゑ

649 絵にかく草木 植物にあらす。その色によりて、その季有へし。

是新式の旨也。たとへは、柳、桜などを多にかきたる躰は、植物にはあらされと、春の季をはもつ也。他の季の物も同前也。ゑにかく鳥、獸等も、生類にはあらされと、それくゝの季はもつと云事也。問。季をもつほとならん草木は植物にきらひ、鳥獸は生類に嫌へき事なるに左あらぬ義如何。答。季は春秋にかならず三句はつゝく物に侍

は、たひく用ひたき事有故也。又植物、生類はきらひなきを重宝とするゆへ也と知へし。かやうのさかひしはらく依怙に侍と、古人ふかき道理に通達の上にてさため給し事也。(七1オ)

ひ

650 一葉ちる 初秋也。桐の事也。淮南子に一葉落而天下知秋と有し本文よりいふ也。(七1ウ)

651 一葉船 新式の和漢篇に、一葉船は旅也と見え侍也。古詩にも、

共泛瀟湘一葉船 と有も旅の句也。

世本云、黄帝雲笈云帝見浮葉一方為舟二臣助以二舟撒黄帝

一葉の水にうかふを見て、はしめて舟をつくり給也。又貨狄割木為舟とも見え侍也。(七1ウ)

652 一夏 こもる、行ふなど、尺教也。尺迦の御母摩耶夫人のために、

一夏九十日報恩經をとき給しより始也。又一夏とはかりいは、尺教にあらず。(七2オ)

653 一文字 面に一つ也。俳にはよみこゑのへたちもなく七句去也。余のかすの字は、連に四有は、俳に五つも有へし。(七2オ)

654 一村 居所のこゝろすきて、植物に杉の一村、薄の一むらなと又有へし。(七2ウ)

655 蛸 初秋也。只一也。日の字、暮の字には少もきらはす。されとも句に、

ひくらし鳴てみちいそくなり

かやうの句、日にも暮にも夕時分にも嫌也。俳には蛸と過て、かやうの句又有へし。又蛸に蟬は、連俳ともに折きらふ也。(七2ウ)

656 冰室 守としても夏也。つきこむるは春也。水辺也。只一也。氷、

つら、雪なとに、連に面きらひ、俳に七句去也。又薄氷、垂氷、或は氷様等、同じくひと云故、連に折嫌ひ、俳に面去也。冰室は惣して卯

月朔より九月尽まで献する物なから、六月朔をつかさとる也。扱

冰室の由来は、仁徳天皇の御宇、額白大中彦の御子、鬨鶏と云処へ御

狩に出給に、野中に一庵有。内に老翁有。召て事のよしを問給に、冰

室也と答奉る。皇子、炎天まで冰ある事如何と有は、翁申やう、春雪

をあなにつきこめて、六月取出し服し侍は、極熱をさけて無病と申奉

る。翁は仙人也。野中は仙境也。今の和州宇多郡也。それより毎年

この処にて、冰室もらせ給し也。今の都にては、むかしは松ヶ崎に

有。そのうち丹波の桑田郡にもらせ、毎年六月には献する也。元来

仙人なるゆへ、冰室守として人倫にあらず。又仙境なる故に、山類に

もあらずと知へし。(七2ウ)

657 檜原 只一。俳には此外檜垣、檜皮などの内に今一有也。物の名、

名所はこの外也。(七3ウ)

658 独 只一。人倫也。二人、三人は人倫にあらず。扱又恋に一。月、

松などの内に一也。俳によみこゑの内に今一加て四は有也。又独に

一、文字二句去也。一方こゑの時は付句も嫌はす。(七3ウ)

659 引田 田をむすひてする也。秋也。植物に打越嫌也。引の字、板

の字に字去なり。鹿、猿等の物のためにする事なれば、付句きらふ

也。かゝし驚し、そうつ等は人形也。ほくしは火をくしにはさみた
る也。いづれも田をむすひてする也。

660 水漬つき植し田面にひたはへて又袖ぬらす秋はきにけり (七三ウ)
660 単衣 一文字に二句去也。一方こゑにいふ時、付句もきらはす。

(七四オ)

661 火 折に一つゝ也。はいにはよみこゑのうちに今一加へし。火串
螢、狐火等、連に面きらひ、俳に七句去へし。かゝり、ともし、いざり
など火に字去也。ねらひかり、鶺鴒など火に二句去也。又ひかりと
云詞句によりて、日にも火にも成也。又火たくは夜分にあらす。衛
士のたく火は夜分也。(七四オ)

662 日に 月、星等、連に三句去。俳に打越嫌也。又日に星は付句も嫌
す。又日に幾日、けふなときらはす。又日次の日にきのふ、けふは二
句去也。日次の日、月次の月、天象にあらす。又日に朝附日、夕附日
字去也。日に月次の月、打越きらふ也。又日に日本、日光山などは字
去なり。(七四ウ)

663 ひかり 月、日、星に一。花、雪の内に一。光、陰に一也。俳には今
一加て四もあるへし。(七四ウ)

664 平野祭 卯月上申日也。仁徳天皇の御唐なり。年中行事哥、

柵取卯月きぬらし宮人も平野の宮にゆふかつらせり

北野と同社也。延暦年中に造営有し也。祭は貞観にはしまる也。
臨時の祭は寛和に始也。社は四処也。今は三ヶ処也。一処は賀茂に
有也。又紙屋川、北野と平野の間に有也。むかしかみをすぎはしめ

し処也。

風や筆木葉絵かける紙屋川 宗祇 (七四ウ)

665 楸 初秋也。只一也。俳には季をかへて今一有へし。

初塩は楸風ふくはまへ哉 心敬 (七五オ)

666 日蔭の糸 神祇也。日蔭のかつらとも云也。賀茂の臨時の祭にか
さしにする也。(七五オ)

667 姫 二なり。橋姫、佐保姫など也。俳に人倫のうちに今一加へし。
(七五ウ)

668 昨 説々侍とも神供也。日本紀には神籬とかける也。(七五ウ)

669 常陸帯 鹿島の明神の祭の日、独の女にあまたの人こゝろをよす
る時、その人々の名ともを布の帯にかきて、神前にかくる也。おほか
る中にうらかへる帯あれば、そのぬしとあふ也。恋也。神祇也。

東路の道のはてなる常陸帯かことはかりに逢んとそ思ふ (七五ウ)

670 鄙 田舎の事也。只一也。俳には二も有へし。鳥のひな、ひな遊
には少も嫌す。

天離ひなのみやこに天斎かく恋すらはいける印あり

家持か越中にての作也。ひなにゐなから都をこふるにもいきかひの
有也。田舎人はかやうに京をこふる心も有ましきと也。(七五ウ)

671 ひな 鳥に一。ひな遊に一也。ひな遊、春にあらすと云説侍と春
也。ひなは雑也。(七五ウ)

672 領巾 風衣とも書也。天人などの袖に有物也。又ひれふる山の事
欽明天皇のころ、大伴の佐堤比古と云人、唐へつかひに立ける時、つ

まのさよ姫、余波を惜て松浦山にのほりて、きぬのひれをふりてその舟を招きしによりて領布振山と云也。肥前也。

海原や沖行人をかへれとかひれふらしけん松浦さよひめ (七六ウ)

673 ひろふかひなき など云詞、生類、水辺等に打越嫌也。(七六ウ)

674 他国 人倫にあらず。人に二句去也。(七六ウ)

675 冷 初秋也。ひゆるも同前也。(七六ウ)

676 平秋の句に 恋の秋の句付は、恋の秋にてはたす也。春の句も同前也。新式かくのことし。秋の句にて恋の句をつまぬやうにする也。又季恋はかならず二句は結ぶ物と云説あし。たとへは平秋の句四句来て、五句めに恋の秋の句あらん時、季恋一句にてもよき也。

(七六ウ)

も

677 紅葉 只一。梅、桜などに一。草に一。已上三也。はいにはよみこゑの内に今一加也。紅葉に色の字、二句去也。葉は字去也。草のもみちに草のはと、木の紅葉に木のはとの間、連に折きらひ、俳に面去也。字去と云は、木、草、竹にたかひにかはりての事也。又紅葉に山の色、秋の色、野の色など、連に折、俳に面去也。(七六ウ)

678 紅葉の橋 植物にあらず。水辺にあらず。但句体によるへし。

天川紅葉を橋にわたせはや七夕つめの秋をしそまつ

うちまかせて紅葉の橋と云事なき也。哥のこゝろは、七夕の秋をまちて今夜あへるは、天川の橋に紅葉をわたせるかとうたかひし也。

崇徳院の御本には、橋の字を削て舟の字有しと也。近代哥に紅葉の橋とよめる事如何と云り。(七七オ)

679 百千鳥 春也。説々侍は、相伝有へし。鶯に連俳ともに折嫌也。

百千鳥 春は物ことに改れとも我そふり行

むかしの春に身をやなさまし

百千鳥さへつるこゑも老はうし 宗長

右のうたにて付なせる也。(七七ウ)

680 百敷 居所にあらず。雲上、雲井などに、連俳ともに折きらふ也。

(七八オ)

681 襟 物に二句去也。物を思ふは物に字去なり。おもふは三字かな也。(七八オ)

682 最上川 上の字二句去也。出羽也。のほれは下ると付はうしろ付也。

最上川上は下るいな舟のいなにはあらず此月はかり

月影もいな船ならし最上川 昌琢(七八オ)

求子 神祇也。人倫の子に折きらふ也。神楽の舞の名也。(七八オ)

684 唐 一すきてからくにと又有也。俳にこゑにか、漢などの内に今

一有也。又から衣、から紅は連俳ともに面に一つも也。是等はから

といへと、初の面八句の内にも有也。(七八オ)

685 鴈 秋也。草くきも秋也。植物也。生類には打越きらふ也。茂は

夏、枯は冬也。蠡やうのむしを草のさきにさして、雪中の食物のため

に置と也。然とも用に立す、はかなきたとへにいふ事也。尋あはぬ

也。

春されは鵲の草茎みえずともわれは尋む君かあたりを
是は或人、道にて女に行あひて里をとひければ、鵲の草くきとこたへ
しゆへよみし也。

仮にゆふ庵も雪に埋れて尋を侘る鵲の草茎

たつねかぬると云事也。(七八ウ)

686 藻の花 夏也。海のもの事に非ず。又もにすむ虫は雑也。もくつ
植物に打越嫌也。(七九オ)

687 森 只一。名所に一也。俳には只の内に今一くはふへし。又森も
林も植物に打越嫌也。(七九オ)

688 武士 人倫也。俳にはこゑに又有也。又武具、武芸等も此内也。
(七九オ)

689 物いふに 語、詞、のたまふ、てふなといつれも二句去也。(七九オ)

690 望月の駒 八月廿三日也。信州より献也。(七九オ)

691 文字余 二句つゝきて二句去也。あまさすしてよきを無用の文字
余と云也。(七九オ)

せ

692 関 只一。名所に一。春、秋又恋などの内に一也。俳には関東、関
西など加て四も有へし。外に水せき、面かへて有也。又関とはかり
は旅に非ず。元来四境七道の関は、国の大禁をしらしめんため也。
関こゆるなといはゝ旅也。関むかへ、関をくりは逢坂の事也。又連

に初の面の内、旅の関はあれと外の関はなき也。俳にはいつれにて

も有へし。又関の戸、関屋、関の荒垣など居所に打越きらふ也。又山
にある関は山類、浦に有関は水辺也。又関白と云は、関のこゝろすこ
しもあらされは付句も嫌はす。関 白と連にする也。同字別訓也。
(七九ウ)

693 蟬 只一。俳に二也。空蟬も此内也。ひくらしは連俳とも折きら
ふ也。格物論に、蟬は四時ともに有事を記せり。詩に多は秋に見え
侍と、連俳には夏の季也。

蟬鳴て夏かとおもふ木陰哉 宗長

又空蟬とはうつくしき蟬也。源氏物語に、もぬけの事を云り。蟬蛻
と云物也。

空蟬の身をかへてける木の下に猶人からのなつかしき哉 (七十オ)

694 迫責 こゝろもことはもかはれば、付句もきらはす。(七十オ)

す

695 巢 連に古巢として只一也。俳に二有也。いつれも春也。水鳥の
巢は夏也。鶴の巢は雑也。鳩のうきの事は、にもしに注侍也。鶯の
巢に郭公のある事、句に、

黄鳥巢中有杜鵑 とみえ侍也。又、

鶯の子かははつねのほととぎす 宗祇

紀州粉川にての作也。又哥林良材などにも見え侍也。(七十ウ)

696 薄 只一。尾花一。すくろ、はやなとに一。三也。俳には薄二有て

四也。薄は惣名也。秋也。ちるも同前也。枯は冬也。尾花は獸の尾に似たるを云也。秋也。すくろは春也。燒野に残てすの黒を云也。

粟津野のすくろの薄角くめは冬たちなつむ駒を嘶る

ほやの事、ほもしに注侍也。しのすゝきは、ほに出ぬを云也。

月そ入ほに出にしものすゝき 紹田(七10ウ)

697 鈴鹿路 山類にあらず。関も同前也。鈴には連俳ともに折嫌ひ、

鹿は字去也。(七11オ)

698 栖 只一也。俳には物かはりて今一也。家に字去なり。住に二句去也。又栖、山家、隠家いづれも居所に打越きらふ也。(七11オ)

699 住居 居所に打越きらふ也。住の字、居の字には字去也。栖と住

居は連俳ともに面去也。又すむとはかり、居と斗は居所にきらはす。(七11ウ)

700 涼 只一。秋に一也。俳には心すゝし又有也。又夏をわするゝ

と云やうの句体には、連に折きらひ、俳に面去也。(七11ウ)

701 須磨 摂州也。水辺也。寺は山類也。上野も水辺にあらず。又須

磨のみそきと云は、三月三日に有し事也。源氏物語に見え侍也。巳

日の秋ともする也。春也。毛詩に、

水上以秋 除不祥ことみえ侍。和漢共に有也。(七11ウ)

702 炭焼 冬也。山類にあらず。炭かまは山類也。炭は物かはりて俳

に二也。墨には二句去也。墨は只一也。連俳同前。(七12オ)

703 硯水 水辺にあらず。俳に硯海又有也。名所也。(七12オ)

704 簾 只一。居所也。俳には釣簾、玉簾、みすなといひかへて二也。

たれこめても此内也。(七12オ)

705 冷し 二也。俳に三也。さむき心とおそろしき心也。身に入に二句去也。(七12オ)

706 杉 只一。こゝろの杉一也。俳に今一加て三也。杉の窓、居所也。

植物にあらず。心杉はこゝろの下に注侍也。(七12オ)

707 すそ野 山類にあらず。山類にむすはされともする也。ふもとに

二句去也。すゑにも二句去也。(七12ウ)

708 管 只一。器財に一也。俳には物かはりて今一有也。菅原は句に

よりて植物にあらず。(七12ウ)

709 相撲 秋也。万葉に相撲使となくなり。七月十六日、廿五日、禁中

にて有し事也。諸国の供奉人あつめてとらせ給し也。(七12ウ)

710 洲 二。内一は名所也。真砂、すなに連に面をきらひ、俳に七句去

也。又俳に今一有也。(七12ウ)

711 すゑの松山 山類也。松の有ゆへの名なれば、植物にも嫌也。松

には常のことく嫌也。むかし夫婦有けるに、すゑの松山を指て、浪の

こえむ時わするへきと契ける。この故に人のこゝろのかはるを波こ

すと云也。是は至て小山なるゆへ、むかひを見るに浪のこゆへき様

に見ゆる也。能因か哥枕に本の松、中の松、末の松とて有と云り。

浦近く降来る雪は白浪の末の松山こすかとそみる (七12ウ)

712 すらん たとはは学文をすらんは、三字かな也。返すらん、出すら

んははね字也。(七13オ)

713 捨 身、世、子などに替て二は有也。(七13オ)

714勝に、まさる二句去なり。(七13オ)

京

俳諧 韻学大成に劍紫詩語多俳諧と見え侍。俳は戯也。諧は和

也。唐にもたはふれてつくる詩を俳諧と云より、古今集にされうたを俳諧哥と定給し也。これになそらへて、連哥のたゝことを世に俳諧の連歌と云也。元来連哥の一昧なれば、新式の法にそむかざるを式目とする也。しはらくも此旨にそむかは、此道の異端なるへし。

されはこの書に、新式の旨、はし／＼かきあらはすといへとも、秘事に至ては筆をさしをき侍ぬ。露程きえやすき身のほとをおもひ侍は、筆ついてに書残しなからん後世のすぎ人のなくさみにせん事をおもひ侍なから、われに伝へ給し人のふかく秘し給けるを今更もらすへきは、かへりて道にそむき侍ける事をおそれこゝろにまかするにもあらず。残多やみ侍ぬ。この道に入給はん人は師にしたかひて学び、先輩につきて尋給へし。(七13ウ)

懷紙 端つくりの事、若賦物をとらは、たとへは花には籠笠等の字雪には餅の字など俳諧体ながら夢想の連歌、又懷旧の連歌などかくにならひて俳諧の連歌とかくへきよし貞徳の説と云り。此義然へきもの也。俳諧とかくへからず。近年俳諧の書毎に他をそしれる筆力見え侍は俳の字かく故にや侍らん。たかひにそしりあへる事、和哥の本意に侍かは。他をそしれる人のうへに若あやまりの侍らん時はいかゝし給へき。和漢ともに博学の人にもあやまりは侍とも、後人

あらたむる時はちしむるとはみえず。況や凡俗のしわざにをいて、いつれの人にか誤のなくてはつへきなれば、みたりにおとしむる事いかゝ侍らん。又先輩のたかへる事を道のためにあらたむるは是道也。その人道のためをおもはゞ本意にこそはあらめ、あたにおもふへき理なし。(七14ゼ)

発句 八雲御抄に発句者於三当座二可然之人得之。無功人不レ可レ為と有也。発句は一座の巻頭なれば、宗匠、貴人、珍客、老人等の外は有へからず。雪月花の句、又一ふし有。前句に至ても貴人、宗匠の作をまつへき物とぞ。況や発句をや。但千句の内の発句月次等に至ては宗匠のはからひに任すへき也。又発句はその座の風景、時節の相應、賓主の挨拶による事、常の習也。又新宅、元服、祈禱、追善などの作、いづれも時宜によるへし。又切字、下知、二字切、三字切、三段切、まはしてする句、聞発句、かくし題の発句、はね字の発句等くはしう記にいとまあらず。相伝有へし。(七15オ)

脇の句 亭主役といひ来也。宗匠より発句あらは、たとひ打聞えて別義なくとも、作者より句のこゝろを説顯すやうに挨拶有へき也。況や古事、本説等にてしたてたる句、分明に聞えざるも心得かましようけとする事はいなきわさ也。作者の思入を聞届て、しはらく重吟してわきの趣向たとひうかふとも、宗匠よりさしつうけて句作して又宗匠より改削をうけて在付へき也。但賓主の時宜によるへし。扱付心は時節相應を第一とする也。又発句によりて相對して付る有。打そへて付る有。ちかひ付、心付、比とまりなどの格はつねのな

らひ也。取なして付る事、古来きらふといへとも発句によりてかならず取なして付る有。又本哥、本語等を翻案して作したる発句のわき、たとへはうたのかみの句にて仕立たる発句に、則そのうたの下の句の詞をとりて付る事よからぬ格也。詩聯句の対もとへは、花前蝶と云に柳上鶯など付る事、大に嫌ふ習有也。葉底蚕とか草際螢とか、あらぬかたに付なす也。連俳の作も是になそらへて知へし。又かへし題の発句、聞発句等にはわきの心いさゝか分別有事也。又句の下の子を韻と云事、てにはにてとまらず、文字にてとむる故也。連俳の発句は聯句の章句也。脇は対なり。元来詩聯句にならひて韻と云也。又腰のて、第三へ心得有てなきやうにする也。(七五ウ)

第三 発句宗匠なれば、脇は上段のことく、第三は貴人也。又貴人の発句ならば、第三は宗匠也。客人発句の時、第三は挨拶人也。扱付心は転するを本意とする也。詩にも第三は転する也。但脇の句、発句への付やうをかんかへて、若ちかひ付、取なし付のわきならば、転するに及さる也。わきにて転したるゆへ也。扱大かたてとまり也。上の五文字に置くゝやうの花咲て月出てなどの詞にてとむるかよき也。或ははね字にてとむる也。はね字の事は右にしるし侍也。又うたかひの切字の発句の時、第三はね字ならず。うたかひの句は二句去ゆへ也。又うたかひの発句に、脇にこしのてもし有は、第三はてとまりもはね字もならぬやうの時、もなしとまりにとまり也。さあらずともむまれ付たるにとまりも、なしとまりならはくるしからず。又文字にてとむる事有也。惣してむかしは句の留りの沙汰なし。宗

祇よりの格式也。脇の句、文字にてとむるゆへ、懷紙に文字のたけならはさるやうにてとまり、はね字のかろきかなにてとめたる物也。

此ゆへに若脇の句に、てにをはにてとまらば、第三は文字にて留る也。但かやうの事は名人にゆつりて常の人は常の留りの外はせぬ物とこゝろうる。是又此道の習也。花のさかり哉、月の光哉、と云は、さかりにて、ひかりにて、と云にかよふゆへ、かなとまりの第三は、にてとまらずとむかしはいへれと、長閑かな、しつか哉といはれさるゆへに、近代さたなし。(七六ウ)

四句 四句めふりとて、也、けりなどのかるき留りにて、ふしなきをこのむ也。古事、本説なときらふ也。(七七八)

五句め 三て五らんとて、第三てとまりならば、はね字あらまほしき也。第三て留りにあらすは、てとまりこのまほしき也。初の面に同字をいむと云も懷紙の面をたしなむゆへ也。てとまり、はね字は句の一跡なれば、おもて道具也。此句にてのかし侍は、七句めにてあらまほしき也。然とも此等はさたまりたる法にはあらず。こゝろえのためまで也。ならぬ句づくりを是非とたくむは、かへりて句のさまたけにもなり侍は、有にまかせて用へき也。(七七八)

七句め 月の定座也。若月の句、当句までのひは、座中の老分にゆつるへき也。第三の後は上の句を賞讃とし、その内にも月の句、又一順の終に執筆の句、有はその前句を老分の句とさためたる也。又八句めへ月のこほるゝ事も自然は有事也。是は子細有ての事也。又面の内同字はきらへと、てにをはの二句去のことはのかなは二去

て有也。又発句に神無月、六月などの月次の月にて、光影をもむすはすは、有明にて月をもたする也。かねて有無的の字を仕出さぬやうに心得也。俳には玉兎の影、銀兎などにて月をもたする事も有へし。又面の内、連にはさし出たる事いづれもきらひ侍と、俳には龍虎等の物にても有也。世の凶事は如何。(七18ウ)

裏 連哥とかはりて九句めより、神祇、尺教、恋、無常、名所、哀傷、何にても有也。又連哥には、四春八木と覺て、四句めに春を仕出さす。八句めにたかき植物仕出さるは、花につかゆる故也。俳には六句めに春を用捨し、拾句めにたかき植物、斟酌有へき也。然とも他の句の出たるを返にもあらされは、春の季出たらは、その春のうちに花を引上、植物出たらはその付句に、花有へき也。又前より植物つかへは、花の袖、花衣等の植物に打越きらふ花、有へき也。又花の前句に秋の字、用捨あらまほしきわさ也。連俳に花と云は、桜の事なれば、春より外に花はあらされは、秋と云字には付にくき物也。又花前に恋の句仕出事、むつかしきわさ也。恋、花の句は連哥の秘事也。伝受なくは恋、花の句には有へからされは也。又月花の句は花につよう引れて春也。但句によるへし。(七19オ)

輪廻の事 たとへは松竹等のけふりに里と付て、又次の句に柴たくなと打越へかへるゆへ、りんゑとてきらふ也。又嵐と云に山と付て、次に富士など付は取なして打越へかへる也。是等を嫌也。他准之。(七20オ)

遠輪廻の事 一卷の内、似たる句嫌也。たとへは初の折の花に、

朝な／＼梢残らす花ちりて

音もしつまる庭の春風 同巻の内に、

花おつる山はさひしく暮はてゝ

かすむみきりにあらし吹也 かやうにかさねて有へからさる也。

又

軒端をさらぬうくひすの声 と花の付句にすぎて、又その巻に、

外面にちかき鳥のさへつり かやうに佛似たる句、同じ花の句に

付へからさる也。又花に松、柳、鳥、梅など千句にも三度はいかゝと

云り。俳には三度は有へし。又長閑、かすみ、春などのかるき字は句

躰かはりたらは、一卷の内にも折へたてゝ二は有へし。又月の句に

も秋、霧、露などの付合は同巻のうちにも又有也。又平句にても同句

体は遠りんゑ也。(七20オ)

本歌 三句めの事、たとへは朝霧と云句に、人丸の哥にて明石と付、その次の句に舟を付るは、逃哥有故也。是は三句にわたらさる也。他准之。

蟹小舟苦吹かへす秋風に独明石の月を見かな (七21オ)

源氏物語の事 たとへは句に、

哀にしけるよもきふの陰 と云に、すゑつむの事を付ては、前句と引合て源氏物語二句に成也。此次に桐壺の更衣の母のすみ荒たる里など付は、三句にわたる也。巻かはりても、同物語なればきらふなり。他の物語も同前也。(七21オ)

裏一順 初の一順のことく／＼と有也。句次迄にも及はさる

也。(七21ウ)

揚句 先輩の説に付さるかよきと也。是は一句に成て付あくみ侍は、一座の興もさむる物也。只あさく／＼と付るよき也。又揚句は案して置とも云り。是は多分前句は花なるゆへ、前三折の花に付たる句とも春の季をかにかへて指合のなき物を分別し、発句より一巻の首尾を思ひ合せ、巻軸のこゝろを案し置時は、あたらずといへと遠からざる也。又揚句は祝言めきたる句躰も時宜によるへし。又発句の作者或は亭主の役にあらず。又初の一順に執筆の句なくは、揚句執筆の役也。又発句に有文字をきらふ也。(七21ウ)

俳言 こゑの字なへて俳也。屏風、几帳、拍子、律の調子、例ならぬ胡蝶、かやうの物は連哥に出れと、こゑの字は俳言になると云にならひて俳言もつ也。又千句連哥に出ぬる鬼女、龍、虎、その外千句の詞、俳言也。又連哥嫌詞の分、桜木、飛梅、雲峯、霧雨、小雨、門出、浦人、賤の女などの詞、無言抄にも紹巴の聞書等にもあまた見え侍也。かやうの物、皆俳言也と知へし。(七22オ)

可レ覚悟事 新宅の会には、もゆる、やくる、などの火の類をいみ、夢想の会には夢の字、左迂のうはさ、追善には、しつむ、おつる、うかはぬ、くらき道、迷ふ道、つみ、とかやうの事、船中には、かへる、沈む、浪風など、いむ事くはしくするすに及はす。その外五体不具のうはさなど、覚えすして連衆の内、心にかゝれる人もやあるへきと思ひめくらすへき物とぞ。(七22ウ)

一座の法 無言抄楚仙の遺誠を略してみつから心おほえのため一

書にしてしるし侍き。

- 一 出座遅参の事
- 一 着座しなをこゆる事
- 一 衣裳諸具分際不相応の事
- 一 難句禁句の事
- 一 高吟或は雑談の事
- 一 隣座の人とさゝやく事
- 一 貴人或は児と同音に吟する事
- 一 自分の句吟する事 同講する事
- 一 他の句難する事 況や他の句返して自分の句付る事
- 一 他の句前の時付合いひ願す事
- 一 自分の句に付さる内座を立事
- 一 若輩より指合くる事
- 一 末座より句数このむ事 同雪月花の句をこのむ事
- 一 睡眠あくひ等の事

右の外、宗祇法師千句の座の法令ありといへとも、しけきを恐てしるし侍す。初学の人、先輩にしたかひて聞給へき物ならんかし。

(七22ウ)

延宝二甲寅年三月吉日

洛陽 書林堂 板行

俳諧無言抄 索引

事項の下にページを示す

23 色鳥	15
22 色	15
21 妹背	15
20 漁	15
19 晩鐘	15
18 庵	14
17 命	14
16 泉	14
15 石清水	14
14 岩	14
13 市	14
12 電	14
11 稲負鳥	14
10 稲延	14
9 稲妻	14
8 稲葉	14
7 出家	14
6 家風	14
5 家	13
4 斎宮	13
3 放生	13
2 伊勢の神	13
1 岩船	12

43 花の散に	16
42 花の雪	16
41 花の波	16
40 花の雲	16
39 花の滝	16
38 花紅葉	16
37 花に	16
36 花に	15
35 花	15
は	
34 楼	15
ろ	
木	
33 衣裳の色の花	15
32 いふに	15
31 幾に	15
30 生田に	15
29 古	15
28 いかにせん	15
27 いつしか	15
26 いつく	15
25 池	15
24 犬	15

68 蓮	18
67 原	18
66 橋	18
65 初瀬寺	18
64 初鳥	18
63 初塩	18
62 鳩吹	18
61 浜	17
60 柞	17
59 葉守の神	17
58 葉	17
57 春宮	17
56 春近き	17
55 春の日と云に	17
54 春月	17
53 春風	17
52 春寒	17
51 花筏	17
50 花田色	17
49 花野	16
48 花の姿	16
47 作花	16
46 花の香に	16
45 花園	16
44 花にむすふ	16

89 経て	20
へ	
88 仏名	20
87 星を唱る	20
86 星月夜	20
85 はや作	20
84 螢	20
83 郭公	20
ほ	
82 にて	20
81 にとまりに	19
面に	19
80 似せ物の花有	19
79 錦に	19
78 鳩	19
77 焚	19
76 炊	19
75 庭の築山	19
74 庭	19
73 雞	19
に	
72 遥	19
71 はなし	19
70 端居	19
69 芭蕉	18

111 律のしらへ	22
ち	
110 岐に	22
109 契に	22
108 散	22
107 路	22
106 鶴	22
105 千剣破	22
104 千里	22
103 塵	21
と	
90 虎	20
91 戸	21
92 豊明の節会	21
93 床	21
94 鳥	21
95 鳥のこゑ	21
96 鳥のぬる	21
97 年	21
98 友	21
99 照射	21
100 訪に	21
101 灯	21
102 宿直守	21

132 小船	24
131 小野	24
130 岡	24
129 遠近	24
128 音に	24
127 遅日	24
126 鬼のしこ草	24
125 鬼	23
124 女	23
123 女郎花	23
を	
122 氷るらん	23
121 氷れる	23
る	
120 ぬるゝに	23
119 寝に	23
118 ぬると	23
117 ぬらんとまり	23
116 ぬ	23
ぬ	
115 ぬれきぬぎす	23
114 ぬかつく	22
113 布さらす	22
ぬ	
112 龍胆	22

156 春日祭	27	148 綿	26	133 小手捲	25
155 神楽の名の蜚	27	147 和田の原	26	134 小に小	25
154 川社	27	146 別の恋	26	135 をしね	25
153 神楽	27	145 別に	25		
152 神祭	26	144 別に	25		
151 神	26	143 若楓若竹等	25		
150 かほよ鳥	26	142 若草若鮎等	25		
149 哉	26	141 若紫	25		
		140 若和布	25		
		139 若菜	25		
		138 若菜	25		
		137 若菜	25		
		136 萱	25		

182 かさね字	30	160 狩	27	157 杜若	27
181 隠題	30	159 垣	27	158 雁	27
180 片敷	30	158 雁	27		
179 借	30	157 杜若	27		
178 刈	30				
177 頭の雪	30				
176 門	30				
175 首途	30				
174 葛城久米路橋	30				
173 風	29				
172 櫛木	29				
171 鵲の橋	28				
170 鵲	28				
169 かけろう	28				
168 茨	28				
167 笈	28				
166 枯野	28				
165 楓	28				
164 影陰景	28				
163 霞の衣	28				
162 鐘かすむ	28				
161 鐘	27				
160 狩	27				

206 竹林	34	193 横川	32	183 代	31
205 竹	33	192 宵	32	184 世	31
204 種蒔	33	191 夜とふも	32	185 桑門	31
203 田の字	33	190 夜を待月	31	186 齡	31
202 滝	33	189 夜さむ	31	187 呼子鳥	31
201 玉章に	33	188 蓬	31	189 夜さむ	31
200 玉の緒	33	187 蓬	31	190 夜を待月	31
199 玉の字	33	186 齡	31	191 夜とふも	32
198 旅	32	185 桑門	31	192 宵	32
197 橋	32	184 世	31	193 横川	32
196 龍田姫	32	183 代	31		
195 龍田	32				
194 龍	32				

230 杣木	35	223 れ文字	35	207 竹宮	34
229 僧都	35	222 例に違ふ	35	208 垂氷	34
228 外面	35			209 誰	34
227 園	35			210 薪	34
226 空	35			211 應	34
225 其咄	35			212 焼火	34
224 そそき物	35			213 七夕	34
				214 高砂の松	34
				215 立木	34
				216 便	34
				217 高野山	34
				218 高ね	35
				219 谷	35
				220 絶	35
				221 嶽	35

256 爪木	38	236 袖のぬるゝに	36	231 袖の香	36
255 継尾の鷹	37	235 袖行水	36	232 袖のぬるゝに	36
254 鶴林	37	234 袖の露	36	233 袖の雨	36
253 鶴	37	233 袖の雨	36	234 袖の露	36
252 躑躅	37	232 袖のぬるゝに	36	235 袖行水	36
251 月見に	37	231 袖の香	36	236 袖のぬるゝに	36
250 月に祈	37				
249 月と	37				
248 月の桂の花	37				
247 月の出塩	37				
246 けふの月	37				
245 月影と	37				
244 月草	37				
243 月の宿	37				
242 月の霜	37				
241 月の雪	37				
240 月いさよふ	36				
239 月	36				
238 月	36				
237 月	36				

280 鳴に	39	273 子日	38	257 椿	38
279 涙川	39	274 願糸	38	258 雛名	38
278 涙	39	275 根に	39	259 露	38
277 眺	39			260 葛	38
276 流	39			261 司召	38
				262 難面	38
				263 使	38
				264 つかはすに	38
				265 仕	38
				266 釣舟に	38
				267 伝	38
				268 つらき	38
				269 妻	38
				270 翅	38
				271 常灯	38
				272 つとまり	38

304 室戸……………41
 303 虫……………41
 302 梅む……………40
 301 らんとまり……………40
 300 らんに……………40
 299 らんと……………40
 298 蘭……………40
 297 ならんに……………40
 296 なりに……………40
 295 也と也……………40
 294 媒……………40
 293 中に……………40
 292 苗代……………40
 291 習……………40
 290 波……………40
 289 無に……………39
 288 夏月……………39
 287 歎……………39
 286 余波……………39
 285 名……………39
 284 難波……………39
 283 泣……………39
 282 鳴神……………39
 281 鳴子……………39

320 浦島か子……………44
 329 浮島原……………43
 328 うきねの鳥……………43
 327 歌に……………43
 326 占……………43
 325 憂……………43
 324 鶯……………43
 323 鶉舟……………43
 322 鶉衣……………43
 321 鶉……………43
 319 むつこと……………43
 318 むさゝひ……………43
 317 紫の花……………43
 316 胸の霧……………42
 315 葎……………42
 314 駅路……………42
 313 馬……………42
 312 埋木……………42
 311 簀……………42
 310 村……………42
 309 群に……………42
 308 急雨……………41
 307 昔……………41
 306 むやくの関……………41
 305 室の八島……………41

354 野中の清水……………46
 353 野守の鏡……………46
 352 野もせ……………46
 351 野に……………45
 350 野山の色……………45
 349 野宮……………45
 348 韻の字……………45
 347 射場始……………45
 346 猪……………45
 345 雲井……………45
 344 井……………45
 343 守宮……………45
 342 うらやまし……………45
 341 植……………45
 340 孟蘭盆……………45
 339 打……………45
 338 うら枯……………44
 337 移……………44
 336 宇治の橋姫……………44
 335 宇治の川島……………44
 334 恨……………44
 333 海……………44
 332 兎……………44
 331 卯花……………44

378 大原祭……………48
 377 大神祭……………48
 376 蒨……………48
 375 麗……………47
 374 起……………47
 373 奥……………47
 372 晩稲田……………47
 371 尾上……………47
 370 男……………47
 369 帯……………47
 368 思ひに……………47
 367 思ひに……………47
 366 老……………47
 365 佛……………47
 364 親子……………47
 363 落葉宮……………47
 362 落葉……………46
 361 萩……………46
 360 長閑……………46
 359 残暑……………46
 358 軒……………46
 357 法……………46
 356 野を焼……………46
 355 野分……………46

402 山姫……………50
 401 箭……………50
 400 藪……………50
 399 柳……………50
 398 屋……………50
 397 宿……………50
 396 欸冬……………50
 395 八幡……………49
 394 暮……………49
 393 国の名……………49
 392 水鶏……………49
 391 くらき……………49
 390 くらす……………49
 389 くらきに……………49
 388 雲峯……………49
 387 雲井……………49
 386 車……………48
 385 くもる……………48
 384 熊……………48
 383 草枯に……………48
 382 草に……………48
 381 薨……………48
 380 草庵……………48
 379 草花……………48

428 松風の雨……………52
 427 松風……………52
 426 松門……………52
 425 松……………52
 424 や文字……………52
 423 八橋の蜘蛛……………52
 422 社に……………52
 421 焼野……………52
 420 築……………52
 419 弥生に……………52
 418 闇に……………52
 417 八重……………51
 416 山に……………51
 415 山科……………51
 414 山里に……………51
 413 山の錦……………51
 412 山柴……………51
 411 山の色……………51
 410 仙人……………51
 409 山かつら……………51
 408 山陰と……………51
 407 山下……………51
 406 山鳥……………50
 405 山に有関……………50
 404 山城のとはぬ……………50
 403 山賤……………50

453 毛をかふる鷹	55	447 楓	54	439 鞠の庭	53	431 松虫	53	429 松風の時雨	53
452 けし	55	446 まし	54	438 株	53	430 松緑	53		
451 けらし	54	445 夕ま暮	54	437 正木に	53	428 松花	53		
450 けりに	54	444 まこも	54	436 枕	53	427 松のこゑ	53		
449 けふ	54	443 籬	54	435 待	53	426 松の字の有名	53		
448 煙	54	442 窓	54	434 所	53				

477 木枯	57	468 船	56	456 牡丹	55	454 獣と獣の間	55
476 恋草	57	467 雪吹	56	455 古の字	55		
475 恋ノ山	57	466 筆	56	454 故郷	55		
474 恋の字	57	465 文	56	453 富士の雪	55		
		464 祭	56	452 藤	55		
		463 ふもと	56	451 古枕	55		
		462 古寺の軒	56	450 古の字	55		
		461 古の字	56	449 牡丹	55		
		460 富士の雪	56	448 故郷	55		
		459 藤	55	447 古の字	55		
		458 故郷	55	446 牡丹	55		
		457 古の字	55	445 下知の詞	55		
		456 牡丹	55				

503 えそ	59	499 此面彼面	59	479 木葉衣	57	478 木ノ葉の雨	57
502 えに	59	498 越路に	59	480 木玉	58		
501 江	59	497 衣	59	481 梢	58		
		496 小鳥渡	59	482 九重	58		
		495 小鷹狩	58	483 詞	58		
		494 去年	58	484 氷	58		
		493 比	58	485 莓	58		
		492 心ノ友	58	486 子	58		
		491 心の駒	58	487 心ノ月	58		
		490 心の花	58	488 心の杉	58		
		489 心の松	58	489 心ノ月	58		
		488 心の松	58	490 子	58		
		487 心ノ月	58	491 心ノ花	58		
		486 子	58	492 心の駒	58		
		485 莓	58	493 比	58		
		484 氷	58	494 去年	58		
		483 詞	58	495 小鷹狩	58		
		482 九重	58	496 小鳥渡	59		
		481 梢	58	497 衣	59		
		480 木玉	58	498 越路に	59		
		479 木葉衣	57	499 此面彼面	59		
				500 こそ	59		

527 朝日山	61	519 白馬の節会	60	507 てにをは	59	504 得て	59
526 朝	61	518 汗	60	506 寺	59		
525 朝の月	61	517 浅茅生	60	505 寺	59		
524 風	61	516 鮎	60	504 寺	59		
523 閑伽むすふ	61	515 泉召	60	503 寺	59		
522 あま雲	61	514 網代	60	502 寺	59		
521 雨	61	513 跡	60	501 寺	59		
520 霞走	60	512 青に	60	500 寺	59		
519 白馬の節会	60	511 東遊	60	499 寺	59		
518 汗	60	510 東に	59	498 寺	59		
517 浅茅生	60	509 芦田鶴	59	497 寺	59		
516 鮎	60	508 芦	59	496 寺	59		
515 泉召	60	507 芦	59	495 寺	59		
514 網代	60	506 寺	59	494 寺	59		
513 跡	60	505 寺	59	493 寺	59		
512 青に	60	504 寺	59	492 寺	59		
511 東遊	60	503 寺	59	491 寺	59		
510 東に	59	502 寺	59	490 寺	59		
509 芦田鶴	59	501 寺	59	489 寺	59		
508 芦	59	500 寺	59	488 寺	59		
507 芦	59	499 寺	59	487 寺	59		
506 寺	59	498 寺	59	486 寺	59		
505 寺	59	497 寺	59	485 寺	59		
504 寺	59	496 寺	59	484 寺	59		
503 寺	59	495 寺	59	483 寺	59		
502 寺	59	494 寺	59	482 寺	59		
501 寺	59	493 寺	59	481 寺	59		
500 寺	59	492 寺	59	480 寺	59		
499 寺	59	491 寺	59	479 寺	59		
498 寺	59	490 寺	59	478 寺	59		
497 寺	59	489 寺	59	477 寺	59		
496 寺	59	488 寺	59	476 寺	59		
495 寺	59	487 寺	59	475 寺	59		
494 寺	59	486 寺	59	474 寺	59		
493 寺	59	485 寺	59	473 寺	59		
492 寺	59	484 寺	59	472 寺	59		
491 寺	59	483 寺	59	471 寺	59		
490 寺	59	482 寺	59	470 寺	59		
489 寺	59	481 寺	59	469 寺	59		
488 寺	59	480 寺	59	468 寺	59		
487 寺	59	479 寺	59	467 寺	59		
486 寺	59	478 寺	59	466 寺	59		
485 寺	59	477 寺	59	465 寺	59		
484 寺	59	476 寺	59	464 寺	59		
483 寺	59	475 寺	59	463 寺	59		
482 寺	59	474 寺	59	462 寺	59		
481 寺	59	473 寺	59	461 寺	59		
480 寺	59	472 寺	59	460 寺	59		
479 寺	59	471 寺	59	459 寺	59		
478 寺	59	470 寺	59	458 寺	59		
477 寺	59	469 寺	59	457 寺	59		
476 寺	59	468 寺	59	456 寺	59		
475 寺	59	467 寺	59	455 寺	59		
474 寺	59	466 寺	59	454 寺	59		
473 寺	59	465 寺	59	453 寺	59		
472 寺	59	464 寺	59	452 寺	59		
471 寺	59	463 寺	59	451 寺	59		
470 寺	59	462 寺	59	450 寺	59		
469 寺	59	461 寺	59	449 寺	59		
468 寺	59	460 寺	59	448 寺	59		
467 寺	59	459 寺	59	447 寺	59		
466 寺	59	458 寺	59	446 寺	59		
465 寺	59	457 寺	59	445 寺	59		
464 寺	59	456 寺	59	444 寺	59		
463 寺	59	455 寺	59	443 寺	59		
462 寺	59	454 寺	59	442 寺	59		
461 寺	59	453 寺	59	441 寺	59		
460 寺	59	452 寺	59	440 寺	59		
459 寺	59	451 寺	59	439 寺	59		
458 寺	59	450 寺	59	438 寺	59		
457 寺	59	449 寺	59	437 寺	59		
456 寺	59	448 寺	59	436 寺	59		
455 寺	59	447 寺	59	435 寺	59		
454 寺	59	446 寺	59	434 寺	59		
453 寺	59	445 寺	59	433 寺	59		
452 寺	59	444 寺	59	432 寺	59		
451 寺	59	443 寺	59	431 寺	59		
450 寺	59	442 寺	59	430 寺	59		
449 寺	59	441 寺	59	429 寺	59		
448 寺	59	440 寺	59	428 寺	59		
447 寺	59	439 寺	59	427 寺	59		
446 寺	59	438 寺	59	426 寺	59		
445 寺	59	437 寺	59	425 寺	59		
444 寺	59	436 寺	59	424 寺	59		
443 寺	59	435 寺	59	423 寺	59		
442 寺	59	434 寺	59	422 寺	59		
441 寺	59	433 寺	59	421 寺	59		
440 寺	59	432 寺	59	420 寺	59		
439 寺	59	431 寺	59	419 寺	59		
438 寺	59	430 寺	59	418 寺	59		
437 寺	59	429 寺	59	417 寺	59		
436 寺	59	428 寺	59	416 寺	59		
435 寺	59	427 寺	59	415 寺	59		
434 寺	59	426 寺	59	414 寺	59		
433 寺	59	425 寺	59	413 寺	59		
432 寺	59	424 寺	59	412 寺	59		
431 寺	59	423 寺	59	411 寺	59		
430 寺	59	422 寺	59	410 寺	59		
429 寺	59	421 寺	59	409 寺	59		
428 寺	59	420 寺	59	408 寺	59		
427 寺	59	419 寺	59	407 寺	59		
426 寺	59	418 寺	59	406 寺	59		
425 寺	59	417 寺	59	405 寺	59		
424 寺	59	416 寺	59	404 寺	59		
423 寺	59	415 寺	59	403 寺	59		
422 寺	59	414 寺	59	402 寺	59		
421 寺	59	413 寺	59	401 寺	59		
420 寺	59	412 寺	59	400 寺	59		
419 寺	59	411 寺	59	399 寺	59		
418 寺	59	410 寺	59	398 寺	59		
417 寺	59	409 寺	59	397 寺	59		
416 寺	59	408 寺	59	396 寺	59		
415 寺	59	407 寺	59	395 寺	59		
414 寺	59	406 寺	59	394 寺	59		
413 寺	59	405 寺	59	393 寺	59		
412 寺	59	404 寺	59	392 寺	59		
411 寺	59	403 寺	59	391 寺	59		
410 寺	59	402 寺	59	390 寺	59		
409 寺	59	401 寺	59	389 寺	59		
408 寺	59	400 寺	59	388 寺	59		
407 寺	59	399 寺	59	387 寺	59		
406 寺	59	398 寺	59	386 寺	59		
405 寺	59	397 寺	59	385 寺	59		
404 寺	59	396 寺	59	384 寺	59		
403 寺	59	395 寺	59	383 寺	59		
402 寺	59	394 寺	59	382 寺	59		
401 寺	59	393 寺	59	381 寺	59		
400 寺	59	392 寺	59	380 寺	59		
399 寺	59	391 寺	59	379 寺	59		
398 寺	59	390 寺	59	378 寺	59		
397 寺	59	389 寺	59	377 寺	59		
396 寺	59	388 寺	59	376 寺	59		
395 寺	59	387 寺	59	375 寺	59		

602 白雨に 66
 601 夕立の雨は 66
 600 夕立 66
 599 夕顔 65
 598 夕月 65
 597 夕暮 65
 596 夕 65
 ゆ
 595 きもし 65
 594 君 65
 593 狐 65
 592 桐 65
 591 木に 65
 590 樵 65
 589 菊 65
 588 岸 65
 587 岐岨 65
 586 昨 65
 585 衣々 65
 584 霧 65
 583 北祭 65
 582 砧 65
 581 雉子 64
 580 葦 64
 き
 579 任他 64

626 見 67
 625 三字仮名 67
 624 水に 67
 623 道に 67
 622 三寸 67
 621 宮 67
 620 行幸 67
 619 御祓 67
 618 身に入 67
 617 簀に 67
 616 砌 67
 615 三日月 67
 614 都鳥 67
 613 都 67
 612 嶺 67
 611 湊 66
 み
 610 めり 66
 609 めく 66
 608 目 66
 め
 607 雪ま 66
 606 雪に 66
 605 雪 66
 604 夢 66
 603 向後 66

649 絵にかく草木 69
 648 茂み 69
 647 して 69
 646 し文字 69
 645 し文字 69
 644 しはらく 69
 643 白髪 69
 642 しまき 69
 641 敷 69
 640 白 69
 639 時分 69
 638 畢 69
 637 しをり 68
 636 柴戸 68
 635 志賀の山越 68
 634 清水 68
 633 島 68
 632 信太郎 68
 631 下組 68
 630 下萌 68
 629 時雨 68
 628 塩 68
 627 鹿 67
 し
 626 絵にかく草木 69

675 冷 72
 674 他国 72
 673 ひろふかひなぎ 72
 672 領巾 71
 671 ひな 71
 670 鄙 71
 669 常陸帯 71
 668 昨 71
 667 姫 71
 666 日陰の糸 71
 665 楸 71
 664 平野祭 71
 663 ひかり 71
 662 日に 71
 661 火 71
 660 単衣 71
 659 引田 70
 658 独 70
 657 檜原 70
 656 氷室 70
 655 鯛 70
 654 一村 70
 653 一字 70
 652 一夏 70
 651 一葉船 70
 650 一葉ちる 70
 ひ
 675 冷 72

697 鈴鹿路 74
 696 薄 73
 695 巢 73
 す
 694 迫責 73
 693 蟬 73
 692 関 73
 せ
 691 文字余 73
 690 望月の駒 73
 689 物いふに 73
 688 武士 73
 687 森 73
 686 藻の花 73
 685 賜 72
 684 唐 72
 683 求子 72
 682 最上川 72
 681 襟 72
 680 百敷 72
 679 百千鳥 72
 678 紅葉の橋 72
 677 紅葉 72
 も
 676 平秋の句に 72

裏 77
 七句め 76
 五句め 76
 四句 76
 第三 76
 脇の句 75
 発句 75
 懷紙 75
 俳諧 75
 京
 714 勝 75
 713 捨 74
 712 すらん 74
 711 すゑの松山 74
 710 洲 74
 709 相撲 74
 708 菅 74
 707 すそ野 74
 706 杉 74
 705 冷し 74
 704 簾 74
 703 硯水 74
 702 炭焼 74
 701 須磨 74
 700 涼 74
 699 住居 74
 698 栖 74

